
IS 福音のコア

朱赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 福音のコア

【Nコード】

N3579V

【作者名】

朱赤

【あらすじ】

テンプレでもらった才能は「ものを作る才能」、そしてあるものを作る権利だった。自分で作ったものの恐ろしさからそれを封印していた主人公。しかし、とある理由からその封印を解く。

ヒロインはシャルロット。東には弱アンチかもしれないけどそんなにはしないつもりです。

エヴァはちょっとだけです。ので期待しないでください。

プロローグ（前書き）

はじめまして朱赤と申します。

作者は初心者ですので文が未熟です。

いろいろ指摘していただけると嬉しいですが、

ただ非難だけは勘弁してください。

ではお目汚しですがどうぞ

プロローグ

初めまして、みんな。アルフォンス・アランだ。

フランスに転生した一般人で現在15歳。いきなり転生とか頭が痛い奴と思われても仕方がない。しかし事実でな、元日本人だったんだよ。

転生前はめちゃくちや運が悪くてな。

生まれてすぐに親は死んでしまうし、親戚中をたらいまわしにされるし交通事故に遭うこと3回、列車事故に遭うこと2回（もちろん俺に非はない）、そのせいで左手は動かなくなるし、大学では卒業研究で使うはずだった装置が火災で使い物にならなくなり、その修理で1年つぶすことになったし散々だった。死んだ理由も薬中つばいのに刺されたからだし、ホントまともじゃない人生だった。

死んだあと神様と名乗る爺さんに面会して聞いた話によると、どうやら自分に与えられた運のパラメータが本来俺に与えられるそれよりも圧倒的に低かったそう。運ってというのは生まれた地域による部分があるらしく自分の運は問題レベルだったらしい（それでも世界的に見ればましらしいが）。

そんなわけで設定を失敗した謝罪に特典付きで転生させてくれるということ。俺が希望したのは

- 1 人間として生まれること
 - 2 ものを作る才能
 - 3 ある程度金持ちになれる程度の運
 - 4 「ピー」の長さを長めにする
こと
- の4つだった。

1 番目はある意味当然だよな。昆虫とかになりたくないし。人間よりもすぐれた種族がいて人間が蹂躪されている可能性もあるけど

それならそれで仕方ない。どんな世界に行くかは教えられないそうなので、少なくともこれを叶えてもらえば人間がいる世界には行けるしな。

2番目はどんな世界でも通用するものだ。人間がいる以上少なくとも道具は存在するし、なければ作ればいい……という建前だが、ぶつちやけこれは前世の装置修理がなかなかうまくいかなかった腹いせから願ったものだ。それとあるものを作る許可をもらった。それはもともと名前しか知らなかったんだが、パチ屋（当然大あたりなんかしない）で見たときに興味がでて映画館まで見に行ったものだ。ただ、なかなかおもしろかった。それで作ってみたいと思っただのだ。ただし呪いをかけられ、完全な状態は作れず中心部分しか作れないプラス成功作は1個だけしか作れず、2個目からは劣化品しか出来ないという制限をかけられた。これは仕方ないだろう。あのラストでは神様化して人類滅ぼしかけてたし、俺も大量虐殺がしたいわけじゃないしな。しかし中心部分だけで意味あるのかね？ いや中心にあう外部を自作すればいいのか。

3番目は2番目と関係する。金がないと物は作れない。才能があっても元手がなければ意味がないというわけで望んだ。

4番目は……うんすまない。カツとなつてやった。今でも反省していない。だって短かったんだもの。小さかったんだもの。ねえ？俺の願ったこと……俺の願望……そんなに間違ってる……？ちなみになぜか神様は4番目だけ渋っていた。よくわからんが「全年齢」とか「ノクターンじゃなくにじファン」とかわけのわからないことを言っていたけど、俺が25時間かけて「ピー」の長さに対する重要性の解説と説得をした結果「長いつてことは素晴らしい」という共通見解に至り、叶えてもらうことができた。

というわけで生まれてから15年。現在庭に建てられた小屋で生活しております。シンジ君状態ですよ。食事は用意してくれるから文句ないし、こうなったのは俺が悪いんだけどね。6歳のときに新

しい理論を考えてノートにまとめていたのを親に見つかったのが原因なんだ。本来なら遊びまわっている年齢で相対性理論の論文とか広げてまとめていたらいくらわが子でも気持ち悪いだろう。

前世の俺はあんまり頭は良くなかった。しかし転生後はなぜか異様に頭がよかったのだ。多分転生した時につけてもらったものを作る才能が影響しているのだと思う。ものを作るっていうのは奥が深い。パソコンを作ろうと思えばソフト面ではプログラムを組むし、ハード面では排熱のための空気の流れやパッケージ強度の計算なんかもする必要がある。

おそらくだが、ものを作る才能の内訳は理系の頭+手先の器用さなのではないだろうか。それにしても異常ともいえ頭の良さだが……

個人的に小屋暮らしは気に入っている。四六時中ものを作っても問題ないし、収納用に地下を掘り進めることもできるしな。友だち呼んで泊らせても家族に何も言われなくていいっていうのも大きいな。

友だちいるの？ってツツコミは無しだ。

一応学校には行ってるからそこでの友達ぐらいいるさ。まあ一番遊びに来るのはクラスメイトじゃなくて「アールー！ あーそーばー！」こいつだが……

「よう、シャルいらっしやい」

中性的な顔立ちとボーイッシュな雰囲気からシヨタにも見えるこのロリはシャルロット・ベルレアン。近所に住む5つ年下のガキンチヨだ。

「今飲み物出してやる」

「オレンジジュースでよろしく」

「遠慮ねえな」

これだけ来てれば遠慮もなくなるか。

シャルは最低週1で俺の家に来る。ただ遊びに来ることもあるが今日の日付を考えると心細くなっただろう。

こいつの母親であるイレーヌさんは通院している。詳しい病名は知らないが結構頻繁に行ってるみたいだ。シャルとの縁もイレーヌさんならみだ。去年散歩中にイレーヌさんが倒れていたのを助けて病院まで連れて行ったのが出会いだっただ。シャルはオロオロしていただけだったけど仕方ない。目の前で母親が倒れて冷静に対処できるチビツ子などいたらお目にかかりたいものだ。

そんな出会いから1年。シャルはイレーヌさんが通院するたびに俺の家に来る。父親はいないらしいし、イレーヌさんも病院には連れて行かないそうだ。10歳だし家で留守番ができないってこともないだろうが寂しいのだろう。

「ほらよ。オレンジだ」

トレイにコップ2つとスナックを乗せてテーブルまで持ってくる。

「わーい、このオレンジジュースおいしいんだよね」

「それなりにいいの買ってるしな」

ちなみにこのジュースからテーブル、果ては地下の拡張費用まですべて株で稼いでいる。

親に最初の資金だけ借りて株をやってみたら大当たり。資金もすっかり利子をつけて返し今ではかなりの資産と化している。ぶっちゃけ両親とは比較にならん程稼いでる。

「んで今日は何するアーマー・コア？ギルティア？デモン？それともモンド・グロツソのビデオでも見るか？」

これらはシャルが得意とするものばかりだ。とっつきにスレイ
ーにロードナイ モンだ。

シャルはこの一年でかなりのゲーマーと化している。いやあ調き
よゲフンゲフン、教育したかいがあったな！

モンド・グロツソっていうのはISの競技会のことだ。ああ、I
Sについて説明を忘れていた。はつきりいってこれは生まれ変わっ
たこの世界の最大の特徴とっていい。

インフイニット・ストラトス 通称IS

篠ノ之束博士が開発した宇宙空間での活動を想定し、開発された
マルチフォームスーツだ。

今から5年前に発表されたのだが、その時は見向きもされなかつ
た。しかし1月後に起きた白騎士事件により事態は急変する。世界
中のコンピュータが一齐にハッキングされ2000発を優に超える
ミサイルが日本に向けて発射されたがその約半数を「白騎士」と呼
ばれるISが迎撃。その後「白騎士」の力を重く見た各国がこれの
捕獲、もしくは撃破しようと戦力を日本に送り込んだが、これをま
た迎撃されてしまった事件だ。このときの死者は皆無ということに
なっている。

ちなみにこの死者が皆無というのは真実でもあるし誤りでもある。
ミサイルの撃墜に関してだが先ほども述べたように約半数しか白
騎士は落としていない。となれば落とされなかったものもあるわけ
で、それが爆発して発生した高波などの二次被害では僅かながら海
岸線沖の集落が巻き込まれ死者が出た。同様に各軍迎撃では白騎士
が落とした戦闘機のパイロットが戦闘に巻き込まれフレンドリーフ
アエアで亡くなっている。つまり白騎士が手を下していないという
意味では死者はいないが、事件全体では死者がいるのだ。

つうかこれ自作自演だよな。この事件で得したの束博士だけだし

……

「ただどそうするとわかんないことがいくつもあるんだが……まあいいや。」

「話がそれだな。」

「そんなわけでISの有用性が示されたわけで国防の主力になっていったわけだが、このISという名の武力のカードを見せ合い「てめえ俺んとこに攻めてきたらいてこまずぞ」という圧力をかけるため昨年に関われたのが「モンド・グロツソ」だ。」

「一応競技の形は取っているけど、見る人が見れば戦争の縮図だろ……あれ……」

「ゲームもいいけどまずは地下のあれ、見たいな」

「あれ見てそんなに面白いか？ 一応完成してるけど動かないんだぞ？」

「うん！ここに来たらあれ見ないと来た気がしないよ！」

シャルのテンションがうなぎ登りなので地下に行くことにした。

俺以外に地下に何があるのか知っているものはほとんどいない。

知っているのはシャルとシャルから話を聞いて見学に来たイレー

又さん、男のロマンが分かる友人数名だ。

地下には冷蔵庫を模した隠し梯子を降りていかなければならない。

まさか冷蔵庫が隠し梯子になっているとは誰も思うまい（普通の冷蔵庫もあるぞ）。

地下はいくつかの階層に分けてある。

一番地上に近いエリアは作業スペース。そこまで広くなく簡単な機械とかならここで作る。両親はここまでしか知らない。

シャルが見たいのはそこからさらに階段を下りた秘密スペースにあるものだ。秘密スペースは非常に深いところまで自分で掘って作った。掘る機械も自作だ。多分普通の建築物なら地下5階相当だろう。建築法？何それオイシイの？ 特殊なコンクリで天井を支えて

いるから崩落の危険性はない。

数分かけて階段を下りていくと扉が見えた。この扉は俺しか開けられないようにパスワードが設定されている。たとえシャルや友人たちがこの中にあるものを運び出そうとしてもここで足止めを食らうわけだ。この内部にあるものはそれだけ危険だということでもある。チープな電子音が解錠されたことを告げる。

扉があくと同時に俺たちを感知し電気が一斉に付く。

内部には『黒』が鎮座していた。

人型のそれは、まるで騎士が王に頭を垂れるかのごとく膝をつき動かない。

シャルがトコトコと駆け足で『黒』へと近付いていく。

「『黒騎士』は今日もかつこいいね」

鎮座するそれを触りながら褒めるシャル。その光景は騎士に褒美の声をかけるお姫様のように見えた。

この『黒』こそ俺が作り上げたパスワードスーツ『黒騎士』

ISが発表されると同時期に完成したこれは、おそらく永遠にここから出ることはないだろう。

理由は3つ

1つ目は白騎士事件だ。おそらくこれを表に出せばこれは兵器として扱われるだろう。それだけの機能がこれには付いている。名前も現存する何よりも強かった白騎士を皮肉ったものだ。

2つ目は性能面。理論上とはいえ現存するIS以上の性能を有す

こいつはここから出したくない。出さないと決めた時から調子に乗って改造を繰り返したためにさらに出せないものになったしな。

最大の問題は3つ目。

「だけど残念だよね。これを動かすコアがないなんてさ」

そうこれが最大の理由。こいつには核がない。胸元にぽっかり空いている穴に核が嵌まるようになっていたのだがその核がどうにもできなかった。

「まあ仕方ないよね。ISコアなんて個人じゃ手に入らないもん」

「そりゃあな。東博士ぐらい頭良けりゃ自分で作れるんだろうがな」
「前に製作に失敗したんでしょ。そこまでは期待していないよ」

シャルには俺がコアの製作に挑戦したがあきらめたと話してある。

「じゃあ上にもどろつか。今日はGGの気分」

「はいはいわかりましたよ。お姫様」

「なにそれ」と微笑むシャルを連れてスペースを後にする。

俺たちがスペースからいなくなったことで再び黒騎士は闇の中に戻される。

俺はシャルロットに嘘をついている。

コアがないのではない。製作に失敗したのでもない。作っていないのだ。

シャル達にはこれはISだと教えた。だがこれができたのは発表とほぼ同時期。

これがISのほすはないのだ。

秘密スペースのさらに奥に存在する俺しか知らない極秘スペース、そこはコアの作成用スペース。

機材があり、ほとんどの材料もそろっている。

だが重要なものがない。

あれを完成させたとき俺は悪魔と呼ばれるだろう。

俺は知らなかったのだ。アレにそのようなものが必要だったなんて……

開発コード『エヴァンゲリオン・コア』

俺が望み叶えてもらった1個だけ作れるもの。

その恐ろしさに製作を放棄し封印したもの。

『人の魂』を封じ込め完成する悪魔の発明。

その封印を3年後俺は自分の意思で解くことになる。

プロローグ（後書き）

白騎士事件は私の想像です。

戦闘機相手にして死者なしはないんじゃないかなと思いきや変更しました。

このことは展開に特に影響ありません。

シャルのファミリネームとか母親の名前は勝手につけました。
多分公式では出てませんよね。

修正情報

モンド・グロツソの開催年を変更

ISSVSに関する情報を消去

私の勘違いでモンド・グロツソの開催は4年だと思っていたために時系列がおかしくなっていました。

あとISSVSって第二回のモンド・グロツソのデータなのでこの時点では存在しないため修正しました。

東アンチはあと1、2回の予定です。

感想で主人公の倫理観が腐っているといわれました。

私の文章能力の低さからそのように感じ取られたのだらうと思います。

主人公は魂が必要になると知らない設定でした。

そのため作ったけど封印した設定でした。

ですがわかりにくかったのでコアについて詳しくない（パチンコと新劇場版）でしか知らないということと、作成を放棄したという設定を加えました。

第1話 そして俺は悪魔となる（前書き）

ブログのPVが約1600件 ユニークも500件を超え、お気に入り登録していただいた方もいらっしやうそんなにもたくさんの方々に見ていただき大変うれしく思います。

また同時にどのように思われているかも気になり戦々恐々としております。

それでは第1話をよろしく願います。

ちよつとキンクリしてます。

第1話　そして俺は悪魔となる

特に代わり映えのしない日常を延々と繰り返して3年が経った。

特筆すべきことがあるとすれば飛び級で大学に進学しもうすぐ卒業というぐらいだな。

うんチート頭脳だな。

俺はその日ある人を待っていた。

彼女が二人きりで話がしたいと一昨日電話をしてきたため、地元から離れ遠くの大学へ進学していた俺は急遽休日を使い実家へと帰ってきた。

電話ではなく会って話したいそうだ。

私室ならぬ私小屋にて彼女を待つ。

呼び鈴が鳴り扉をあけるとその人物が立っていた。

「お久しぶりです、イレーヌさん。中へどうぞ」

そう、俺が電話貰った人物はシャルロットのお母さんだった。

彼女は年々やせ細っている。おそらくは病気のせいだ。出会ったころから顔色が良い日は少なかったが、それでもここまでではなかった。

お互いに一口カップに口をつけた後に切り出されたのは謝罪からだった。

「ごめんなさいね。急に呼び出したりして。本来なら私がそちらに伺うのが筋なのに……でも御医者様に遠出を止められてしまっているの」

「やはり体調が思わしくないのでか」

俺の口調がおかしい？ そりゃ年上と話してんだ。敬語にもなるだろう。

「ええ、あと1月持てばいいほうらしいわ」
「なっ……」

俺は言葉を失った。良くないとは思っていたがそこまで進行していたとは……

そんな俺の様子をしり目に彼女は言葉を続けた。

「それでね、今日時間を作ってもらったのはシャルのことについてお願いしたかったからなの」

「まさか俺に育ててくれというわけではないでしょうね」

確かにシャルは大切な友人だ。だがそこまで責任は持てない。金の問題ではなく俺はまだ他人の人生を支えてやれるほど成熟していない。

彼女は一瞬キョトンとした後「さすがにそこまでお願いはしないわよ」とくすくす笑って答えた。

「でもそれもいいかもね。シャルのことお嫁に貰ってくれないかしら？」

「やめてくださいよ。まだ結婚できる年齢ではないですし、第一シャルがいいと言うわけないでしょう」

「あら、将来シャルがいいと言ったら結婚してくれそうな言い方ね」
「異性というよりもどちらかといえば妹ですよ、それにあいつだって俺のことを兄みたいなものと思っただけじゃないでしょうし。この前だって無警戒に抱きついてきたりしてきましたしね。男と違ってたらそんなことしないでしょう」

ジョーク交じりの提案に、こちら茶目つ気をもたせて答える。たまにこちらに戻ってくるとシャルは俺に会いに来る。さっきのは前回戻ってきた時の話だ。抱きつかれたときに胸が当たってちよつとだけドキドキしたのは秘密。何気に胸あるんだよなあいつ。ちなみに欲情はしなかったよ。俺はロリコンではないからな。最近色気づいてきたのかスカートが短かったり、露出が以前よりも多くなつてたりして、お兄ちゃんは悲しいです。

「脈がないの？ でもシャルに聞いた話だと顔が赤くなつたって話だし…… もつと直接行かせるべきかしら……」

なんかイレーヌさんがブツブツつぶやき考え出してしまった。小声でよく聞こえないがなぜか良くないことの気がする。

「それで、改めて聞きますよ。俺に願いつて何ですか？」

深く考え込ませてはいけない、という俺の勘に従い今日の要件へと話を戻す。

「え？ ああ、うん、そうね。あなたへのお願いは、たまにいいからシャルの話し相手になつてほしいの。会えないなら電話やメールでもかまわないわ。お願いできないかしら」

そのお願いを聞き、そんなことかと思つた。正直今までと変わらない。たまに帰ってきてきてシャルに会うというこれまでと同じだ。

しかしそれは間違いだった。

「シャルをあの子の父親に預けることにしたの」

シャルから父親がいけないという話を聞いていたのでてつきり亡くなつているものだと思つていた。シャルが生まれる前か小さな頃に離婚でもしたのだろうか？

「あの子の父親の名前はエリック・デュノア。デュノア社長よ」
再び言葉を失つた。そのあまりのビックネームに。

デュノア社

第2世代ISの完成系といわれる「ラファール・リヴァイブ」を
発表し今や世界シェア3位の大企業だ。

「ということは、イレーヌさんは社長夫人でシャルは令嬢だと？」
「ううん、彼とは一晩だけだしすでに奥さんがいたわ。だから愛人
と妾腹の子が正しいわね」

病や薬でボロボロだが、今でも十分美人だ。手を出したくなる気
持ちもわからなくはない。しかしこれが表沙汰になれば結構なスキ
ヤンダルだな。

「私が生産したのは彼も知っていたわ。認知はしてくれなかつ
たけどね」

うわ、やり捨てとはまた……

仕方ない部分もあるのかね。相続の関係とかあるだろうが……
社交界はわからん。

昼ドラレベルでドロドロしそうだ。

「この前彼に会いに行つてシャルのことをお願いしたわ。彼はシャ
ルがデュノアの資産を相続しないことと本邸ではなく別邸に住まわ
せること、IS適正次第ではテストパイロットをすることを条件に
引き取ると言ってきたわ」

奥さんには思いつきり殴られたけどね、とその時のことを冗談め
かして話してくれた。

「だからあの子の味方になってあげてほしいの。ここを離れてただ一人遠く力になってくれる人がいない場所に行くあの子の味方に。あなたの声を聞くだけでもきつと安心できるから。それ以上は望まないから。どうか、どうか……」

その弱弱しい懇願に答えは簡単だった。

「わかりました。可能な限りあの子の、シャルロットの力になります」

それ以外の答えはなかった。俺だってあの子のことは大切だ。今までのように直接会うのは難しくなるかもしれないが電話程度なら頻繁にしてやろうと思う。そのうち向こうで大切な仲間ができればいいと思う。それまでのつなぎ役だな。ただしそいつが男だった場合殴りに行く。なんか腹が立つから!!

俺の答えに「ありがとう」とイレーヌさんが弱弱しく満足そうな顔をする。

それを見てふつつつと俺の中にある感情が沸き起こってきた。

「それでいいのかよ」

「え？」

それは怒りだった。

シャルのこれからが一応形になったことで安心したのはわかる。

「それであなたはいいのかよ!!」

聞いてはいけないことなのだろう。

だが聞かないということ俺はできなかった。

「あなたは本当にそれで満足してるのかよ!!」

そう満足そうな顔をした。
それはつまりまだ心残りがあるということ。

「あんたはまだしたいことがあるんじゃないのかよ！」
俺は無茶で残酷なことを言っている。彼女に未来を夢見ると言っている。

だって、きっと彼女の本当の願いは……

一瞬の衝撃ののちに俺は吹き飛ばされていた。
左頬が熱い。イレーヌさんが右腕を振りぬいた姿勢で立っていた。

「あなたに何がわかる!!」

それは怒号だった。絶叫だった。そして弱音だった。

「私だって本当はシャルと一緒にいたいわよ！シャルのウエディングドレス姿を見てみたい！シャルが産んだ子をこの手で抱きたい！シャルといっぱい話して悩んで喧嘩して仲直りして、そして笑っていたかったわよ！だけどそんな当たり前でちっぽけな願いだってもう叶わないじゃない!!」

その姿は先ほどまで見せていた弱弱しい姿とは似ても似つかない。「あの子にしてあげたいこと!? いっぱいあるにきまっていじゃない!!」 だけど私はもうシャルを育ててあげられない! だってあの子のためにできることは何!? 頼れる人を頼るしかないじゃない!! 恥を忍んであの男にも頭を下げにいった!! 本妻に泥棒猫と罵られ頬を叩かれ生ごみを頭にかけられても必死で頭を下げたわ!! 私にはもうそれしかできないから!!」

彼女の願いは予想と寸分の狂いもなかった。

予想外があつたとすれば彼女の姿だった。

余命1月と宣告され身体機能の衰退も著しいというのに、はいて
いる言葉は弱音でしかないというのになんと力強く偉大な姿なのだ
ろう。

そうか

これが『母親』か

「シャルがうらやましいな」

ぼつりと漏れた一言にイレーヌさんの剣幕が収まる。

素直にそう思った。俺の両親は前世じゃいなかったし、今は不気
味がつて隔離するような人間だからな。ここまで強く思ってくれる
母親を持つシャルに少し嫉妬してしまった。

「少しついてきてください」

その返事も聞かず俺は地下のエリアへ潜っていく。目指すのは秘
密スペースのさらに奥、極秘スペース。極秘スペースにはさまざま
なものが置かれているが、それらはあれを作るためのものに過ぎな
い。

『エヴァンゲリオン・コア』

黒騎士の核にして人の魂を封じ込める悪魔。

極秘スペースの隠し扉を開けようとして一瞬だけ逡巡した。

本当に作っていいものかと、ここを封印した理由を思い出せと。その答えはすぐに出た。

「それがどうした」

悪魔と呼ばれるなら呼ばれよう。

彼女の願いはそれだけの価値がある。

まぶしく見えるだけ、気の迷いかもしれない。

それでもあの一撃に込められた力強さ、言葉に込められた意志はきつと尊い。

これは俺の意思だ。

同情などではなくこのコアは 福音の名を持ち、愛情をもつてつながるあのコアは彼女にこそふさわしい。

視線を背後に移す。そこには膝をついている黒騎士がいた。コアだけでは不十分だ。黒騎士とともに運用することですべての機能が使えるようになる。コアも持ち運びには不便なサイズだし量子化機能を起動させるためにも取り付ける必要がある。まさかこいつを外に出す日が来るとは思っていなかったな。

俺についてきていたイレーヌさんはどこか申しわけがなさそうだった。時間が立って頭が冷めたのだろう。

「えっと、アルフォンス君。ほっぺた大丈夫？ さっきはちょっと

頭に血が昇って「イレーヌさん」……なにかしら」

俺の様子に何かを感じ取ったのだろっ。佇まいを直して向かいあってくれた。

「あなたは自分の願いのために悪魔に魂を渡せますか？

シャルと一緒にいることはできる。話すこともできるかもしれない。でもそれ以外のことはなにもできなくなる。

それでもあなたはシャルと一緒にいたいですか？」

答えは即答だった。

「当たり前よ。私はあの子と一緒にいたい。そのためだったら神様でも悪魔でも何だって利用するわ」

俺はその答えに、隠し扉のパスワードを入力する

『EVANGELION』

数年ぶりに開かれたその部屋に一步足を踏み入れ、振り返る。

「なら俺に魂をください。あなたの願いを叶えさせてください」

そして俺は悪魔となった。

その二週間後、イレーヌ・ベルレアンは消息を絶つ……

たった一つのペンダントを残して

第1話　そして俺は悪魔となる（後書き）

この作品本当は神様転生の予定ではありませんでした。

原案では天才少年がシャルのために第3世代を作るとというのがテーマだったのですがまとめている間にこの母親を死なせたくなくなつたというのが変更の理由です。

じゃあどうするかということ考えていたときにエヴァの破がロードショーでやるという話を見て「そっぴやこれも母親いねえな、コアとかもあるな」とか思ったときに考えつきました。

母親を助けられないならコアに入ればいいじゃない、と

コア設定だけだとちよつとさびしいから機体のほうもエヴァで何とかしてやれと思ひ黒騎士にもエヴァ要素を取り入れてあります。

だけど予定では黒騎士活躍するのかなり先なんだよなあ

次回はシャルが主役。というかこの作品はこの先オリ主よりもシャルが主役です。

第2話 お前のような奴にシャルはやらん(前書き)

予定では第三世代実験だったのですが変更でその前日のお話です。シャルが主役になるのを期待していた人ごめんなさい。もう少しだけ待っててください。

第2話 お前のような奴にシャルはやらん

「へえ、じゃ明日はデュノア社の第三世代モデル試作機に乗るんだ」
『うん、イギリスのティアーズモデルと同じBT兵器搭載型らしいよ。けどどちらと違って、ほぼ自立動作するようになってるみたいだね。ホントは企業秘密だから教えちゃいけないんだけどね』

「だから、秘密だよ？」と可愛らしく付け加えられた。

電話の相手はシャル。

1週間に1度の電話は習慣とкаして1年になった。

毎週日曜にシャルが電話をくれる。時差が半端じゃないからお互いに時間がとれる日曜に話すことが多いな。毎週シャル側からかけてくる。電話代とかが馬鹿にならないから俺からかけると言っているのだが、なんでも「アルに任せると忘れそう」との理由であちらからかけてくる。妥協案としてコレクトコールでかけさせているがな。

「自立動作ができればBT適性もあんま関係ないしな。操作性の面でイグニッションプランでも優位に立てるかもしれないな。問題はパターン化する部分が多いことで見切られやすくなっちゃうところかな」

『おお、さすがIS学園整備士兼教師だね。もう問題点を見つけてだなんて』

「茶化すな。どうせそっちだってもうこれくらい気付いてるんだろ。というか、気付いてないと不安なことこの上ないんで気付いていてくださいお願いします!」

「あはは」とシャルの笑い声が電話から聞こえてくる。この声だ

けで後1週間は頑張れるよ。

さっきの話にも出ていたが、俺は今IS学園に勤務している。

IS学園とはISの操縦者育成機関だ。

ここでは世界中のIS運用協定参加国から生徒が集まってくる。

IS学園の倍率は世界中から受け入れをしているため冗談のような数字となるので、ここに入学するだけでエリートといっても過言ではない。

そして教師陣もそれに伴うレベルの高さが求められる。

俺の場合、ISの機動性に関する新理論を提唱した卒業論文が秀逸だったとこのことで国際IS委員会に提出され、それがIS学園のお偉いさんの目に留まったとこのことで直々にスカウトが来た。株と開発特許で起業して生活しようと考えていたので特に就職先がなかった俺は、それなりにいい待遇に惹かれてその話に乗った。気になることを調べるためにもここはちょうどよかったしな。

そんな経緯があつて日本で教鞭をとっている。教員免許は持っていない。ISに関する授業を受け持つ際には教員免許は必要ないのだ。代わりにISに関する試験を受け、資格を取る必要がある。

これはIS知識が専門的すぎるため、これまでの物理学や機械設計とは大きく異なるので一般の教員に教えることができないことが最大の理由である。

一応試験には教育に関する項目もあるため、まったく無知というわけにもいかないが。

もちろんIS学園で数学など普通の教科を受け持つ際には日本の教員免許が必要だ。IS学園は基本的に日本の法律が適用される。なかば治外法権ではあるが日本が運営していることを考慮している。そのため日本の資格が優先されるようになっていく。一応諸外国の資格も通用するが、こちらは大量の申請が必要らしい。

それにしても第三世代ね……

「だが急すぎるな。ラファール・リヴァイブだけじゃやっていけないのはわかるが開発期間が短いんじゃないかねえか？」

技術の進歩はすさまじく早い。特に始めてから10年しかたっていないものなんてあつという間に進化する。ラファール・リヴァイブは第二世代最終期のものであるために完成系といわれるレベルだが、第三世代の開発が進んでいる昨今では「まだ通用する」でしかなくなってきた。

『うん。時期尚早って声もある。だけど武装部門が焦ってるみたい。最近フランスのカリエ社がエネルギー効率が高いレーザーライフルをはじめいくつかの新型兵装を開発してて売り上げに影響が出そうって話だよ』

や、やばい。多分それ俺が開発したものだ。

昔開発してほつたらかshにしてた設計図を就職祝いとして黒騎士を知る仲間に渡したんだ。たしか就職先カリエ社って言うてた気もする。

現在有る武装の改善案をまとめたものだったからいいかなと思っただけどまさかこんなに早く開発できるとは思ってなかった。あれには俺が個人的にまとめた複雑極まりない理論とか使ってたし開発にはあと数年かかると踏んでいた。

「ま、怪我だけはすんな。女の子なんだから嫁の貰い手減るぞ」

『そつ、そうならアルが貰ってよ！』

「いきなり大声出してどうした。確かに俺はそんなこと気にしないが……つつか手頃なところで妥協しようとするな。きつとお前が好きになる奴はそんなつまらないことを気にするような小さい男じゃねえよ」

『うん確かに気にしなさそうだね』

その時俺に衝撃走る

「シャル……好きな男がいるのか……」

『え、あ、いや、そうじゃなくて』

「安心していいよシャル。俺はシャルの味方だから。ダカラオレニソイツノナマエトジユウシヨヲオシエロ」

『なんかすごい声が怖いよ！ ていうか教えたら何するつもりなの！？』

「現在心の中で戦っている天使と悪魔の決着次第だな。悪魔が勝ったら家にグレネードランチャーぶち込む」

『天使勝つてえー！！』

「天使が勝った場合、まずはそいつを「検閲削除」して「検閲削除」したあとに「検閲削除」させてから 「検閲削除」だな」

『天使のほうかひどい！ もうわけがわからないよ！』

「現在シャルの声援のおかげで天使が優勢だ。ダカラサツサトオシエルンダ」

「ますます教えられないよ！ 安心して！ 私と仲がいい男の人はアルだけだから……」

「嘘はつかなくていいぞ。シャルはかわいいんだから男なんて向こ

うから寄ってくるだろ」

返事がない

「シャル？ シャル聞こえてる？」

『かわいい……かわいいってアルが……』

ブツブツ聞こえるがうまく声が拾えていないのか、何を言っているのかは聞こえない。

「おい、シャルさんやーい」

『へっ？ あ、ゴメンね電話の最中に』

「いやいいんだ。だからその男の『ホントにアル以外にいないから大丈夫だよ』そうか」

付き合っても長いし冷静になれば嘘を言っているかぐらいならわかる。しかしなんでさっきはあんなに暴走したんだろうかね？

なんかこう、シャルの隣に男がいることを考えただけでそいつを去勢してやりたくなるんだけどどうしてだ？

あれかな。娘を取られる父親の気分みたいなもんなのか？

そのあとは他愛ない話をした

俺が開発したプログラムを学園の打鉄に入れたとか

フランスに帰省しようと考えているとか

シャルがかわいい子猫を見つけたとか

アンノウンのアクアラビンスでバルバトスをノーダメクリアしたとか

どつでもいい話をした

『そろそろ明日のために寝なきや』

「そうだな。万全の体調で挑んだほうがいいな」

寝不足で事故ったとか話にならない

『じゃあね。また来週「あ、待てシャル」なに』

これだけは言っておかなければ

「明日の起動テストするときにあのペンダントだけは絶対につけておけ」

『ペンダントってお母さんが残してつたやつ？』

「ああ、おまもりにな。きつと無事に終わらせることができるはずだ」

『うん。アルがそういうんだったらつけておくよ。それにしてもお母さんどこに行っちゃったんだろうね？』

俺はその質問に答えられなかった。

本当のことは言わないと約束してしまったから。

『せめて、ちゃんとした葬儀ぐらいしたかったんだけどね。行方不明じゃそうもいかないし……』

彼女は行方不明ということになっている。しかしシャルも当時イレーヌさんが余命幾ばくもないことを知っていた。だからもう亡くなっていると思っっているだろう。

実際イレーヌさんは生きていると言いにくい状態だ。

「そうだな。だがとにかく明日だ。気をつけてな」
『うん、アルもね』

またねと言われ電話が切られた。

「さてじゃあ次は……」

俺はパソコンの電源を入れ、あるアプリケーションを起動する。
イヤホンマイクとカメラをつけ準備が完了。

「イレールさん、起きてますか？」

「ええ起きているわ。さっきの電話も聞いていたしね」

開いたウィンドウにはイレールさんが映っている。

このアプリケーションは肉体ごと魂をコアに封じ込められたイレールさんとの通信を行うものだ。

イレールさんに話を持ちかけた後、急ピッチ（それでも一週間でコアを作成したのち、俺はいくつかの改造を施した。

一つは通信機能。

精神的に生きていても何もすることができなければ退屈だろう。

せめて話くらいは、エヴァンゲリオン と思い組み込んだ機能だ。

本体たるE・コアエヴァンゲリオンとその複製たる劣化コア間で情報バイパスを形成することで、劣化コアを組み込んだ通信機（この場合俺のパソコン）と情報のやり取りができるようにした。

二つ目に休眠機能。

人間でいえば睡眠にあたる機能だ。

彼女は今ほぼコアのソフトとっていい状態だ。

このように機能として組み込まなければ彼女は覚醒したままとなる可能性があったし、休眠したままというのは彼女の願いに反するため彼女の意思で休眠できるようにした。

この二つの機能を着けるためにコアを製作してから一週間の時間を要した。

コアに彼女を取り込む際肉体まで消失してしまった。これは予想外で肉体はシャルに何とかごまかして返そうと思っていたのだ。

そしてコアに彼女が入って驚いたことはコア内部で彼女が生活しているという点だ。

てつきり魂という情報として内部に入ることになると思っていたが彼女の主観では肉体があり活動しているらしい。もし彼女の肉体が病気のまま取り込まれた場合どうなるかわからなかったが現在彼女の体調に問題はないそうなので胸をなでおろしている。

ここで推測されたのが魂を取り込むにあたり、コアが彼女の肉体というアウトフレーム情報を欲したのではないかということだ。つまり内部空間で行動するに当たり形骸が必要であるためその構成のために取り込まれた。よって外見情報しか影響せず、病気などの情報は取り込まれなかったのではないかというのが俺の考えだ。

だが気になるのが取り込んだ時点よりも美人となっている点だ。病気をせず健康だったらこうなっただんじやないかとも思う。もしかすると魂情報とアウトフレームが相互依存して本来の姿になっているのかもしれない。

シャルを成長させて母性を持たせるとこんな風になるんじゃないかと思える外見でたまにドキドキする。

「だけど本当によかったんですか。あなたがペンダントの内部にいることを教えなくて」

「いいのよ。あの子が親離れできなかつたら大変でしょ。それにも言つたじゃない。私はあの子とられるだけで十分なの」

そう、シャルに明日の実験に持つて行くように忠告したペンダントこそ黒騎士の待機状態、つまりイレーヌさんの魂の入れ物なのだ。コアに入る際にイレーヌさんは自分のことを教えないようにと俺に頼んだ。自分の存在がシャルの成長の妨げにならないようにと。彼女の願いに反する頼みに俺はどうするか迷つたが、一緒にいられるだけで十分と言われ、いまだにシャルには教えていない。

「ところでシャルに好きな人がいるみたいなんですけど何か知ってます?」

先ほどの電話で気になったことを聞いてみる。

シャルは自分の周りに男はいないと言つたが、どうにも「気にしなさそう」という発言が気になるのだ。仲よくしていないだけで遠くから見ているだけの片思いとかの可能性もあるし、最悪ユリに走つた可能性も無きにしも非ず。できればノーマルのまま置いてほしいものだが。

「私からは何も言えないわね、つてちよつとまつて。フランス行きチケットを予約しないで、デュノア社の男性名簿とかハッキングしないで!」

「今の答えは好きなやつがいるつて認めてます!そして俺には前から決めてたことがあるんです。シャルに大切な男ができたら一発殴つてやるんだつて!」

「さつきはそれと比較にならないくらいスゴイこと言つてたじゃない。それに殴るのは止めておきなさい。奇妙な光景になるから」

奇妙な光景ってなんだ？

「安心しなさい。あなたが考えているようなことじゃないから」

「どっかの誰かに片思いとか、同性愛に走ったとかではないんですね」

「違うわよ」

なんかイレー又さんが疲れてるみたいだけど大丈夫だろうか？

「まあそれならいいです。ところで何かほしいものとかありますか？」

「いえ特には「イレー又さん」……前に送ってもらった小説の続きが見たいわね。その他は大丈夫よ」

内部空間はある程度こちらの自由に変化させることができるようになった。

造形機能とでもいうべきか。

この機能で小さな一軒家を作成し今ではイレー又さんはそこで生活している。

またこのパソコンに組み込まれている劣化コアから本体に量子変換で物を送れるようになったのはつい最近だ。量子化したものは内部のイレー又さんが自分の手元に呼び出せるみたいでこの前冗談半分で小説を送ったら読めたそうだ。

コアの中で彼女は暇そうだったので数冊の書籍を送り退屈しのにしてもらっている。

彼女は遠慮することが多いのだが、小金持ちの俺に懐具合は気にしてもらわなくて大丈夫だし、こんなとこに閉じ込めてしまっている負い目もあるから遠慮などしてほしくないのだが。

無理を叶えさせてしまった彼女と閉じ込めてしまった俺。お互いに負い目があるからちよつとばかり変な関係だ。

「じゃあ数日中におくりますね。それと明日第三世代の起動実験だ
そうですね」

「ええ。少し不安があるわ」

「最悪の事態になったら助けてあげてください。それくらいならい
いでしょう?」

「そうね。どこまで起動してもいいかしら?」

「ジーンもしくは部分換装システムから、最悪の場合完全換装まで
行きましょう」

俺が提案したのは黒騎士の武装と展開システムだがこれには色々
と問題がある。使わないに越したことはない。

「起動したものはすぐに俺に教えてください。いろいろやること
がありますので」
「わかったわ」

起動実験、無事に済んでほしいもんだ。

俺の願いむなしく起動実験は失敗に終わることになる。

第2話 お前のような奴にシャルはやらん（後書き）

次こそシャルが主役です。

実験はどのように失敗したのか？、その時黒騎士は？
そんな話になる予定です。

第3話 特殊武装「ジーン」(前書き)

皆さんこんにちは。作者の朱赤です。

なんとこの作品、総合PV10、000突破 ユニーク2000人
突破 日間ランキング51位となりました。

見た瞬間、思わずパソコンのディスプレイにお茶を吹きかけてしま
いました。

これも皆様のおかげです。

今後とも精進していこうと思います。

第3話 特殊武装「ジーン」

第3話 特殊武装「ジーン」

アルと電話した翌日私はデュノア社試験場にいた。

理由はもちろん第三世代試作機タンペットモデルの起動試験。

一人称がおかしい？ なにいつてるのさ、「僕」や「俺」は男性、「私」はどちらの性別でも使っつて聞いたよ。

そういえば今世界の共通語っていうと英語と日本語なんだよ。

10年前までは英語だけだったらしいね。

なんでも篠ノ之束博士が論文から発表まで日本語でしたうえに英語とかの質問に一切答えなかったことからちよつとずつ日本語が広がってつたんだって。

それにIS開発初期には日本が情報を独占したり日本にIS学園があつたりするのも影響しているんだ。

いま世界がISで回っていると言つてもいいことを表している一例だね。

だから私も日本語を勉強してそれぐらいのことは知ってるよ。

それにしてはしゃべり方が男っぽくないかって？

それはアルのせいなんだ。

最初はアルに日本語を教えてもらったんだけど、いきなり口語から教えられたんだ。しかもアルが男性風の口語を教えてきたからこんな風になつちやつた。

最初は一人称も「僕」だったんだけど学校で教えられて直したんだ。

口調はあきらめた。何度直そうと思つてもうまくいかなかったから。長く教えられるとそれが染みついちゃうつてことを学んだよ……

アルに「何でこんな風に教えたの？」って聞いたなら

「電波を受信したから」

こう答えられて思わず拳が出たのは仕方ないよね。

アルと言えば昨日「かわいい」って言われてベットの中でごろごろ悶えてなかなか寝付けなかった。

私はアルが好きだ

理由は単純つていわれるかもしれないけど一目惚れに近い。お母さんが倒れた時に助けてくれたときにかっこいいお兄さんだなんて思ったのが始まり。どうしたらいいのかわからなかった私を助けてくれたのが、童話に出てくる白馬の王子様みたいだなんて思ったんだ。それから勉強を見てもらったり遊んでくれたりしてくれて、一緒にいた時間が憧れみたいな気持ちから好きに変えていった。

お母さんに話したら「落とすのでつだつてあげる」って言うてくれて、服を選んでもらったり「思いつきり抱き付いてきなさい」とかアドバイスをくれたりした。ちよつと恥ずかしかつたけどね。

結果はどうなんだろう？　もしかしてそういうことをしてる理由に気付いてもらえてないのかな？

だとしたらきつとアルは唐変木とか朴念仁とかいわれる人なんだ
！！

「シャルロットく、頭大丈夫？」

「いきなり『頭大丈夫？』は失礼ですよ。マルゴさん」

マルゴさんはデュノア社の技術者で私専属と言っていていいぐらい私の使う機体を見てくれる。私のクセも把握していて、他の技術者に見て貰った時とは使いやすさが段違いなんだ。

「だってねえ。いきなりニヤニヤし出したと思ったら、次は顔を赤くして、最後にはプンスカ怒り出すんだもの。心配にもなるわ」

どうやら思っていたことが顔に出ていたみたいだ。

「確か昨日は愛しの彼と電話でお話する日だったわね。あれかしら？ ニヤニヤしてたのは彼にかわいいとかきれいとか褒められたからで、赤くしたのは告白まがいのことを思い出して、怒ったのはそれに気づいてもらえなかったからかしら？」

スルドイ…… 赤くなつた理由も当たらずとも遠からずだし……

マルゴさんはデュノア社では一番仲よくしてもらっている人でもある。私生活のこととかも話したりしているから、アルのこととかも相談したりしている。

「そのとおりみたいね。顔に出てるわよ」

どうやら私は思っていることが顔に出やすいみたい。そういえばアルとポーカーした時もほとんど勝てなかったな。

「まあいいわ。今度また相談に乗ってあげるからまずはデータを取

るわよ。今日の起動実験では新型の特殊武装を試してもらおう」

「これを見て頂戴」と渡されたスペックデータを見る。

あまり言いたくはないけどイギリスのティアーズモデルのパクリだよ、これ。

B T兵器をラファール・リヴァイブに取り付けたとしか思えないよ。

B Tには動作をあらかじめ組み込んであり、動いているものに対していくつかの陣形をとり攻撃、私の射撃データと歴代ブリュンヒルデの近接データをもとに回避動作をとるようになってる。

射撃データが私のももののは実際に取れたデータのほうが間接的に手に入れたデータよりも信頼できるからだそうだ。

ティアーズモデルより優れているとしたら操縦者自身が行動できる点かな。ティアーズモデルは思考の大半をB Tに割く必要があるらしいからね。

この性能だとB Tは主力としての運用じゃなく戦闘の補助にしたほうがいいかな？ B Tで行動を狭め、ラビット・スイッチ高速切替による中距離戦か、グレイスケール灰色の鱗殻による一撃必殺が有効そうだね。

今回は起動と簡単な射撃だけだからコンビネーションとかはやらないけど、こういったことを考える癖を付けておけてアルから教えられた。「ある程度のシミュレーションをしておけばアクシデントにも対応できるし、失敗しても何とかリカバリできる。些細なことでも簡単なシミュレーションをしておけ」ってね。

「何か質問はある？」

「予想される連続稼働時間はどれくらいですか？」

「20分が最長、射撃を行うたびに減少していくわ。背中 of 射出口に戻すことでエネルギー充填も可能よ」

いくつかの質問を終わらせ準備を始める。

ISスーツを着込み羽をかたどったペンダントを首にかける
今日の担当がマルゴさんで良かった。

ISを起動させるときにはできるだけ余計なものは身につけておかないほうがいい。

他の技術者からは外すように言われるが、マルゴさんは大目に見てくれる。これが母の残していったものだということを知っているからだ。

準備を終え、試験場へと入っていく。

試験場は大体陸上競技のトラックがすっぽり入る程度で天井が開いている。

これは狭いほうで市外には高速機動などを見る大型試験場がある。私が今いるのは武装などの試験をメインに行う場所なんだ。

その分大型よりも強力なシールドが発生できるようになっているんだけどね。

試験場にはすでにタンペットが置かれていた。

しゃがんだ状態のタンペットに身体を合わせ起動する。

乗り心地はリヴァイブと変わらない。やっぱりBT付けたただけかと内心嘆息する。

観測室にマルゴさんの姿が見える。観測室は試験場に併設されていて実際の動作をデータ、目視の両面から記録できるようになっているんだ。

『準備できたら始めるわよ』

マイク越しに指示が飛ばされる。

操縦者指示による単体操作、複数操作、スタンドアローンによる

単体操作とこなしていく。

その中で問題が浮かび上がっていく。

「エネルギー効率悪すぎでしょ……」

本来20分持つとされた連続稼働時間は5分にも満たず射撃を1度行うだけで使用ができなくなった。

「射撃性能も悪いし……」

単体操作、複数操作とも的に当たらない。BT適正は関係ない機体というコンセプトだから操縦者指示はあまり期待していなかったけど、スタンドアロンも同様の結果とあつては話にならない。

加えて

「同士討ちするし……」

スタンドアロンの複数操作を行った際に事件は起きた。

本来動き回る標的に攻撃をするはずだったんだけど、BT同士が互いに攻撃を始めた。どうやら個体識別がうまく働かなくて、味方のBTを行動する標的として認識してしまったみたい。

結論

『これは使い物にならないわね』

時間をかければ改善できるかもしれないが時間がないため起動実験を早めたんだ。正直これが改善される頃にはデユノア社は経営危機に陥ってると思う。

『仕方ないわね。シールド切るわよ』

試験場を破壊しないように張られていたシールドが解除される。今回これが張られていなかったら試験場はめちゃくちゃになってい

たんじやないかな？

『所属不明の敵ISにロックされています』

その警告に対し回避行動を取れたのは奇跡に近かった。
イクニッション・ブースト
瞬時加速で水平移動を行うのと同様、先ほどまで私が立っていたところに銃弾の雨が降った。

「なんだよ。フランス第三世代っていうから期待したら二番煎じ
な上に、できそこないかよ」

『アラクネ！？』

シールドを解いたことでひらけた上空から攻撃してきた機体が降りてきた。

アメリカの第二世代アラクネ。ギリシャ語で蜘蛛を意味するその特徴的な機体はいまだにこちらをロックしている。

「マルゴさん！　すぐにシールド張って」

観測室に指示を飛ばす。

『シャルロット。勝ちなさい』

その声は苦渋に満ちていた。多分私の考えが読めたのだろう。これが最も安全策だということが。ここで戦闘になった場合観測室のマルゴさんが危険だ。しかしここから出るわけにもいかない。ISで戦闘を行って一般人に怪我人を出すのもまずい。となればシールドを張り、私がここでこの侵入者を相手するのが一番誰も傷つかない解決策ってことになる。

どんなふうに戦うのがベストかな。

近接戦はアウト。アラクネの特徴はその背中にある8本の装甲脚。先端には爪が付いており、手数に差が出ちゃう。手数が少ないのは純粹にディスプレイだね。

射撃は連射系の武装であれば多少の手数差を埋めることができたけど今回は実験のために多くの後付装備を外してきてしまっているのが痛いな。

可能な限り遠距離戦で時間を稼ぐのが最善かもしれない。イコライザがないとはいえ基本装備フュルセットは付けられて、その半分以上が遠距離戦用武器。牽制しつつ騒ぎを聞きつけた他のパイロットが駆け付けるまで持てば2対1で有利に立てる。

そうなるとエネルギー残量が心配だね。さっきまでエネルギー消費の激しいBTを使っていたからもうそろそろ残量が厳しい。多分まともな戦闘は行えない。

「君たちはどこの人なのかな？ アラクネ使ってるけどアメリカではなさそうだけど？」

会話をして時間を引き延ばすのがまずは最善。動かなければその分エネルギーの消費を抑えられるからね。

「はっ！誰が教えてやるか！」

「まあ、そうだよな。君をとらえてからじっくり話を聞けばいいし

ね

「年上相手に君ってなめてんのか！ 大体この『亡国機業』のオータム様をてめえみたいながキが捕まえられると思ってるのかよお！」
(言っちゃうんだ。この人頭弱いのかな?)

心の中で突っ込んだ私は悪くないはず……

『亡国機業』がなんなのかは知らないがこんなことしてくるってことはきつとテロ組織だよな。

「狙いは何？」

タンペットモデルが狙いなのは推測できるけど、データ収集が強奪だったのかはわからない。だがこのタイミングで乱入してきたってことは……

「できそこないでもコアは貴重だ。頂いて行くぜ」
やっぱり……

コアは世界中で467個しかない。となれば1つ手に入れるだけで戦力は飛躍的に上昇する。

汎用機であるリヴァイブは専用機と比べて設定に甘いところがある。無理やり組み敷かれれば、機体から引きずり出されてしまう。試験機として個人認証を行っていないこのタンペットでも同じだろう。

「さあて、お話は終わりだ。おとなしくISを渡しな。命だけは助けてやるからよ」

引き延ばしも限界だね。アサルトライフルの《ガルム》を量子展開し構える。これはフェイクですぐにショットガン《レイン・オブ・

サタデイ』へと切り替えれるよう準備する。多分あちらの行動は近接攻撃のために接近。そこで至近距離からショットガンを打ち込めばかなりエネルギーを削れるはず。もし怯めば一度距離をとりサークル・ロンドの要領で牽制する。怯まず突っ込んでくれば距離を保ちながらショットガンで攻撃でいい。遠距離だったらこのままガラムで戦闘を続行だ。

さあどう来る？

オータムの一手は私の予想を覆した。

オータムが量子展開したのはグレネード。それを迷いなく私との中間に向け発射。視界が一瞬にしてふさがれる。

そして悟った。オータムの狙いは爆炎にまぎれての接近。先ほどまでプランはあくまで相手を認識できることが前提だった。ISにはハイパーセンサーが付いているが目視するよりも把握が一瞬遅れてしまう。

そこにもしアレを使われたら！

「ほら、捕まえたぜ、お嬢ちゃん」

回避行動をとる前に炎の中から現れたオータムに捕まってしまった。イグニッション・ブースト さつき私も使った技術。一瞬にして最高速を得るこれならば私が回避する前に接近できてしまう。おそらくはあらかじめハイパーセンサーに頼っていたのだろう。もし回避しても私がいる方向へと接近できるように。

さっきの会話から頭に血が昇りやすい単純な相手かと侮っていた。

両手をふさがれ、背後の装甲脚による連続攻撃にタンペットのシ

ールドエネルギーが0となってしまう。

具現維持限界リミット・ダウンと呼ばれる状態に陥りすべての武装が使用不可となった。

装甲の強度も落ちてしまいタンペットが次々と壊れていく。

それを確認したオータムが私を地面へと投げつける。

絶対防御のおかげで死ぬことはなかったが、PICも切れてしまっているこの機体では慣性を殺すことができずその衝撃がもろに伝わってくる。

意識を保っているのが奇跡だった。

「さつきは面白いこと言ってたな。私を捕まえるって？ ならこの状態はなんだ？ 私が立っていてお前がはいつくばっているこの状態は！」

ゲタゲタと笑う声が耳触りだ。

首をつかまれ引きずり起こされる。

「本来ならぶち殺し確定だが、みじめに命乞いをすればさつきの言葉は水に流してやるよ！」 『私のような屑が齒向かって申し訳ありませんでした。どうか命だけは助けてください』 ってな。ほら言えよ

狂ったように笑うその顔が目に入る。

きっとここで命乞いをしててもアルは許してくれるんだろうな。命あつてのモノダネだろって笑ってさ。

「わ……………た……………せ……………だ」

「あん？」

「だけど

「わ……か……た……い……せ……に……だ
「きこえねえよ」

「だけどきつと

「わたし……はか……きたい……いつ……せか……ちにな……だ」

「だけどきつと私が私を許せなくなる

「わたしはかれのきたいといっしょにせかいいちになるんだ」
それは私の夢だった。
いつか彼の作った機体と一緒に世界一、ブリュンヒルデになる。
こんな女に命乞いなんかしたらあの地下で眠っている『黒騎士』
やこれから彼が作っていく機体に乗る資格がなくなってしまう気がするんだ。
だから命乞いなんてできない。

「ばーか」

精いっぱい虚勢を張る。

私が彼と歩む誇りを保つために……

オータムの笑いが憤怒に変わる。

「そうか。じゃあ

死ねよおおお！」

取り出されたのは見たこともない武器だった。

少なくともこれまでラファール・リヴァイブには搭載したことのない武器だ。

おそらく殺傷を目的とした絶対防御を突き破る武器なのだろう。

(これは死んじやったな)

マルゴさんの悲鳴がどこか遠く聞こえた。

いろいろな記憶が呼び起こされる。

最近はじめであったお父さん。いろいろと世話を焼いてくれたマルゴさん。クラスメイトのみんな。あの小屋で遊んでくれた彼の友だち。昔飼っていたちよつと不器用な黒猫。そして

(お母さん、アル)

大切に育ててくれたお母さん。大好きなアルフォンス。

武装が私に向けられる。

怖くて涙が出そうだ。死にたくない。まだやりたいことはたくさんあるんだ。

でも

この誇りを曲げることはできなかった。

目をつぶり衝撃が来るのを待つ。

衝撃は来なかった。

「なんだこりゃあ！」

突然の驚愕の声に目を開く。

そこには

黒いリング状の何かがオータムの武器を受け止めている姿があった

「なに……これ……」

リング状のなにかは私の周りをぐるりと一周している。

よく見るとそれは二本からなり、隙間をあけてねじれている。

本で見た遺伝子をフラフープのようにすればこうなるんじゃないかと思う。

「くそつたれがあ」

何度も場所を変えてオータムは武器を打つ（どうやら灰色の鱗殻と似たネイルガンのようだ）。

しかしリングはそれをことごとく受け止める。どうやらスタンドアローンでオートガードをしているようだ。

ネイルガンでは太刀打ちできないと判断したのかオータムは背後の装甲脚を操作し八方向から私を狙ってきた。

それと同時に、円状だった二本のリングがほどけリボン状になる。

そのうち一本が装甲脚に巻きつくくとオータムが背後に倒れた。

どうやら巻きついたリボンが引きずり倒したらしい。

もう一方のリボンが倒れたオータムを拘束していく。

拘束から逃れようと暴れているがもう彼女は身動きが取れない。

さらに驚くべきことが起こった。
タンペットのエネルギーが回復していく。
空だったエネルギーが回復しシステムが再起動する。
よくわからないがとにかくリミット・ダウンをさせるべきだろう。
グレースケールを拘束され動けないオータムへと突きつけ射出。
二世代最大の攻撃力を持つパイルバンカーがアラクネへと突き
刺さる。

救命領域対応が発動しアラクネが展開できなくなり、オータムが
地面へと転がった。

『よくやったわね』

どこから聞き覚えのある声が聞こえた気がした。

リボンが拘束を解除し私の元に戻ってくる。

『シャルロット、それは何』

マルゴさんの声が聞こえてくる。

戦闘が終わったのを実感した。

それってというのはこのリングのことだよな

「私にもわかりません」

これが何かはわからない。

ただ作った人は推測できる。

『えっ、ちょっと待って。何このデータ』

急にマルゴさんが焦り始めた。

「どうしました？」

「急に大量のデータが送りつけられてきたのよ。しかも強制的に開かれて行ってるの！」

「つまりハッキングを受けているということですか」

「そうみたい。データの内容は設計図とプログラム？ 武装名『ジーン』？」

ジーンとは遺伝子のことだ。

「そのデータは多分この黒いリングのものだと思います」

『なんでそう思うの？』

「心当たりがあります」

間違いない。

これを作ったのはアルだ。

多分量子化してペンダントの中にしまっておいたんだ。

デュノア社のプロテクトはかなり硬い。

それを破るような人で僕を守るような武装を作るのはアルしかない。

「とにかくシールドを解除してください。この女の人を連れていくんで」

救命領域対応が発動したとはいえいつ起きるかわからない。

できるだけ早く対処するべきだよね。

シールドが解除される。

シールドが解除されると同時、再び上空から攻撃を受けた。

その攻撃を回避しているうちに新たに現れたISにオータムが連れて行かれた。

油断した！ まだ敵が残っている可能性は十分にあっただのに！

追いかけることも考えたが、すでにかなり離されてしまっているだろう。

もし追いついて戦闘になった場合、他に仲間がいなくても限らない。

ボロボロの私では負けるのが目に見えている。

追跡はあきらめざるを得なかった。

それに

「すいません。もう限界です」

初めてした命がけの戦闘で精神的に疲れた。

ISが解除されると同時に私の意識が失われる。

起きたらアルを問い詰めてやると誓いながら……

「ふう、何とかまりましたね」
「ええ、初めての展開でどうすればいいか手間取ったせいであの子が危険にさらされてしまうなんて」

「現在俺は自分の整備室でため息をついていた。
緊急コールに急いで部屋に戻った俺は事情をイレーヌさんから聞いた。」

「この緊急コール、イレーヌさんが最重要だと思えることのみに使われるものだ。」

「だけどよかったの？ ジーンのデータを渡してしまっ
「まあ、仕方ないでしょう。これがどういうものかわからないと交渉の余地もないんで」

「ジーンを起動させるにあたり、いろいろまずいことをしてしまっ
た。」

「武装を展開するために黒騎士にシャルが乗っていた機体を取り込
ませる必要があった。」

「つまりもうあの機体はシャルの専用機と化してしまったのだ。今
頃黒騎士に組み込んだAIが設定を書き換えていることだろう。」

「途中エネルギーが回復したのも取り込んだ際に黒騎士からエネル
ギーが流れ込んだからだ。」

たぶんあちらはペンダントを調べる。最悪内部の構造を無視して取り込まれたコアを取り出そうとするかもしれない。そうなればイーヌさんがどうなるかわかったものじゃない。

デュノア社にはあの機体をシャル専用にすることを条件にジーンの情報渡すつもりだ。

すでに渡したデータは一部でしかなく、あれだけでは普通に開発するのに数年かかるだろう。

デュノア社としても悪い話ではないだろう。

さてはてシャルにはどう説明しようかね？

NGシーン

「なんだこりゃあ!」

突然の驚愕の声に目を開く。

そこには

黒いリボン状の何かに亀甲縛りで拘束されているオータムの姿があった。

「へっ?」

間抜けな声が出た。

だってリボンみたいなものがひとりでに巻きついてるんだよ? より行動を制限しようといやらしい奇妙な動きをしているんだよ?

どこことなく艶っぽい悲鳴を聞きながら私は再び目を閉じた……

『シャルをいじめるからよ』

どこからか聞き覚えのある声が聞こえた気がした。

第3話 特殊武装「ジーン」（後書き）

いくつか説明をさせていただきます

シャルの一人称

僕って言わせるかどうか迷ったけどあれは男のふりをする必要があったからだと思います。なので私にしときました。

世界の共通語について

独自設定です。みんな日本語ぺらぺらだから設定しました。

亡国機業について

これは主人公の影響とっていいです

主人公が友人に設計図渡す デュノア社焦る 急ピッチで開発

亡国機業「盗りに行くか」

てな具合です。

シャルの戦闘思考について

詰めが甘いとしか言えないかもしれませんがシャルはそこまで戦闘をしたことはありません。まあ基本テストパイだからということでしょうか。願います。

ジーンについて

黒いアルミサエルです。

機能は今のところ攻撃に対するオートガードです。

もう少ししたら他の機能も出ると思います。

プロローグの修正で新劇場版に出てないじゃんと思われた方、パチンコにはアルミサエルしっかりいます。ですのでそれをもとにアルは作りました。

ちなみにタンペット ジーンはそれぞれ日本語で嵐 遺伝子です。

NGシーンについて
血迷いました。

今回はシャル本人強化フラグです
アルはすごいものを作った じゃあ自分も鍛えなきゃ
ということですよ。

アルの外見は十人並、お世辞込みでカッコいいほうです。
シャルのカッコいいお兄さんという評価は初恋補正です。

次IS学園入学直前のつもりです。

第4話 嘘（前書き）

予定変更でシャルに対するアルの電話釈明回

電話を書くって難しい

今までで一番出来がよろしくないかも

第4話 嘘

「アル？ あれは何？」

「あゝ、シャルロットさん？ 何をおっしゃっているのかわから
あれは何？」 ないのですが……」

「すげえ怖い…… なんていうか機械的でフラットな音声を聞いて
みたいだ……」

シャルに敬語使ったのなんて初めてじゃないだろうか？

シャルから電話がかかってくることは予測していたが、元気？

程度の前振りもなくいきなりこれだよ。

「つまりお前が聞きたいのはこういうことだよな？ 『イレーヌさ
んが残していったはずのものになぜ俺が作ったと思わしき武装があ
るのか？』」

「うん、そう」

シャルにあれを渡すにあたって、大まかに2通りの方法があった。
俺から渡すか、イレーヌさんからのものとして渡すか。

今回みたいに黒騎士などを使ったときに誤魔化しやすいのは前者
だった。

俺からのプレゼントであれば大抵のことは納得してもらえるから
な。

だけど四六時中つけててもらいたかった俺は後者ということにし
たのだ。

形見としてであれば人によっては多少のお目こぼしを貰えるだろ
うし、シャルの性格上乱暴に扱うようなこともないだろう

イレーヌさんは俺からのほうが大切に思うって言うっていた
のだがそんなことはないだろう。母親が残したものとただの兄貴分
からのプレゼントじゃその重みは違うしな。俺からは「イレーヌさ
んの形見だからいつも付けとけ」という忠告ぐらいでしかあれをい
つも付けさせることはできないだろう。

「今回起動した『ジーン』は俺が作ったものだ」
「やっぱり。でもアルが作ったってことはこれはお母さんの形見じゃないの？」

まあ、そう考えるわな。実際形見とは言い難いし……

「そういうわけでもない。確かに俺の作ったものでもあるが、形見っていうのも間違いじゃない」

『どういうこと？』

「黒騎士は覚えてるな？」

『いきなりどうしたのさ？ もちろん覚えてるよ』

「実はそのペンダントには黒騎士が量子化されて組み込まれている。ジーンも黒騎士の武装の一つだ」

『ええええええええええええええええええ！』

「驚きすぎだ」

あまりの大声に思わず耳から受話器を遠ざけてしまった。

『ちよつと待って！ 黒騎士ってコアがないから動かないし全部の機能が使えないんじゃないか？』

「一分やるから落ちつけ。話はそれからだ」

この状態じゃ文字通り話にならない。

それから俺が説明した内容はこうだ。

イレーヌさんは自分がもう長くないことを知っていた。そして俺に「シャルがISに乗ることになるかもしれない。とても不安だ」と相談に来た。そして黒騎士のことを知っていた彼女は「黒騎士をシャルロットの専用機にしてもらえないか」とお願いしてきた。そこで俺はあるものを準備したらそうしてもいいと話に乗った。数日後彼女は無事それを手に入れ俺は黒騎士をシャル専用組み立てた。

嘘と真実をごちゃ混ぜにしたこの説明は一応筋が通っているはず。

「ここまですで質問は？」

『お母さんに準備させたものって何？』

「黒騎士のコアを作るために必要だったもの」

『ええええええええええええええええええええええええ！』

「今日二度目だな。天井はよくないぞ？」

『いやそついうレベルじゃないよ！ 何さらつと流そうとしているの

！？ じゃあ何？ アルつて材料さえあればISコア作れるの！？』

「うん？ いやそれ無理」

これは嘘。本当は去年のうちに解析が終わっている。女性しか乗れない理由とかそついうのも推測ができている。作ろうとは思わな
いが……

きっとブラックボックスは俺以外には解析できなかつただらう。
でも

なぜ篠ノ之束はこんなものを467個も作れたのか

その疑問は残っている。

『でも今言ったよね？ コアを作るのに必要だったものって』

電話越しのシャルの声に思考から引き戻される。

「うん、言ったね。黒騎士のコアに必要なものって」

『……』

「おーい、シャルどうした」

「ねえ、今とんでもない仮説が思いついちゃったから聞いてもいい？」

「ん？ いいよ？」

「黒騎士ってISじゃないの？」

「正解。あれはISが発表されるのと同時期に俺が独自に開発したパワード・スーツだ。ISが普及するに従って互換性は付けたけどな」

「……………」

「また黙ってどうした？」

「いや、アルの非常識っぷりに声が出なかつただけだよ。アルの歳を考えると当時10歳かそこらだよな？ そんな年齢であんなに立派なものを作ってるアルっていつたい……………」

「褒めても何も出んぞー」

「これ褒めてるのかな？ まあいいや、じゃあ次の質問。この黒騎士のコアは量産できるってこと？」

ま、当然の質問だわな。

「いや無理。黒騎士のコア自体奇跡みたいなもんでな何回か挑戦したけどどうしてか失敗してしまう」

「設計図通りに作っても？」

「設計図通りに作っても」

これは本当と嘘が半分ずつ。「黒騎士のコア」つまりE・コアは形骸こそ取り繕えるけど中身が無理。他人の魂をこれ以上封じ込めるつもりはないし、神様の呪いでやろうとしても失敗するだろう。劣化コアはできるけどな。

劣化コアは魂がなくても動くコアだがE・コアとの繋がりが必要であり、劣化コア単体では意味をなさないようだ。以前この劣化コアで黒騎士が動かないか実験した時に知った事実だ。つまりイレエ又さんが入ったE・コアがある以上、劣化コアと黒騎士もどきを作れば動かすことはできるようになったわけだ。作る気ないけどな。

『次の質問。なんでお母さんは黒騎士を専用機にしたがっていたの？』

「現在あるどんなISよりもハイスペックだから」

『私そんな話聞いてないけど？』

「そりゃあお前、良識ある大人と未熟なガキンチョだったら教えられる内容に差があるのは当然だろう」

これも嘘。というか彼女がもともと黒騎士を望んでいなかった以上嘘にしかならないな。当時現行のISよりスペックが上なのを知っていたのは俺だけだ。

『まあいいよ。じゃあひとまず最後の質問』

シャルは一呼吸置き

『なんでコアに必要なだったものをお母さんに準備させたの？』

僅かな怒気とともにその言葉は放たれた。

『お母さんが病気だつてわかってたんだよね？ しかも多分アルがコアを作らなかつた理由はお母さんが準備したものがどうしても必要だったけど手に入らなかつたからなんじゃないの？ そんな手に入れるのが難しいものをお母さんが準備するにはかなり無理をしたんじゃないかな？ 病人に無理をさせるなんてむちゃくちゃだよ！』

その怒声はあの日のイレーヌさんを彷彿とさせた。それはきつと大切なものに対する気持ちだからだろう。

愛されていますね、イレーヌさん……

「覚悟があつたから」

『覚悟？』

「そう、覚悟。彼女の覚悟を俺は見た。どういうものかは伏せるけどすごい覚悟だった。コアに必要なものは、確かに入手は難しいけど覚悟さえあれば準備できるものだった。俺にはその覚悟がなかったけどね」

シャルの質問に俺は一切の誤魔化しをしなかった。俺にはあのぶつけられた気持ちに対して嘘を言うことができなかった。

今日唯一の誠意だった。

「これはね最初にシャルが言った質問の答えなんだよ」

『え？』

「イレー又さんはシャルのことを心から思っていたからこそ準備ができた。だから俺は黒騎士をシャルに託せた。確かに作ったのは俺だけど、そこに込められた思いはイレー又さんのものなんだ。だったらそれはイレー又さんの形見といえるんじゃないか？」

『お母さん…… くつつつわああああああ……』

しばらく俺たちに会話はなく、シャルの泣き声だけが俺たちの間にあっただ。

『ゴメンね。泣き出したりして……』

「いやかまわないけど。もしまだ泣き足りないなら俺の胸を貸してやるぞ」

『いや電話でしょこれ』

泣きやんだシャルは少し恥ずかしそうだ。泣き声聞かれればそうなるか。

今度からかいネタにしてやるっと……

「話は変わるがシャルよ」

『何?』

「黒騎士な、ほとんど機能制限していたんだけどこの前で制限が大きく外れちまったからその注意だけしとく」

『えっ、ちよつと待って、何かメモを取れるもの探すから』

「いや、メモは要らん。注意は一つだけだ」

読むだけじゃ見落としかねないからなと付け加えておく。

『うん、わかった。どうぞ』

「じゃあ注意な。黒騎士だけど

ジーン以外は絶対に使うな」

『え?』

「理由はいくつかあってな。まずあれに使われている技術、第四世代相当だ」

『は?』

「二つ目、俺が開発したコアがばれるといろいろまずい」

『まあそうだよな。一応設計図とか残ってるわけだし』

説明は不要みたいで助かる。コアが作れる人間は現在篠ノ之束だけだ。そこに俺という存在が加われればえらいことになる。たとえシャル以外が使えないとしてもだ。技術を奪おうとする人間なんてゴマンといてめんどくさいことこの上ないし、誘拐とか拘束とかそんなことにびくびく生きるのもいやだ。

「最後、あれスペック高すぎて使うとお前のためにならない。せめて国家代表倒せるようになってからだな」

『うん。第四世代なんて使いこなせる気がしないからね』

「いい子だ、しっかり実力付けろよ」

シャルが黒騎士のスペックに頼るようになることを恐れてこんな提案をしたが杞憂だったようだ。声に強くなるという意味が感じられる。

「俺が直接いじればこんな注意しなくて済むんだが当分そっちに行けないから注意だけだ」

『今度はいつ戻ってくるの?』

「わからん」

『つめたいなあ』

「お前を信頼してるからだ。してなきゃすぐにそっちに行って設定を戻して再制限してるよ」

『むう、その信頼が今は憎いよ』

電話越しにむくれているのがわかる。なんでだ? 普通信頼してるとか褒め言葉だよな?

「ジーンの様子はそっちにもうあるからそれ見ろ」

『わざわざハッキングして送ってきたやつ?』

「それ以外にもさっき送った」

『そういえばあの時なんでハッキングしたの？ あの後セキュリティの見直しとか大変だったらしいよ』

「それは簡単。飴と鞭だよ」

『どういうこと？』

「お前の親父さんとの交渉材料だったんだよ。俺の要望を聞いてくれれば技術はやる。だけど拒否すればお前らのデータがどうなっても知らんよ？っていうカード」

もちろん口には出さなかったしそんな事をするつもりもなかったがな。

電話越しにシャルがひいているのがわかる。

許してくれ。普段だったら絶対にしないが、最悪イレーヌさんの命がかかっていたんだ。

「まあメリットが大きいんだ。十分交渉の余地はあったよ」

第三世代開発が滞っていたデュノア社はすぐに飛びついたしな。

「お前に言っておきたいのはこんなところか。シャルは何か要件あるか？」

『ねえアル。アルはお母さんがどこに行ったか本当は知っているんじゃないの？』

突然の質問に俺は一瞬答えることができなかった。

「いや、それは俺も知らない。急にどうした？」

『うっん、なんでもない。じゃあね』

「ああ、また来週な」

電話を切った。

最後動揺が声に出ていなかっただろうか、それだけが不安だ。

「アルの嘘つき」

私とアルの付き合いは長い。

嘘ぐらいならすぐにわかる。

私がした質問で本当のことを答えてくれたのは最初と最後だろう。

そして

「アルが意味もなく質問に質問で返す時は嘘をついてる時だよ……」

辻褃合わせを考える時間稼ぎだ。

つまりアルは知っているのだ。

母の行方を

アルのことは信用も信頼もしている。

嘘しか教えられなかったのならきつと何か理由があるはずだ。

その鍵は母が残した黒騎士のコアが握っている。

そんな気がしてならなかった。

第4話 嘘（後書き）

朱赤の釈明

本来今回はIS学園入試直前の話を書こうと思っていたんですが説明を入れないとダメかなと思いい変更しました。

書き方が下手とかの非難も甘んじて受けますが、できればオブラートに包んでいただきたい。

包んでいただけないと作者のガラスのハートが砕け散ります。

次回こそはIS学園の入試直前を書こう。

そしてあの人を出そうと考えております。（予定は未定）

第5話 とある夏の日（前書き）

50000PV 10000ユニーク突破

感想でもっと早く書いてと言われましたが、私は筆が遅いのでこれ以上は無理です。

これ1話書くのに7時間くらいかかっています。

毎日更新できる人とかどれくらいで書いているんだろう？

もし感想に頑張るとか増えたら早くなるかも（チラッチラッ）

それでは第5話どうぞ

第5話 とある夏の日

日本の夏は湿気のせいかわヨーロッパより不快だ。
日本に来て初めての夏に辟易している俺は現在

「さっさと出せと言っている!」

「無理です。どうかお引き取りください」

口論していた。

ことの発端は目の前の実技教員がISの使用申請を怠ったため。
使用申請は事務と俺たち整備担当にそれぞれ提出することになっ
ている。

彼女はそれをせず、つい先ほど直接取りに来て口頭で「貸し出せ」
と言ってきたのだ。

「ラファール・リヴァイブは整備が不十分です。打鉄なら貸し出せ
ますのでそちらにしてください」

「本日の訓練は射撃なのだ。打鉄では不向きだ」

IS学園には2種類の訓練機が配備されている。

近接用の《打鉄》、射撃用の《ラファール・リヴァイブ》だ。

ラファール・リヴァイブは格闘戦も可能な万能機だが、打鉄がガ
ード性能を高めた近接向きの機体であるため射撃訓練用に特化させ
た装備にしてある。

火器管制システムの精度においては、開発コンセプトの面からみ
て比較する必要さえ感じない。

「大体、きちんと申請すればこんなことにならなかつたんです。前

に来た時も当日いきなりでしたよね。その時に言ったはずだ。『整備が間に合わないことがあるからきちんと書類を出してください』とね」

もし彼女が初犯なら俺も仕方ないと、メンツをかき集めて整備してもいいと思う。しかし、目の前の人物は以前も同じことをしている。その時は整備も十分だったため注意しながらも素直に貸し出したのだがそれが良くなかったらしい。

「そうだ。そもそもなぜ整備していない？ 貴様らの怠慢ではないか！」

「普段はきちんとしていますよ。ついさっきまで2年の整備科が解体と組立ての授業をしていました。あなたから申請があれば打鉄でそれをやるなり方法はあつたんです。だけど今日は何の申請もなかったから新鋭機のラファールでやりました。誰の怠慢かというのであればあなたですよ」

整備する時間がなかったわけでもない。優先しつつ急いでやれば十分に整備が可能だった。しかし俺には他の仕事もあるわけで、次の申請までに整備すればいいものを優先させる必要もなかったため放置していたのだ。

「組立てまでやっているのだろう？ ならばそれでいいから貸し出せ」

「そういうわけにもいきません。2年ではまだ経験が不足していませんのでどのような不具合が出るかわかったものではありません。責任を持ちかねます」

もしこれが3年の整備科だったら話は別だ。去年1年間教えてきたのである程度信頼できる。どこが注意すべき点なのかなどをしつ

かり教えてきたからな。しかし実技経験が十分ではない2年ではどこに落とし穴が開いてるかわかったものじゃない。

「責任は私が持つ。だからさっさと出せ」

「いくらあなたが持つと言ったところで俺たちにも責任が発生するんです。何度出せと言われても出せません」

それにこの人が責任を持つとは思えない。だってこの人は

「いい加減にしろ！　そもそも整備科など教員にしる生徒にしる操縦者になれない落ちこぼれの集まるところではないか。操縦者として整備ぐらいできるのだからな。私たちのようなエリートに使われるだけありがたいと思えば万全のサポートを常に敷いておけ！　出せと言われたらハイと出すのが貴様らのような落伍者の仕事だ！　そんなこともわからないのか、これだから男は！」

バリバリの女性至上主義、そして超エリート思考だ。

もし責任が発生したら俺に吹っかけてくるのが目に見える。

整備科で唯一の男である俺など目障りなのだろう。

俺がこんな腹立つ女に丁寧に対応しているのも言葉使いがなんとらかいわれて話が長くなるのが面倒なためだ。

だがこの女は今言っただけならいいことを言った。

結構寛容な俺だが先ほどの言葉は聞き逃せない。

「ため「ISの使用申請用の書類を提出に来たのだが、どうかしたのか？」」

今にも掴みかかろうとした俺の言葉に割り込んできたのは、凜と

した立ち姿の女性だった

織斑千冬

元モンド・グロツソ総合優勝者ブリュンヒルデの称号を持つ彼女は今年の春からES学園において実技の指導を行っている。

今年の入試倍率が例年を大きく上回ったのは彼女が教鞭をとるという情報が漏れたからだと言われている。実際ミーハーなのが去年より大幅に増えた。

わからなくもないが、すっげえ美人だし……

そんなことを考えている間にエリート女が織斑先生に何か話している。

多分状況を話しているんだと思うがどれだけねじ曲がって伝えているやら……

「ふむ」とか「なるほど」とか聞こえてくる。

そして織斑先生が出した結論は

「整備ができていないなら仕方ないでしょう。あきらめるべきです」
俺の言い分を受け入れてくれたものだった。

「とはいえ、授業に穴をあけるわけにもいきません。打鉄は動かせるのですね、アラン先生？」

「ええ、打鉄は解体していませんので、すぐに使えます」

「ではこうしましょう。実は明日同じクラスで近接訓練を行う予定でした。ですので授業を振替え、今日これから近接訓練を行い、明日射撃訓練を行うというのはいかがでしょうか？」

俺に文句はない。ちゃんと整備さえさせてくれれば書類が遅かるうがいいのだ。

「どうやらエリート女も意見はなかったようだ。」

「ですが次からは書類の提出はしっかりとしてください。今回のようにうまく解決できる日はかりではありません。そもそも社会人ならばして当然のことです」

「おーおー、言ってやってくれ。俺から行っても男のくせにで流してしまう人なんだ。女性で世界最強の操縦者が言ってくれば多少の効果があるだろうよ。」

エリート女は「わかりました」と虫の鳴くような小さな声で言った後、整備室から出て行った。

最後に俺を一睨みしていくのも忘れない。

また明日あれの相手をしなきゃならないと思うと気が重い……

「織斑先生ありがとうございました。助かりました」

「彼女も射撃に関しては優秀なんだが……」

織斑先生、そのフォローではそれ以外が問題だと言っていますよ。

「ところで織斑先生、いつから見えていましたか？」

「気が付いていたのか。怠慢とか言い始めたあたりだな」

あまりにも乱入のタイミングが良すぎたからな。

「話が終わってから出そうかと思ったのだが、アラン先生の気配が変わったからな。あわてて入った次第だよ。しかし意外だ。アラン先生は大抵のことを笑って流せる人間だと思っていたのだが」

男がこの学園でやっていくには多少のことに動じるようではない。
ない。

俺以外にいた男性職員は用務員の轡木さんをのぞいてすぐにやめてしまった。

さつきみたいな女性至上主義者や好奇の視線に耐えられなかったのだろう。

轡木さんは人当たりも良くこの学園の良心とまで謳われる人物だし、奥様がこの学園の学園長だ。わざわざ噛みつく輩もいるまい。

俺は基本整備室にいるから接触する人も少ないし、どうでもいい奴からの評価など本当にどうでもいいのでまだここで仕事をしている。

「俺が侮辱されるなら別にかまいませんし、男だからとか言われてもそれがどうした？って思います。でも、整備にかかわる人や生徒を馬鹿にされたのだけは許せなかった！」

彼女たちを侮辱する発言。それが俺の堪忍袋の緒を切った。

「確かにやる気がなくて出来が良くない奴はいる。でもな、ほとんどの奴は努力をしている。そんな奴らは将来機体の設計をしたいとか研究施設に入りたいとか操縦者をサポートする夢を持って整備科の門を叩くんだ。言っちゃ悪いが、IS学園に入ってなあなあで普通科を卒業していくやつらとのやる気なんて比較にならない」

去年の半分だけだがこの学園で教えてみて感じた。IS学園卒業という肩書を持つただけに最低限の技術しか学ばない奴が結構いる。

世界にISコアは467個。この学園を卒業してもその9割以上は専用機を持ってない。その現実に多くの生徒は打ちひしがれ脱落し

ていく。

「整備に関してだってそうだ。あいつは整備もできるとほざいたが、操縦者がする整備など俺らからすればたかが知れている。細かな調整のノウハウは機体と向かい合い続ける整備士ならではのものだ」

操縦者は花形かもしれないが、整備士がいなければ機体をろくに動かすこともできないだろう。

ISのパフォーマンスを最大限引き出すには整備士の実力による部分が大きいのだ。

「そいつらを落伍者だなんだと侮辱するような奴を俺は許せない」

あいつらの努力を踏みにじろうとした、それだけが許せなかった。

織斑先生が驚いた顔をしていた。

「なんですかその顔」

「いや、アラン先生は私の知り合いみたいな雰囲気でしたから、他人のことなど気にしないかと思えばそんなことはなかったのだな」

「もしかして篠ノ之束と比較してます？ やめてくださいよ。他人の評価を気にしないって面があるのは否定しませんが、俺はあそこまで常識知らずじゃありません」

「一応あれでも私の友人だからな、それについては黙秘しておこう」

少しだけ笑いあい織斑先生が取り換えた授業の準備のために出て行くこととする。

あと一步で整備室から出ると言う時に立ち止まった。

「アラン先生、最後に一つだけ聞かせてほしい」

「なんです？」

「なぜIS学園の教員になろうとした？」

「俺はスカウトされたからですが？」

「それは経緯だろう。私が聞きたいのは動機だ」

急に言われて少しつまる。

これを言うのは少し恥ずかしい。

「大した理由じゃないですよ」

「それでも聞いてみたいな」

誰にも言わないでくださいよと前置きしてそれを話し始めた。

「理想の関係を作りたかったからです」

「理想？」

「俺はできる限り関わる人を助けてあげたいんです」

これが教員になつた俺の行動指針

「自分で言うのもなんですが俺には才能があります。この才能で操縦者には俺が万全と思える機体に乗せることで整備士として助けてあげたいし、整備科の連中には俺の持てる技術をできるだけ教えることで教師として助けてあげたい」

才能をもらって生まれた俺が何をすべきか考えた結果がこれだった。

同僚にやりすぎだと言われる機体チェックも

俺が持つノウハウを常識的な範囲なら隠さず教えるのも

俺の調整した機体に安心して乗ってほしいから

俺の教え子たちが将来全力で機体に携わってほしいから

「そして一言だけ、ありがとっつて言ってほしいんです。わがまま
でしょう?」

感謝は願うものではない。

だけど

その一言だけで彼女たちのために頑張ることができる。

俺はあのエリート女のような輩に俺たちが調整したISには触れ
てほしくない。

整備科の面々が持てる力を尽くし安全を追求しているあの機体た
ちに、それを当然であると感謝すら忘れたあのような女が座ること
が許し難い。

IS、操縦者、整備士

これらが互いに信頼し合わないとISはその真価を發揮できない
と俺は考えている。

ISは操縦者と整備士によって成長を促され

操縦者は整備士の調整に感謝しISに命を預け技術を磨き

整備士は操縦者の感謝にこたえるためにISを改善し続ける。

そんな関係が俺の理想だ。

「教師なら助けてあげるだけで見返りなど求めるべきではないでしょう。ただ俺は聖人君子ではない。それだけではきっと疲れてしまふ。だから感謝の一言がほしいんです」

「そうだな、教師としては間違っているかもしれないな」

だが、と織斑先生は続けた。

「人間としては当然だろう」

そんな答えを返しながらこちらをまつすぐ見てくる彼女に俺は気づかしくなってしまった。

「しかしなぜそんなことを聞くんです？」

「なんとなくだ」

なんとなくって……

「ほら、早くいかないと授業に遅れますよ」

「ああ、すぐに行くとしよう」

そういつて織斑先生は整備室から出ていった。

それから織斑先生はちよくちよく整備室を訪れるようになった。しばらくして整備科に織斑先生専用のカップが置かれることになる。

他愛ない話をしてすぐ帰る。

俺もコーヒーを入れて話を聞く。

そんな日常が続くと思っていた。

織斑先生の弟が世界で初めての男性操縦者となるまでは……

第5話 とある夏の日（後書き）

千冬とは砂糖を吐くような関係にはならない予定です。

予定では友達以上恋人未満という関係？

次はプロット（というのもおこがましい何か）で三番目くらいに書きたかったシーン

ISSコア、亡国機業、織斑兄弟について。

第6話 邪推（前書き）

少しあとがきに原作ネタバレあります。

あと中盤とそれ以外の温度差が激しいです。

最後に千冬がキャラ崩壊してます。

それでもいい方はどうぞ

第6話 邪推

『勝者 シャルロット・デュノア』

その表示にほつと息を漏らし、専用機《ロンド・オアラジュー》を解除する。

今日の模擬戦は負けるわけにはいかなかったんだ。

今年IS学園に向かう私には最後のチャンスだったから……

国家代表との模擬戦

代表候補生として約一年。やっと巡ってきた最初で最後のチャンス。

アルとの約束「黒騎士を使うなら最低でも国家代表クラスの腕を持つこと」

もちろん国家代表に勝ったからといってすぐに使わせてもらえるとは思っていないよ。

でも勝ったという事実はアルだって無視しないだろうし、制限を緩めるくらいはしてくれると思う。

本当はきちんと国家代表になるとか、もっと時間をかけて証明していきたくっただけだけどそうもいかなかった。

織斑一夏のIS起動

これまで女性しか扱えないとされてきたISを男性が動かした。それが世界に与えた影響は大きい。

世界中で男性に対する検査が行われたらしいが結果は皆無。

結局織斑一夏の特異性を証明するだけだった。

フランス政府も接触を持つとしたけど結果は惨敗。日本政府だ

けならなんとかなるらしいけど、その先に待っている彼の姉ブリュンヒルデの称号を持つ織斑千冬のガードが堅かったらしい。

その織斑一夏がIS学園に入学するという情報が入り、そこでの接触を持つことにした。生徒同士の接触なら織斑千冬といえど断つことはできないだろうから。そして選ばれたのが私。年齢が同じだからというのが理由だった。子供でも作ってこいとかふざけたことを言った豚（豚でいいよあんなの）には思いつきりグーパンしてあげた。周りもさすがにその発言はどうかと思ったのか軽い注意だけで済んだ。

私が産むのはアルの子供だけだよ！！

最初、IS学園には行かないつもりだった。IS学園にはアルがいるけど、もつと立派になった私を見てほしかった。だけど国の命令じゃ無視するわけにもいかない。

そんなわけで急きよ日本に行くことになった私は、無理を言っただけで国家代表との模擬戦を組んでもらったんだ。このままだと3年も黒騎士に触れることができないままかもしれないからね。なんとかアルに認めてもらうために苦肉の策だったけど……

実は今日IS学園の起動試験なんだ。

IS学園ではいくつかの日程で起動試験が行われる。倍率が1万倍を超える以上1日では難しいしね。

織斑一夏がISを起動したのが初日の試験開始前だったせいもあって全体的に試験は延期。

おかげで問題なかったこの模擬戦と私の試験日がかぶってしまった。IS学園に問い合わせたところ、この模擬戦の映像を送れば起動試験を免除か、日程をさらに変更してくれるって言ってくれた。

多分普段だったらしてくれないけど今回はいろいろあったから特別なんだと思う。

なにやら周りが騒がしい。

聞き耳立ててみると私が勝ってしまったことが問題みたいだ。

IS操縦の腕は操縦者のセンスによる部分が大きいはいえ、キヤリアがたがだか2年の私が第二回モンド・グロツソで好成績を残している代表に勝ったのは予想外だったらしく大慌てで電話とかパソコンをいじったりしてる。

もしかして私やっちゃった？

「シャルが国家代表に勝った!？」

「ええ、あの子張りきって訓練とかしてたからね。適性もAだし十分ありえたわよ、大番狂わせ。もちろんコアの発達ではこちらが上だけど、それだけで決まるほどISの勝負が甘くないことぐらい知っているでしょ？」

現在職員寮の自室でイレエ又さんと通信をしている。

そのなかでシャルの近況を知った。

しかしあのシャルがねえ。どれだけ訓練してたんだろうか？

「ちよつとオアラ出してもらえますか？」

「ええ、いいわよ。オアラ、アルお兄ちゃんが呼んでるわよー」

「うん、ちよつと待ってー、今行くー」

パソコンからイレーヌさん以外の声が聞こえてきた。

しばらくして出てきた人物は俺の知る二人を合わせたような外見をしていた少女だった。

この子こそ元タンペットモデル、現ロンドモデル《ロンド・オアラジュー》の中にいたもの。

黒騎士がタンペットモデルを取り込んだ際にイレーヌ宅にいきなり現れた子供だ。

名前はもともとタンと呼んでいたが機体名変更に伴い改名。今ではオアラと呼んでいる。

「お兄ちゃん僕にご用事？」

「うん、オアラに聞きたいことがあるんだけど、シャルの模擬戦で必要以上にお手伝いとかしてないよね？」

「ぶう、それおねえちゃんに失礼だよ。お兄ちゃん。僕は何もしてないよ。全部お姉ちゃんが頑張ったから勝ったんだ」

この子は俺のことをお兄ちゃん、シャルのことをおねえちゃん、イレーヌさんをお母さんと呼ぶ。

最初のころ舌足らずな口調で「おにいたん」と呼ばれイレーヌさんと悶絶したのはいい思い出だ。

なんというか小動物をめぐる気持ち？ 断じて俺はロリコンではない！！ あの頃はどこそその北海道のファミレス店員の気持ちがわかった。小さいのはかわいい！（愛でる意味で）

オアラがむくれちゃった。こうなると機嫌取りしないとまずいな。

「オアラ、この前あげた熊のぬいぐるみ気に入ったかい？」

「うん！ 大きくてふかふかで、一緒に寝てるよ！」

機嫌とり終了。オアラが純粹（単純）な子で助かるな。

「じゃあ今度はその子のお友達をあげるね」

「わーい」

ついついこの笑顔を見たくてプレゼントをしちゃうんだよな。あまりにプレゼントをあげすぎてイレーヌ宅を増築したり家具を増設したりした。

パソコンで作って送りこんだりするから気分はグリッ マン？

オアラはシャルと同じでかわいいものが好きだ。これは当然ともいえる。

オアラは常にシャルの影響を受けているのだから。

「オアラあとで送ってあげるからイレーヌさんと代わってくれるかい？」

「うん！」

とととと画面から消えていった。イレーヌさん呼びに行ったのだらう。

しばらくすると再びイレーヌさんが画面に映る。

「聞きましたよ。またオアラに物をあげるんですって？ あまり甘

やかしちゃだめですよ」

「いや、ついつい……」

「ついじゃありません！ あなたはいつもいつも

イレーヌさん子育て講義中……… しばらくお待ち下さい………

というわけです。わかりましたか」

「はい………」

疲れました。イレーヌさんこういう話長いし………

「それですね、シャルに関してなんですがいくつか武装換装シス

テムを許可しようと思うんです」

「露骨に話をそらしたわね」

「気のせいです。許可するのは背面の腰部スラスタは確定として、あとナンバーズの4、5もしくは6を許可しようと思うのですが」

「まあいいわ。6はまずいんじゃない？ 今でも Rondモデルは世界中で群を抜いた性能があるわ。6まで公表してしまえば完全なオーバーテクノロジーよ。まだ4と5の組み合わせのほうが言い訳が聞いわね」

「やっぱりそうですか。じゃあシャルがIS学園に来たらコアバイパスの調整とかすることにしますよ」

「ええ、よろしくね。』(コンコン) アラン先生、いるか？』あら、お客さん？」

「すいませーん今あけまーす！ すいません。もともと今日織斑先生と話を約束だったんですよ」

「こんな時間から？ 男女二人きりで？
現在23時だ。」

「男女二人きりって…… 仕方ないんですよ。なんでも弟さんのことで二人きりで話したいそうで……」

今日の昼ごろ整備室まで赴いて今晚時間を作ってほしいと言われた。

俺からも話があったため御渡りに船だった。

「(普通女性がこんな時間に男の部屋を訪れるものじゃないわ。これはシャルに強敵出現かしら?)」

「まあいいわ。おやすみなさい」

「おやすみなさい」

通信を切ると同時、急いでドアに向かい鍵をあける。

「もしや電話中だったか？ ノック前には気付かなかったが話し声が聞こえた」

すごい。美人にこんな顔をされるとどうしていいかわからなくなる。

その表情を見てこの話はやめようかとも思う。

だけと言うべきだろう。

織斑先生の重荷を少しでも楽にできるなら……

「俺からも話したいことがあったんです。長くなりそうですが、少しお時間よろしいですか」

「ん？ ああ聞こう。こちらの願いも聞いてくれたんだ。少し長くても別にかまわないよ」

安心しているその顔見るのがつらい。

「俺の話をする前に一つ聞かせてください。織斑先生はISコアの開発に携わっていますか？」

「イエスだな。作り方を聞いても無駄だぞ。どう作っているかは私も詳しくは知らんからな」

「聞いたかったのはあなたが携わっているというその事実だけです」「それがどうかしたのか？」

俺は一拍だけ間をおいて話し始めた。

「どこから話そうか迷っていましたが一夏君いやあなたについてお話ししようと思います」

「一夏はわかるが、私だと？」

「ええ、勝手にで申し訳ありませんがあなた方のことを調べさせていただきますました。これについて謝罪をしたいと思いました」

「気にするな。あんなイレギュラーなのだ。経歴などを調べるようにIS学園側から言われたんだろう」

僅かに不快そうな顔をしたが許してくれた。仕方のないことと割り切っているのだろう。

「半分、一夏君に関してはそう言われました。たいしたことはわかりませんでした。一夏君が女性に好意をよく抱かれることぐらいです。ですが俺が話したいのは勝手に調べたあなたの調査結果についてです」

「ほう、私の過去に何か問題があったと？」

織斑先生が興味深そうに俺を見つめてくる。

「調べた結果何の問題もありませんでしたよ。データ上では」

「データではないところに問題があったと？」

俺は一冊の本を出して机の上に置いた。

「問題はこれの中になりました」

「これは卒業アルバムか」

「はい、とある小学校のものです。あなたも持っているはずですよ。

あなたが卒業した学校、卒業した年のものですからね。一見問題なさそうに見えます。ですがこれの中にあなたが出てくるのが5年後半の行事からでした。これが少し気になってこの小学校にいた生徒や教員を探して話を聞きました。その結果あなたは転校してきたという情報が手に入りました」

データ上では一貫してこの学校で卒業していたが、それでは聞き込みの結果と食い違いが生じる。

「データの改ざんでしょうね。おそらくは篠ノ之東が行ったのでしよう。俺でもデータ上では改ざんの証拠が見つけれませんでした。アルバムと聞き込みからあなたが「居た」と証明できたのが小学校5年に入ってからということになります」

白騎士は十中八九織斑先生だろう。この後の俺の話が真実だとすれば白騎士事件の真相が大きく変わってくる。

そう、あれはISの有用性を知らしめることが本来の目的ではなかったということになる。

織斑先生の過去が改ざんされたのもそこに行きつく。

「ここまでが一つ目の話」

今回の話は3つの事実と1つの仮説。今その一つ目の事実が終わった。

「次にISコアについてです」

「さっきの質問と何か関係があるのか？」

「ええ少しだけ。俺はつい先日ISコアの解明に成功しました」
「なっ！」

驚いて腰を浮かせるが、すぐに腰を下ろす。

「それが本当なら世界中が驚くな。さすがは半年でIS学園整備科副主任になった男だな。それで？ コアを作ろうと思っっているのか」
「去年暇つぶしも兼ねて論文を大量に書いたのだがその功績で副主任に任命された。」

「去年だけで主任がこれまで出した論文を超えるそうだがどうでもいい。」

「給金は上がったが、もともと小金持ちの俺にはあまり意味がなく責任が増えただけだった。」

「エリート女に文句を言えたのもこの肩書が大きい。」

「いえ、あれを作る気はありません。だってあれを作るには

材料として人間が必要になります」

「そうか、そこまでわかっているのか」

「ええ、まさか科学の粋に人間の魂ともいえるものが、オカルトが必要なんて誰も思いません。ブラックボックスになるわけです」

そう俺が行きついた結論はISコアとEコアはほぼ同じものだというものだった。

違いは魂の保存率とでもいうもの。

100%を封じ込めるEコアに対し、ISコアは劣化して50〜60%がいいところ。

それでも魂が入っている分Eコアからのバイパスで動いているだけの劣化コアよりは性能がいいようだ。

「ファーストシフト 一次移行や セカンドシフト 二次以降はその魂が成長した証」

ファーストシフトで魂が操縦者とながり成長し、セカンドシフトではほぼ完全な魂となる。操縦者の情報を取り込み成長したために専用機はその人物以外が動かせなくなる。汎用機は設定的にもともと成長がしないように設定されている。この設定もブラックボックスの一部であり、設定の仕方は篠ノ之束が発表したものでどういうことが起こっているのかは誰も知らない。

オアラがシャルと好みが似ているのも当然だ。

シャルと元になった魂がまじりあって成長したものだからな。

オアラこの1年で流暢に話せるまでに成長したのもそれだけシャルがISを起動させたからだ。

まったくあいつはどれだけ訓練に明け暮れたんだか……

「篠ノ之束がどうやって450人以上を用意できたのかわかりません。その人たちを犠牲にしたことも俺には文句が言えない」

俺もイレーヌさんをコアに封じ込めてしまった。

束博士も何らかの理由があつたのかもしれない。

オアラがシャルに似ているのと同時に、織斑千冬の面影を残していることと関係があるかもしれない……

推測でしかないがな。

「ISは魂にある程度の類似性を持たないと動かないと推測しています。たとえば同性、たとえば家族、たとえば

クローン」

向かいに座る織斑先生の顔色が僅かに変わってきた。

もう一口コーヒーを飲む。

「では最後に一年前のある出来事とそれにまつわる組織から話そうと思います」

「一年前というと私が赴任したころだな」

「ええ、ですがその出来事はフランスで起こりました。フランスのデュノア社がとある国際テロ組織に襲われました。当時開発中の第三世代を狙ったものでした。これをテストパイロットが撃退したというものです。これは部外秘でしたが俺は独自のルートから手に入れたものです。そしてその組織の名前は《ファントム・タスク》」

「ほう。それなりに有名だな」

「実は個人的にその組織のことを調べていたのですが不思議なことに日本だけ別な名前で呼ばれているようです。それは《亡国機業》。

はじめ俺は「きぎょう」の部分のカンパニーなどの意味で書く企業だと思っていました。ですがこれは間違いで機業と書くらしいです」

テーブルにそれぞれの漢字を書いていく。
それに伴い織斑先生の顔がこわばっていく。

「機業とは『織物業』を指すらしいですね。織斑先生」

「そう……だな……」

うつむいてしまい顔色は見えない。それでも俺は話を続ける。

「調べていくうちにこの組織がどうやら日本で生まれたらしいということがわかりました。第二次世界大戦中の日独伊三国同盟、その中で三国はある部隊を発足します。ゲリラ戦に特化したその部隊の指揮官は織斑四季陸軍大佐。実動部隊には同盟国から選抜された兵士が50人、一個小隊いたと思われます。この部隊は目覚ましい活躍をしますが、その後敗戦。ここで織斑大佐は敗北を認められず、この部隊ごと姿を消します。そして各国から同志を募り、組織を立ち上げます。部隊の再編した織斑大佐の名前にちなみ、このときつけられた名前が「失われた国々から生まれた織物業」、亡国機業だったと言われています」

口が渴いたためコーヒード口内を湿らせる。にがいな……

「この組織の中ではさまざまな研究がおこなわれているようです。主に分けると二つ。人間と兵器。人間分野ですがこの組織では優生学も推奨されていました。が人員の少なさからうまくいかなかった。そしてある技術が生まれます。それが遺伝子強化^{アドヴァンスト}個体。生まれなければいけないということでしょう。これによって優れた個体が生まれました。たとえば人間が本来持つのが難しい重量を持てるほどに力を優れた個体や異性に異常に好かれやすい個体とかね」

動物はフェロモンというにおい成分を感じ取る。人間は大幅に退化してしまいほぼそれがない。これはコミュニケーション能力が発達したために必要がなくなっただからだと言われている。しかしなくなっただけではなく未だにわずかながら残っているという研究成果が出ている。もし強烈な性に関するフェロモンを有する個体があれば

ばその個体が好かれやすくなる可能性もないわけではないだろう。

「力を持った個体は戦闘員として、異性に好かれやすい個体は諜報員として活躍しそうですね」

古くからハニートラップというものはあった。基本は男性に対し女性を差し向けるが、女性に対し男性を差し向けたという事例もある。

「この組織は3年前に一夏君を誘拐していますね。あなたの経歴を調べる上でドイツ軍の内部も調べさせていただきました。当時日本の中学に通っていた一夏君が下校中何者かに誘拐、あなたはドイツ軍の情報をもとに彼を救出。しかしそのためにモンド・グロツソを棄権したというものです」

「よくそこまで調べたな。ハッキングは犯罪だぞ」

「当時から自分の国の暗部として亡国機業をマークしていたドイツ軍が誘拐したという情報をあなたに教える代わりに、あなたを教官としてドイツへ招致。あなたはこのときにドイツ軍から亡国機業の情報を受け取ったのではないかと推測しています」

「これらのことから俺は一つの推論を考えました」
「推論？」

「はい、まずあなたは織斑大佐直系の亡国機業で生み出されたアドヴァンスド、一夏君はあなたをもとに作られたクローンを調整し男性として生まれた個体」

「もういい」

「そして十数年前当時日常に退屈をしていた篠ノ之束が亡国機業に接触。武器の開発に協力、ここで作られたのがIS。使われたのはあなたのクローンたち。そしてあなたが11歳ごろ組織から脱走。このときに一夏君も連れ出した。東博士も一緒だったんでしよう。ISのコアも持ってね」

「もういい」

「そしておよそ5年後、白騎士事件で亡国機業に手を出すと暗に脅しをかける。あなたがあれほどのもの乗っているとなれば手出しがしにくくなるから。その後、ISを世界にばらまき世界があなたを狙わないようにした。5年もかかったのはおそらくISのコアが脱走時未完成だったからじゃないでしょうか。そして三年前の事件の真相は一夏君を取り「もうやめてくれ!!!」」

顔をあげた

「そう「ていう邪推です」……は？」

うん鳩が豆鉄砲を食らうってきつと顔なのだろう。普段がかっこいい織斑先生だから一層面白い。

「だって推測に推測を重ねてるんですよ？ しかも他人を貶めるよ
うな。もう邪推とっていいでしょう？」

「いやさっき何個も証拠をあげていただろう！」

「証拠？ 何のことです？」

俺はすつとぼける。

「私の経歴とか」

「ああ、きつと篠ノ之束が『ちーちゃんの小さい頃は私だけが知ってればいいの！』とか言つて改ざんしたんじゃないやありません？」

「一夏がISを動かせる理由とか」

「俺そんなこと言いました？」

「言っただろう！ 一夏が私のクローンを改造した个体故にISを動かせると！」

「勘違いはいけませんね。俺は推測と言っただけですよ？ 俺もコアの構造がわかっただけで、きちんと動く理由がわかってるわけではないので」

「亡国機業のリーダーだった織斑大佐とか！」

「偶然って恐ろしいですね。織斑先生と同じ名字だ。でも珍しい名字ですけど織斑先生以外にいないわけじゃないでしょ？」

「私が戦闘に特化したアドヴァンスドとか！　一夏が諜報用の個体とか！」

とか！　って普段使わないような表現をする織斑先生かわいいなあ

……

「何を言ってるんですか？　俺が言ったのは力を持つ個体とかがあると言ったのと一夏君が女性に好かれやすいと言っただけですよ？」

一夏君顔いいし性格もいいみたいですから持ってもおかしくないですしね。織斑先生は結構力もちですけどそれだけじゃあなんの証拠にもならないでしょう？　第一もしアドヴァンスドで何がいけないんです？」

「なんだと？」

「アドヴァンスドの何がいけない？　そう生まれたただけだ。これが自分から女を引っ掛けたいからとかいってモテるように改造したり、そのことを知って悪用したら俺も思うところありますけど、ただそう生まれたただけなら顔がいいとかとなんら変わらない。織斑先生は美人を見て『美人だから成形して不細工にしろ』とは言わないでしょう？」

ヒートアップしていた織斑先生が疲れた顔になっていく。

「わからなくなってきた。アラン先生はなぜこんな話を私にしたんだ」

「えっ？　そうだなあ。特に意味はない？」

「意味もなくこんな話をしたのか！！」

おっとまたヒートアップ。

「意味があるとすれば、俺がこんな邪推する人間ですよって教えるためですかね」

「どういうことだ？」

「こんな邪推誰にも話すことできませんし、かといってそれなりに

うまく話がまとまったんでお蔵入りにするのももったいないかなっ
と思ひまして……」

「私に話してるじゃないか」

「当事者なら噂を真に受けて妙な噂流したりしないでしょう」

自分テロ組織にいましたなんていう奴は頭がおかしいとしか言え
ない。

「それになんかここ最近織斑先生思いつめてらっしやったようです
し息抜きになればと思ひまして」

「逆に疲れた」

「疲れるような要素ありましたかね？ それとこんな邪推する人間
でよければグチとかにつきあいますよ」

「馬鹿じゃないのか」

「いやほら吐き出し口のない悩みとかってつらいじゃないですか。
だから何かあれば相談に乗りますよ？」

これが今回の本題。

「それでまた邪推するのか？」

「そうですね。邪推って楽しいですし」

「言っていることがゲスだぞ？」

「いいじゃないですか。誰かに言うわけでもありませんし」

誰にも言わないそのことを強調しておいた。

ふうと、どちらからともなくため息をついた。

口を開いたのは織斑先生だった。

「一夏のことをなぜ引き受けた？ あんな邪推をしていたら面倒に
なると思わなかったのか」

「まあ邪推ですし。何より前に言いましたよ」

もう一度言おう。俺の行動指針を確かめるために……

「俺は周りの人の助けになりたいんだって。そしてその中にはこれから入学してくる生徒や織斑先生だって含まれてるんです。だから困ったことがあつたら頼ってください」

「アラン先生後ろを向いて立ってもらえないだろうか？」
「別にかまいませんけど？」

まさか生意気言つたからケツキツクとかないよな……
織斑先生にやられたらシャレにならない……

それでも言われたとおりに後ろを向いて立つ。
一応衝撃が来る覚悟だけしておく。

衝撃が来た

でもそれはほんのわずかなもので尻とかではなく背中……

「あの織「こつちを向いたら殺す」はい……」
その声は僅かに震えてて、背中をつかんでいる手が震えているのもわかって俺は何もできなかった。

しばらくの間部屋には誰かが泣く声だけが静かに響いていた。

掴まれていた服が解放されていたのはどれくらい経ってからだろう。

「もういいぞ」と弱弱しく聞こえた声で振り向く。

目の前にいるのは誰だろう？ 織斑先生とは思えないのだが？

うつむきがちになって耳まで赤くなって恥ずかしそうな目の前のかわいい生物はなんだろう？

「アラン先生」

目の前のかわいい生物の口から出てきた声は織斑先生のものだった。やっぱりこれ織斑先生なの？ 普段と違いすぎてかわいすぎて困るんだけど……

「えーと、何でしょう織斑先生」

「もうすぐ一夏が入ってくるので織斑ではなく千冬と呼んでいただけないだろうか」

「いやでも先生って付ければ」

その先は言えなかった。泣きそうな顔をしながらとんでもない殺気を飛ばすという人間離れした技術を発揮している彼女によって……

「えっと、千冬先生」

「うむ、それでいい。私もアルフオンス先生と呼ぶことにする」

「いや言いにくいでしょう」

「ならばアル先生だな、これならば問題ない」

「いやなんか微妙じゃないか？ とある先生みたいで……」

「まあうれしそうだからいいか。」

「そうだ、一夏の手助けをしてもらおうお礼もしていなかったな」

「いや、いいですよ。さっきありがとうって言うてくれたでしょう」

「飯にも社会人同士なんだ。それでは気がひける。そうだ！手を出してくれ。そして目をつぶってくれないか？」

「なんかくれるんですか？ あんまり高いものとかやめてくださいよ。俺の気がひけます」

「安心しろ。金銭的な価値はゼロだ。ほら早くしないか」

なんかテンションがおかしい気がするがまあ言われた通りにする。

はっ、まさかさっきの腹いせに今度こそ腹パンでもする気だろうか！

気付かれないように腹筋に力を入れておこう……

また衝撃が来た。

今回事予想外のところで顔っていうか口付近…… ついでにやわらかい…… つうかこれってまさかっ！

思わず目をあけると顔の前に織斑先生の顔があった。いや千冬先生か……

つうかこれキスされてんの！？ なんで！？

いや確かに全部知った上で相談乗りますとか言ったけどフラグなんかいつ立った！？

1分にも10分にも感じる長い時間が流れる。

ゆっくりと千冬先生の顔が離れていく。

目をあけた千冬先生が初めに言った言葉は

「こついうときは目をつぶるのがマナーではないか？」

文句だった。きつと俺があけて焦ったのを感じたんだろう。

「え、いやっ、あの」

混乱の極致にいる俺の口から洩れてくるのは言葉にならないに

かだった。

「ところでアル先生は初めてだったか」

「まあそうですね」

質問に答えると言う単純な作業を何とかこなすっていうかなにこたえてんだ俺！

「ふむ、それは困ったな」

「なにがですか」

やっとのことで混乱から立ち直ったけどよくわからないことを干冬先生が言いだした。

「いや、お礼としてファーストキスあげようとしたが、同じものをもらってしまった。これではお礼にならない」

「x」

あまりの事態に言語を話すことを放棄した。

ファーストキスですかいや男性と女性のそれに対する重要さは段違いだと思えますっていうかなんで俺なんかそんなものくれちゃったりするんですか確かに干冬先生みたいな美人からしてもらえてうれしいって思いますけどあんたそれでいいのか!?

「それでは夜も遅いし帰らせてもらおう。今度何かお礼を考えておくことにする」

そう言っただけで俺が止める間もなく颯爽と部屋から出て行くとする。そして扉が閉まる直前

「そうそう、私は優しい男が好みだようだ」

とかおっしゃってくれた。

えっとこの場合俺のこと指してんのか？

俺どっちかっていうと優しくないとと思うけどね。

どっぴつことなの誰か説明して!!

この日俺は眠ることができず翌日ドリンク剤を飲みながら講義を

するハメになった。

思わずキスをしてしまった。

今まで私には頼れる人がいなかった。

親から逃げ、ずっと一夏を守ってきた。

そんな中で誰かに寄り掛かるといふ経験はなかった。

信頼しているのは束ぐらいだが、あいつはどちらかというと対等な関係だし頼ったりしたら斜め上の結果を出してくるだろう。

そんななかで私のすべてを知っておきながら邪推と誤魔化し、さらには頼っていいと言われた。

あんなふうに優しくされたことなんてなかった。

その優しさに今まで張りつめていたものが切れてしまって、つい涙が出てしまった。

それを何も言わず受けとめてくれたことがうれしくて名前でも呼んでもらったり、愛称で呼ばせてもらったりしてしまった。

もしかして私は意外と惚れっぽかったのか？

下手な言い訳だったが、また何かしてあげる口実も作れた。
どんなことをしたら喜んでもらえるだろうか？

まずはそういうことに詳しくそうな人から話を聞いてみるか……

その夜あまりの恥ずかしさに眠ることができなかった。

翌日、つい授業中にあくびを漏らした織斑先生に生徒たちは世界の終りが来ると戦々恐々としたという……

第6話 邪推（後書き）

いくつか説明を

ISコアについて

多分本編にでてきた白い騎士とかラウラの夢の中に出てきた尋問官とか、コアに搭載されたAIとかだと思っんですが、本作では人間の魂ということにしました。

操縦条件について

こちらも推測ですがAIの姿がすべて女性であることが女性しか乗れない原因と深く結びついているのだと思ってます。

織斑姉弟について

ぶっちゃけ筆者の推測はこれに書いたとおりです。
これだとマドカとか一応説明つくんで……

こういう推測とかがって書いたらまずいのかな？

千冬はやさしくされたらころっといってしまった。
どうしてこうなったし……

あと途中でナンバーズって出てるけどリリなのじゃないですよ。
決して金属爆破したり幻出したりはしませんのであしからず。

修正

2巻で千冬が小学校に行っていたという記述があったため千冬の過去を修正しました。

もしかしたらどこかおかしくなってるかもしれないのでおかしかつ

たら教えてください。

第7話 邂逅（前書き）

前回とは雰囲気ガラリと変わります。

コメディ―色を出してみたいと思ってみました。

うん、私にはこれが限界だったよ……

キャラ崩壊注意です。

特に千冬……

第7話 邂逅

俺は細かな整備が終わると急いで教員用の整備室から部屋に戻っていた。

IS学園にはいくつかの整備室がある。

それぞれアリーナに併設されており、用途に応じて使い分けるのだ。

教員用整備室っていうのは字の通り教員が打鉄などの訓練機の整備を行うための整備室だ。前に行った解体と組立てなんかの講義をしたあとは基本的に俺ら教員がここでチェックを行う。

蛇足だったな。

さて俺はなぜ急いで部屋へ向かっているのか？

答えは掃除をするためだ。

急に俺の部屋に同居人が増えることになり彼の分のスペースを作らなくてはならないのだ。

二人で一部屋を使わなければならなくなった理由を説明しよう。

まず明日はIS学園の入学式だ。

ちなみにIS学園は完全入寮制。

もうほとんどの新入生は入寮しているところだろう。

シャルは本国での仕事なんかがあるらしく今日来るとか言っていたな。

ここで問題となったのが織斑一夏の入寮だ。

一夏君は男。だが他の生徒は当たり前だが女性。

そのため自然と学生寮も女子寮であり、そんな中に男を放り込んでいいものかということだ。

これ、俺が気付くまで誰も気がつかなかったんだ。代表候補生が3人も入ってきたりして大変なのはわかるがそこは気付いてほしかった。

急遽行われた話し合いの結果、俺と相部屋になることに決まった。元々俺はあまり部屋に寄りつかないで整備室で過ごしているし意見はなかった。

一夏君にはまだ知らせていないから明日学校で教えることになる。シャワー上がりにはったりは？ 黒兎の寢床侵入はどうなるの？ って毒電波が来た気がしたが気のせいだな。

女子しかいない学生寮には入れられるわけないだろう、常識的に考えて。

一夏君には教師と同室って言うのは少し酷かもしれないけど諦めてもらおう。

設備は学生寮よりいいし（風呂トイレ別、キッチン付き）、俺も寝に戻ってくるぐらいだしうるさいこと言つつもりはないから許してくれ。

そんなわけで一夏君の生活スペースを空けるために掃除をしなければならなくなったのだ。

部屋の前に着くと千冬先生がドアの前に立っていた。

「千冬先生どうしてここに？」

「今日の昼に掃除をすと言っていただろう？ 手伝おうと思っ
てな」

あのキスの日から千冬先生とは……………普通だ。

あの日の翌日こそ整備室には来なかったが、その次の日には普通にコーヒーを飲みに来た。

あまりにもいつも通りでむしろこちらから話を振ることすらためらわれた。

ヘタレと言いたくば言え！　こちらら今回の人生で彼女いない歴イコール年齢なんだよ！

それからもそれまで通りに話しに来てあの部屋での出来事が夢幻の類だったのではないかと思うことすらある。

もし新たに加わった俺たちの習慣がなければ本当にそうだったのかもしれない。

千冬先生がお弁当を作ってきて、整備室で二人で食べるようになった。

なんでも料理の練習兼一夏君のことのお礼らしい。

よく食堂に行くのが面倒で昼を抜いていた俺には嬉しい限りだった。

きつと以前よく昼食を抜くと言ったのを覚えていたんだろう。

味については触れない。

ただ俺がおいしいと言ったら、千冬先生がすまなそうな顔をしたのは覚えている。

少しずつおいしくなってきたのは確かだな。本当に少しずつだが……

さっきの今日の昼って言うのはこのことだ。

こんな毎日が続くせいであの日のことを聞く機会を失ってしまった。

普通に話に来ているところに蒸し返すのもばからしい。

千冬先生がスウェットの上下を着ているのが新鮮だ。

基本的にこの人、スーツかジャージしか着ないしな。

だけど

「大してすることないですよ。少しものをまとめて掃除機をかける程度です」

正直居てもしてもらうつことなんてない。

私物がもともとなし、整備関係で持ち込んだものは劣化コアを使って収納してある。

むしろ男のロマン本とかの整理なんかがしやすい分居してもらえないほうが……

「それなら夕食を作っていよう。食材も持ってきている」

そう言っって掲げた袋に見えるのはジャガイモや玉ねぎ、その他いくつかの食材。

なるほど。カレー、シチュー、肉じゃがのどれかか。

前者2つなら味付けに気を遣わなくて済むので、料理があまり得意でない彼女には最適だろう。

「掃除の後に作ろうと思ったが、そういうことならアル先生が掃除をしている間に作ってしまえるな」

断りにくい……

袋から見える食材は明らかに一人分を超えている。きっと二人分、もしくは冷凍分まであるかもしれない。

この量を千冬先生一人で食べるといのは酷だろう。3、4日同じものだと飽きるし、余った食材で何か別のものを作るとかはまだ苦手だろうしな。

「じゃあ、ご相伴にあずかりますね」

わざわざ食材まで買ってきてきているのを追い返すのも悪いしここはお言葉に甘えるようにしよう。

鍵を取り出しもせずドアノブを回す。

「鍵を閉めていないのか？ 不用心だな」

「特に何かをおいてるわけでもありませんし」

通帳とかは常に持ち歩いているし、パソコンも量子化している。あとすれば元々備え付けてあった家電などだが、そんなものを持ち出せるとは思えない。その他は整備室に置いてある。

「教員寮の入り口はオートロックですし、このIS学園で窃盗なんてまず起こらないでしょう？」

IS学園の出入りは厳しくチェックされているし、セキュリティのレベルも高い。

「一夏君が来たらきちんと施錠するようにしますよ」

同居人ができたらさすがにまずいだろうから直さないと。

そんなことを考えながらドアを開き部屋へと

「御帰りなさいませ、ご主人様」

思わずドアをスツと閉めてしまった俺は悪くないと思う。

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺が扉を開けたら、メイドさんに出迎えられた』

な、何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……

頭がどうにかなりそうだった……

催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

「あれはなんだ？」

背後から千冬先生の怒気を感じる。

や、やばい。俺ここで死ぬかもしれない……

「なんでしようね、あっはっは……」

渴いた笑いしか出てこない。

あれシャルだったよね？　なんで俺の部屋にいるの？　なんでメ

イド服着てるの？

ちなみにメイド服はクラシッくなヴィクトリアンメイドタイプだった。

シャルにはちょっと落ち着きすぎているデザインなんじゃないか？　むしろイレーヌさんとかのほうが似合いそうな……　って混乱しているな、いかんいかん。

「えーと、よく思い出してみるとフランスにいた妹分なんじゃないかと思うんで、きつと日本ではメイド服で出迎えるとか文化を勘違いしてるんですよ」

「ほう？」

怒気が、怒気が痛い……

「な、なので教えてやらなければと思います」

「そうだな。正しい日本の文化を教えてやれ」

「ではあけますね」

千冬先生に断りを入れてドアを開き部屋へと

「御帰りなさいませ　ご主人様」

思わずドアをバンツと音を立てながら閉めてしまった俺は悪くないと思う。

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺が扉を開けたら、シャルのメイド服が変わっていた』
な、何を言っているのかわからねーと思うg(r)y、

「もう一度聞く。あれはなんだ？」

背後から千冬先生の殺気を感じる。

「ほんとなんでしょうね、あっはっは……」

渴いた笑いしか出てこない。

いや確かに「ヴィクトリアンメイドタイプはイレーヌさんのほうが」とか考えたよ？

だけどそれはフレンチメイドタイプに着替えろってことじゃなかったんだよ？

確かにこっちのほうが似合ってたけどさ……

つうか「ほし」とか「おんぷ」とかって感じ取れるものなんだ……

「すみません。おもわず扉を閉めてしまいました。今度こそ教えようと思います」

「そうしろ。私は気が長くない」

「ではいきますね」

みたびドアを開き部屋へと

「御帰りなさいぴょん！ ご主人様」

思わずドアを下ゴオツと音を立てながら閉めてしまった俺は悪くないと思う。

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺が扉を開けたら、シャルがバニーになっていた』
な、何w(ry、

「コーホー」

千冬先生が暗黒面に堕ちてしまわれた。

振り向くのが怖いのでドアを閉めた体制のまま話しかける。

「すみません。10分ほどお時間をください。あの馬鹿をとっちめ
てきますんで」

「コーホー」

「何を言っているかわかりませんがOKとりますよ」

「コーホー」

「では行つてきます」

「コーホー」

早くしろと言われた気がした。

最後のチャンス(俺の人生的な意味で)でドアを開き

「御帰りなさい。ご飯にする？ お風呂にする？ それともわ・た・

しっ」

シャルは裸エプロンだった。

ドアを閉めようとした反射を抑え込んだ俺を褒めてやりたい。

できるだけ千冬先生の視界にシャルが入らないように身体で遮りながら部屋へと入りドアを閉める。

「どうやってここに入った？」

「鍵かかってなかったから普通には言っただよ？」

「玄関のオートロックは？」

「ハーフフレームのメガネをかけたロリ顔っぽい巨乳の先生があけてくれた」

あの先生か。名前は知らん。

「そんなことよりさ、どう？ 似合ってる？」

そういつてひらりとその場で回る。

どうやら裸エプロンではなく、水着エプロンだったようだ。

そんなことはどうでもいい。

くるりと回って再び向かい合った瞬間に俺の右手が奔る。

シャルの顔面をつかみ握りつぶすように力を入れる。

「久しぶりに会ったと思ったら人の部屋で何してくれとんじゃ!？」

「いだいだだ」

「おかげで俺の命が消しとばされるとこだったやろが！」

「今にも私の意識が飛びそういだだ、ていうかなんでエセ関西弁!？」

「これは少しOHANASHIする必要があるのお」

「ぎにゃあああーーーーー」

10分後、俺は小さくなっていた。もちろん物理的な意味ではないが……

理由は俺の部屋で制服に着替え側頭部をさするシャルとダークサイドから戻ってきた千冬先生がにらみ合っているからだ。

俺がそれぞれの紹介をしはじめたときからこんな感じだ。

それぞれの背後にトラと龍のスタンドが見える。

俺に出来るのは部屋の隅で小さくこの成り行きを見守ることだけだった。

いきなり二人が同時に俺のほうを向いた。

そしてため息。

え？ 何それ？ 俺何かした？

いきなりのことに俺が自問自答していると二人はなぜか力強く握手をしていた。

「お互いに苦勞する」とか「負けません」とかいいあっている。

まあよくわからんが和解したようだ。

そのあとは勝手に部屋に入った罰として部屋の片づけをシャルにも手伝わせ、千冬作カレーライスもシャルも入れた3人で食べて解散という流れだった。

シャルが目ざとく俺のロマン本を見つけ出し、織斑先生に没収されるという出来事もあったが……

俺は奪還を試みたが失敗。

千冬先生いわく「学園の敷地内にこのようなものを持ち込むんだぞうだ。

そのあとも真っ赤になりながら小声で何か言っていたが小さすぎて聞こえなかった。

俺のお宝達が……

紙袋に入れられた俺のお宝を持って千冬先生が部屋を出て行くところとする。

シャルは千冬先生が送っていくそうだ。学園の敷地内で何かあるとは思えないが、1年の寮長でもあるので一応とのことだ。

出て行こうとして開いていた扉に手をかけたところで何かを思い出したように振り返った。

手首を見せ

「料理をしたときに時計を外したままのようだ。すまないデュノア、すぐにとつてくるから待っていてくれ」

そういつて扉を閉めて部屋の中に戻って行く。

別にかけておいてもよかったのに……

「そうだ。最後に聞いておこうと思ったことがあった」

「またですか、なんですか？」

いつもこのパターンだ。

「アル先生はデュノアのことをどう思っている？」

「シャルですか？ そうですね。妹みたいなもんでしょうか？」

「じゃあ今日、デュノアがバニースーツやら裸にエプロンやらはどう解釈している？」

見られてたか。エプロンときは隠していたんだが……

「うーん、そうですね。単純に驚かせようとしたんじゃないかもしれません？」

「……………あれがお前に対する好意や女性として見てもらいたいという感情の表れとは考えないのか？」

「まさか。シャルは家族みたいなもんですよ。家族に異性としての感情を抱くわけじゃないですか」

そう、そんな感情抱くわけがないのだ。

「そうか、わかった。邪魔をしたな」

「いえいえ、こちらこそごちそうさまでした」

「明日から一夏の事を頼んだ。ではな」

「すまないな。待たせてしまった」

「いえそんなには」

扉を閉めデュノアを連れ1年寮へと向かう。

「織斑先生。その本、後で見せていただけませんか」

そういつて指差すのは紙袋の中にあるアルの部屋から没収した裸の女性が写っている本。

「馬鹿者。これは18歳未満厳禁だ」

「先生は後で見るんでしょう？」

「私はもう20代だ、見ても何ら問題はない」

「ズルいですよ、先生。一人だけ情報収集だなんて……」

あの部屋で初めてデュノアと対面した時に奇妙なシンパシーを感じた。

「アルが気付いてくれなくて苦労しているんだな」と……

気がつけば固く握手を交わしていた。お互い頑張ろうと。

だが私も、どうやらデュノアも負ける気はない。

お互いにアルを奪い合う好敵手として認められた瞬間だった。

「安心しろ。見せることはできないが、どんなものだったかはいずれ教えてやる」

「本当ですか！ 約束ですよ！」

好敵手であるなら条件はフェアに行きたい。
だから私が知った簡単なアルの趣味嗜好ぐらいは教えてやるぞ。
本当に重要なのは秘密だがな。

だがこれは教えておこう。

おそらくお互いの最終関門になることを……

「デュノア」

「はい」

「今日のお前のコスプレだがな、あいつはただ驚かせようとしていただけだと考えているそうだ」

「……………本気ですか？」

「ああ、最後に聞いてきた。あれだけされて平然としていたあいつがあまりにも奇妙に思えてな。そして好意を抱かれているんじゃないのかとも聞いた」

「ツ先生！」

好意を勝手にばらせば怒りを向けられても仕方がないな。

「すまん。だがどうしても気になった。そうしたらあいつはこう言った。『家族に異性として好意を向ける奴はいない』とな」

「家族……………」

クネクネしだしたデュノアにきつけの一撃を入れる。

「頬を染めて妄想に浸っていると悪いが妹扱いだったぞ」

「妹……………」

またクネクネしだした。まさかこいつ兄妹で禁断の…………とか考えているんだろうか？

アルよ。ここに家族でも異性の好意を向けそうなやつがいるぞ。

これでは話が進まないので再び一撃を入れる。

「とにかく兄妹のようなデュノアから自分に好意を向けられることはないと考えているようだった」

「そうですか……」

目に見えて落ち込んでしまった。

「だが、私も似た経験をしている」

「織斑先生もメイド服を着たんですか！？ 織斑先生ならヴィクトリアンメイドタイプのほうが「馬鹿を言うな、好意を示したということだ」……そうですか」

ふむコスプレか。普段と違うところを見せればもつと私のことを見てくれるだろうか？

いや今はそんなことはどうでもいい。

「その日は焦っていたようだが次に会ったときにはかなり普通だったし、今では普段通りだ。好意を向けられた相手とは思っていないのかもしれない」

あの日、もしキスの話題を振られたら好きになってしまったと言おうと思っていた。だが何も言われず、私も恥ずかしさから言い出すことができなかった。

「これは推測になるが、あいつは好意に気が付いていないのではなく、相手から好意を向けられない理由を無理矢理でも探しているのではないだろうか？」

どう考えても今日のデュノアの行為は家族に対して行うものではない。だがあいつはそれを理由に好意ではないと切って捨てた。普段の理性的にもものを考えるあいつらしくない。

「もしそうなら言い逃れのできないくらい強烈にアピールするべきだな。たとえば押し倒すとかな」

「おおお、おしたおすって」

「ただ学生中はするな。私もあいつも教師だ。さすがに淫行は見逃せん」

「わ、わかりました」

顔を赤くしているデュノアを部屋の前まで連れて行き、私は寮監室へと向かった。

どうしてあいつがそんなことをするのか、私なりの仮説をたてたがそれは教えなかった。

口に出してしまえばそれが当たってしまいそうで怖かった。当たってほしくなかった。

アルフォンス・アランが他人に好意を抱くこと、好意を抱かれることを恐れているなどあつてほしくなかった。

だから私は邪推だ、と切り捨てた。

第7話 邂逅（後書き）

感想で鈍感設定に違和感というものがあつたためもう少し後で出す予定だった千冬さんの考えを入れてみました。

うちのシャルはちょっとオタクが入ってます。

ちなみにフレンチメイドっていうのミニスカなどちょっとエロいものをさすらしい

オタクが言うメイドはこっちでジャパニーズメイドともいうらしい。

さすがに一夏君は女子寮に入れられませんでした。

職員寮もどうなの？って思われるかもしれないが許してください。

次は一夏とシャルの出会いを予定。

第8話 入学（前書き）

遅くなって申し訳ないです。

土日のどっちかには投稿するって言ったのに……

日曜26時ということまで許してください。

視点移動が2度あったため今回 `side` という方式をとりました。

もっとうまく書ければ……

では第8話どうぞ。

第8話 入学

Side 一夏

右を見ても女子、左を見ても女子……

わかつてはいたさ。このIS学園の特色は……

わかつていても同性がいないのはキツイ。

さつき幼馴染の篠ノ之箒を見つけたが、目があったと同時にそらされてしまった。

薄情者め……

Q どうして俺はこんなところにいるんだろう？

そんな哲学的とも取れるとこの答えは簡単だ。

A 本来男が動かせないはずのISを動かしてしまったから

高校入試当日、俺は受験会場となる建物に着いたけどその中で迷子になってしまい、受験室を探していたら別な部屋に入ってしまった。男性が動かせないはずのISを動かしてしまった。

藍越学園とIS学園って似てるよな……

なんでこんな紛らわしい名前の学校が同じ建物内で入試をするんだよ！

それからあれよあれよという間に世界唯一の男性操縦者の保護という名目でこのIS学園に入学が決まった。

日本政府からのお達しで俺の意思なんて関係がなかった。

千冬姉を楽にしてあげたいから高卒で就職率がいいうえ、地域密着型の藍越学園にいきたくったんだけどな。

IS学園も就職率は悪くないけど家からいける企業ってないしな

あ……

千冬姉といえ最近様子がおかしい。

この前から電話で料理の作り方を聞いてくるようになった。

家事を俺任せでほとんど何もできないあの千冬姉が……

できないのは早くから稼ぎに出ていたからだから仕方ないけど、
どういう心境の変化なんだ？

前に帰ってきたときに俺によくわからない注射（何を注射したか
聞いたけどまだ知る必要がないと突っぱねられた）をしたりとよく
わからない行動もしてるし大丈夫だろうか？

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

いきなり呼ばれて現実逃避の思考埋没から意識が戻ってくる。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる
？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自
己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だか
らね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してもらえるかな？ だ、だめか
な？」

おもわず「ちっちえなあ」とか言いたくなる。

背も小さければ態度も小さすぎる。本当にこの人教師なんだろう
か？

いや自己紹介はするけどな。

この1年のスタートだ、びしっつと決めよう。

最前列なので立ち上がり後ろを振り向くと注目が集まっているの
を自覚する。

動物園の目玉にでもなった気分だ。

これを毎日されてるとしたら俺は動物園の動物を尊敬するね。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

簡潔にわかりやすくしたつもりだったが『他には？』とか『それだけじゃないよね』的な視線に少したじろぎながらも息を吸い

「以上です」

締めくくった。

何人かずつこけたがそんなに期待されても困る。

そう考えた刹那

パアンと頭を何かではたかれた。

この感じ、まさか……

振り向くとそこには

「げえ、千冬………ね……え？」

再び頭に衝撃走る……

「なぜ疑問形だ。自分の姉の顔すら忘れたか？ 馬鹿者。それに織

斑先生と呼べ」

い、いや、顔は覚えていたんだが、なんというか雰囲気違ったからとまどったというかなんというか……

前回会ったときは注射だけしてさっさと出て行ってしまったから気付かなかったが、そのオオカミのような眼差しが僅かに柔らかくなっている気がする。

いやまて、職業不詳の千冬姉がなんでここにいる？

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものは出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳まで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

この辺りは千冬姉だ。間違いない。

この発言に対し、多くの生徒から黄色い声援が響いた。大きく分けて「憧れてました」とかの尊敬派と「御姉様」とかの一步超えちゃってる派があるみたいだ。

そんな騒がしい生徒たちを仕方ないなあとはほえましいものを見るような眼で見る。

「……毎年予期これだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられるな」
おかしい……

俺の知っている千冬姉だったら同じセリフをうっとおしげな眼で放つはずだ。

左を見ると筭も目をぱちくりさせている。
まさか偽物か！

パン！

三度目の衝撃。二度目の正直で防ぐことはかなわなかった。

「いきなり何を……」
「馬鹿なことを考えただろう」

この勘の良さは千冬姉だ。

一体千冬姉に何が起きているというんだ！？

Side シャルロット

あれが織斑一夏君か。なんというか天然入ってる？

あつ、ポニーテールの子が連れて行った。

たしかあの子は篠ノ之箒さん。篠ノ之東博士の妹さんだよ。

フランスから今年の入学生で注目すべき人の名前を教えてください。

唯一の男性操縦者・織斑一夏、開発者の妹・篠ノ之箒、あと代表候補生2名。

一夏君と箒さんは幼馴染という話も聞いている。

連れ出したのは旧交を暖めるのにこの教室じゃ騒がしすぎるからかな。

教室よりも廊下のほうが他のクラスの人とかも来るから話しにくいと思うけどな……

私は近くの子とでもお話ししよう。

織斑先生の登場で自己紹介も途中で終わっちゃったし、近くの子だけでも自己紹介しておかなきゃね。

チャイムが鳴って一夏君たちが教室に戻ってきた。

席についてなかったせいでまた織斑先生に頭をはたかれていたけどね……

2時間目は基礎のおさらいだ。

ここにいる人なら入試で出た内容だし、必読の書類にも書かれていた内容だから問題はない。

問題はないはずなんですけど

「ほとんど全部わかりません」

織斑くんそれはないよ……

いろいろ言いたいことがあるから後で話しかけよう。

2時間目の講義が終わると同時、織斑くんは声をかけようと席を離れる。しかし先に話しかけた生徒がいた。

セシリア・オルコット

イギリスの代表候補生。代表候補生の中でも最も高いBT適正のために専用機『ブルー・ティアーズ』を与えられたイギリスの貴族。その他にも分かっていることはあるけど割愛。

さてどんな話題を振るのやら……

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「しかたないんじゃないかなあ」
思わず声に出してしまった。

Side 一夏

「しかたないんじゃないかなあ」

ぼそりと聞こえた声に視線を向ける。

そこにいたのはきれいとかわいいの中間といえる容姿の少女だった。

「あなた誰ですの？」

俺も疑問に思ったことをセシリアが代わりに聞いてくれた。

「その質問はさっきの君の質問の答えだよ」

「どういうことですか？」

「私はシャルロット・デュノア。フランスの代表候補生だよ。私のことを知らないんだったら、代表候補生だからって知らなくても仕方ないよね」

「あなたがあの……」

周りにいる人たちも少しざわめいている。どこの人たちかはわからないけど欧米系の顔だと思う。

「『どの』かは知らないけどね。それにIS学園には入学式がないから、首席代表で何かをするってこともなかったし、調べない限りでは首席ってわからないよ?」

おお、完璧に論破してくれた。ありがたい。だけど気になることがある。

「えーと、シャルロットさん?」

「何かな?」

「代表候補生ってなんだ?」

がくりとシャルロットさんとセシリアさんの膝が折れずっこけそうになる。

「代表候補生っていうのは字のごとく、国家代表の候補生だよ。ほら、モンド・グロツソとかに出てるのは国家代表でしょ? その一歩手前の人たちだと思えばいいよ」

なるほど、灯台もと暗しだな。

「このクラスに二人もいるってことは結構な人数いるのか?」

「いや、そんなことはないよ。今年は私たちともう一人だけ聞いてるしね。本来かたまっているのがおかしいんだよ」

「そうか。次期国家代表ってことはエリートなんだな」

「そう! エリートなのですわ!」

やっと復活したのか、セシリアさん。

「ですが、フランスの国家代表も大したことないのですわね」

なんでそんなことが言えるんだ? ここには代表候補のシャルロットさんしかいないのに?

「あなたの名前は聞き及んでおりますわ。ISを起動して僅か2年で国家代表を倒した代表候補生として。ですが今年の入学試験の起動テストにおいて試験官を倒したのはわたくしだけときております。つまりあなたは試験管を倒しておられないということですね。試験管を倒せなかったあなたが倒したわたくしにかなう道理はありません。となれば国家代表自体大したことがなかったということでは

「よう？」

シャルロットさんってすごかったんだな。さっきざわついていたのは、シャルロットさんがヨーロッパのIS操縦者の中で結構有名だからか。

さっきの発言からセシリアさんの頭の中での強さランキングはこうなっているんだろう。

セシリアさん>試験官>シャルロットさん>フランス国家代表

ん？ だけどこれって……

「なあ」

「なんですの？」

「入試ってあれか？ IS乗って戦うやつ」

「そうですか？」

「俺も倒したぞ、試験官」

「は……？」

俺の場合は倒したっていうか倒れたって感じの自滅だったけどな。

「わ、わたくしだけと聞いておりましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「それに私は起動試験自体受けてないしね」

「「えっ？」」

あれ入試だから全員受けるものじゃないのか？

「さっき話に出た国家代表との模擬戦がね入試の日とかぶっちゃったんだ。元々は問題なかったけど日程がずれ込んでね」

それ俺のせいじゃないか？ あの後には予定されていた試験とか中断になったらしいし。

「IS学園に確認したらその模擬戦の映像を送れば入試の日程を変えてくれるって言ってたんだけどこれだけ乗れれば問題ないだろうって判断されて起動試験はパスになったんだ」

つまりシャルロットさんもかなりレベルが高いってことか。

一瞬でも疑って申し訳ない。

キンコーン

「あ、チャイムだ。織斑くんまたあとで話したいことがあるから
そう言っただけ自分の席に戻って行くシャルロットさん。
セシリアさんも渋々戻っていく。」

教壇に千冬姉が立って授業が開始される。

「授業を始める前再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

代表者って何ぞや？

「代表者は行っただけ見ればクラス長だ。生徒会の会議などにも出る。
そしてクラス対抗戦は実力の推移などの指標にもなるな。そのため
代表者は通年だからそのつもりで」

ほうほう、なるほど。任命されるほうは大変だ。

「自薦他薦は問わない。誰かいるか」

「はい！ 織斑くんを推薦します」

頑張ってくれ。織斑さん、応援してるぞ。

「私も織斑くんがいいと思いまーす」
人気だな織斑さん。

「ふむ、織斑一夏以外に誰かいるか。いなければ決定だが？」

「そうかがんばってくれ。織斑一夏さん っで俺じゃないか！」

「ちよつと待ってってくれ。辞退したい！」

「推薦されたものに拒否権などない」

くっ、にべもなく切り捨てられてしまった。

「納得がいきませんわ！」

そこで立ちあがったのはセシリアさんだった。

おお、さつきはあんまり印象良くなかったけどここで助けてくれるなら好感度があがっちゃうぜ。

ただセシリアさんは熱くなりすぎる性格のようで、初めこそ自分のこそが代表にふさわしいと熱弁していたが次第に俺や日本の侮辱になっていった。

そこで俺もついイギリスの食事をけなしてしまった。

そこから俺とセシリアさんで決闘することになってしまった。

男と女が全力で決闘するわけにもいかないのでハンデを提案したその提案に周りから爆笑が起こった。

男が強かったのはもう10年以上前の話だと

笑っていなかったのは幼馴染の筈ともう一人だけだった。

俺が提案を引き下げると、むしろ付けてやろうかとセシリアさんが提案してきた。

その発言にカチンと来た俺は断ろうと口を開き

「両者が使用する機体を学園の訓練機である打鉄、ラファール・リヴァイブに制限する。これがこの決闘を成り立たせる最低条件だね」

笑わなかったもう一人、シャルロット・デュノアの発言に断る夕イミングを失った。

「シャルロットさん、どういっつもりですか？」

「これがフェアになる条件だと思うんだけどね。専用機で汎用機を無抵抗のキツネのごとく蹴りたいって言うのなら話は変わるけど？」

「あなたまでわが祖国を侮辱しますの！」
「私はかなりの日本びいきなんだよ。それをああも侮辱されれば腹も立つよ」

シャルロットさんって日本びいきなんだ。

それよりも専用機とか汎用機って何だ？

質問したいけど、しづらいな……

「あなたも実力に自信があれば自薦なさってはいかがですか？ 代表

候補生なのでしょう?」

「そう言われているがどうするデユノア?」

「織斑先生。私は二つの理由から代表をお受けしたくありません」

「ほう? いったみる」

「まず一点目、クラス代表が実力推移の指標ならばすでにある程度身につけていたり専用機を持っている私たち候補生よりも一般の生徒から選ぶべきだと判断します」

「ふむ、もう一つは?」

「つい先日私は代表候補生筆頭となりました。国家代表に何かあった際にはフランスに戻らなくてはならないのでクラス代表に穴をあけてしまう可能性もあり、なるべきではないでしょう」

筆頭ってことは一番上なのか。代表を倒しているんだもんな、当然か。

「なるほどな。一つ目だけならば以前になつた例もあるため却下していたが、二つ目の事情を考えると仕方がないな」

シャルロットさんはセシリアさんに向き直る。

「それでどうするの? セシリアさんは専用機? 訓練機?」

「そこまで言われて専用機を使うわけにも参りませんわ。訓練機を使用します」

「よし、話はまとまったな。勝負は来週の月曜に行く。各自訓練機の貸し出し手続きを済ませておくように」

「わかりましたわ」

「わかった」

「『わかりました』だ。馬鹿者」

今日何度目かわからない一撃をくらいそれまで考えていたことが吹き飛んでしまった。

とにかくまじめに授業を聞くことと思う。

放課後俺は挫折していた。
難しすぎる。

専門用語ばかりで授業についていけない。
これかなりまじめに勉強しないとまずいな。

「織斑くん、ちょっといいかな？」

声をかけてきたのはシャルロットさんだった。

「織斑くんの同室になる人から君のことを連れてくるように言われているんだよね」

俺一週間ぐらい自宅から通学する予定じゃなかったっけ？

それに何でシャルロットさんが俺を呼びに来るんだ？

「それはね、その人が私の幼馴染だからだよ」
心を読まれた！

「顔に出てるよ」

そんなにわかりやすいのか、俺の顔。

「あと予定より早く入ることになった理由は本人から話すって」

「じゃあいつたん会った後、俺の家まで物を取りに行くって形になるのか」

「その必要はない。生活必需品は送っておいた。服と携帯の充電器でもあれば十分だろう。足りなければ借りればいい」

そう言っただけ現れたのは千冬姉だった。

生活の潤いとかはどうなんだろう……

二人に連れられ、たどり着いたのは「教員用整備室」と銘打たれた部屋だった。

プシュッと空気圧が変化した音とともに扉が開く。

「アル、織斑くんを連れてきたよ！」

「学園内ではアラン先生と呼べ」

そう言っつて奥から現れたのは作業着を着た男だった。

「男!?!」

このIS学園内で男性と会うとは思っつてなかつた。

俺の驚きの声に千冬姉があきれた目で俺を見る。

「織斑、まさか女子と同棲するなんて思っつてたんじゃないだろうな?」

この学園ならあり得るかとも思っつていた。

「仕方がないですよ千冬先生。ここに男なんて俺と轡木さんしかいないじゃないですか」

「確かにそうだな」

ふふふと千冬姉が柔らかく笑つた。

それを見て直観的に悟つた。

千冬姉が最近おかしかつた理由はこのひとだ。

千冬姉に春が来るとは…… 冬なのに春とはこれいかに……

これは弟として祝福しなければならぬ。

とにかく挨拶からしつかりしなければ。

「姉をよろしく願ひします、お義兄さ「お前は何を言っつているんだ!」ゴフツ」

みぞおちに一撃をくらつた後、出席簿で滅多打ちにされる。

千冬姉が恥ずかしがつてている!?

痛みと驚きで声が出せない。

「やだなあ、織斑くんは。何を血迷っつているのかな?」

シャルロットさんがイイ笑顔でレバーブローを打つてくる。メチヤクチャ怖いし、痛い。

「えつと、どうしてこんなことになっつているのかは分からないが、とにかく自己紹介をしようか」

わからないなんてなんて鈍感な人なんだ。

お前が言つなという声が聞こえたが気のせいだろう。

「この学園で整備科副主任をしているアルフォンス・アランだ。ちなみに今年やっと日本で酒が飲める年齢だ。フランスじゃ16からだというのにね」

「ってことは二十歳？ この年齢で副主任！？ 若すぎるだろう！

「よろしくね」

そう言つて右手を出してくる。

俺はその右手を握り返した。

これが篠ノ之束を超えたと言われ、世界を守りその犠牲になった男、アルフォンス・アランとの出会いだった。

第8話 入学（後書き）

一夏に注射したのは体質改善用ナノマシンです。

千冬さんが一夏の毛髪をアルへ譲渡。

それをもとにフェロモンを分解するナノマシンを作成。

千冬さん一夏に注射。

ちなみに作成依頼時の会話は

お互いがわかっていながらもぼかして会話するというのをやりたかった。

でも書きたかったけど書けなかった。

注射器もハイポガンにしたかったけどできなかった。

そっぴや一夏って基本名字で相手のこと呼ぶのにヒロインズはいき

なり名前呼び（幼馴染組は別として）ですね。

なんでだろう？

この女はヒロインになるってわかってるんだろうか？

今回は「シャル一夏を鍛える」をお送りしたいと考えてます

10/24 一夏の他人の呼び方を変更

第9話 デュノア先生のイケナイ？個人授業（前書き）

大変お待たせして申し訳ありませんでした。

ようやく学会も終り、就職も内定が取れました。

これで毎週更新に戻れると思います

私の書くペースがきちんとできればですが……

第9話 デュノア先生のイケナイ？個人授業

「ふざけんなあああああああ！！」

思わず椅子を蹴倒しながら立ちあがってしまった。

今は整備科教員の授業前会議中。

普段であればその日のそれぞれの授業を含めたスケジュールの確認と連絡事項くらいで終わるのだが今日の突然の議題はそうさせてくれなかった。

その議題は「織斑一夏の専用機」について

専用機が与えられること自体はわからなくもない。

織斑一夏の専用機のフラグメントマップなどから「どうして彼だけが男性の中で唯一ISを動かせるのか」などを研究する意味のほかに、自衛の手段という側面もある。

問題なのはその専用機自体だった。

IS学園生徒の専用機は安全性確保のためスペック表が提出されるのが通例である。

元々ISには情報の公開義務があり、その延長線上で基本スペックと武装を申告するだけでよいのだが、提出されたスペック表には以下のように記載されていた。

機体名称 「白式」

開発者 「倉持技研」

重量

不明

航行速度

不明

出力 腕部

不明

脚部 不明

(以下 不明が続く)

特記事項 倉持技研において開発の凍結、廃棄候補であった機体を篠ノ之束に譲渡。

その後、同人物により織斑一夏専用として開発、完成した旨が日本政府へと伝えられた。

この経緯より最終的なスペックが不明。

倉持技研開発時のスペックは追加資料に記載する。

また篠ノ之束が日本政府に通達した際の映像データも添付する。

これだけでもふざけた話だと思っていたが叫ぶほどではなかった。なぜわざわざ日本政府に連絡した時の映像が付けられているのかは、わからなかったが再生してみればその疑問も氷解した。

「はろー！ 世界一の大天才東さんです！ 今日はいっくんの専用機ができたからそれを使うようにっていう連絡だよ。もし私が開発した白式以外のISをいっくんが使うようなことがあったらどっかの国にハッキングかけてめちゃくちやにするからそのつもりでね（ハート） 来週には決闘するらしいからそれまでには届けるね！ んじゃ、ばいび〜」

そして冒頭に戻るのである。

「あの（ピー）め……」

俺の篠ノ之束に対する評価はぶっちゃけテロリストである。

白騎士事件しかり今回のことしかり……

自分の了見の中でしか生きていない人種であり、正直なところ大嫌いだ。

しかしこの声明のせいで一夏君に白式を使わせないということができなくなった。

これがIS学園に対してのサイバーテロだったら俺が防御プログラムを組んでリアルタイムで防御に徹すれば、いかに篠ノ之東であろうとも防ぎきることは可能だろう。

だが世界のどこかへのゲリラ的な攻撃をされる場合、それを防ぐことができず責任が持てない以上、あの（ピー）のいいなりになるしかない。

ちなみに言っておくがハッキング能力では俺はヤツに及ばない。俺の才能はあくまで「ものを作る」ことに限定されているため、プログラムの作成などなら負けることはないが、リアルタイムでの攻防ではどこかの鷹と蜂ぐらいの差がある。

「これは一夏君に謝らないといけないな……」

朝っぱらから最悪な気分だ……

「私にISの操作を教えてほしい？」

「ああ、シャルロットは代表候補生なんだろ？ コツみたいなものがあったら聞いておきたいんだ。んで筈にはISの基礎知識を教え

てほしい」

午前中、織斑くんに専用機が与えられるという話になって、それから決闘のルールが変更になった（って言っても専用機を使うことになっただけだ）。

そのあとは普通通りにIS関連の授業を受けて、昼休みになったから学食に誰か誘おうと思ったら織斑くんに誘われた。隣にいた篠ノ之さんがむっすり膨れていたのが印象的だった。

思わず握手して「大変だね」と同情していた。

現在学食。ここの学食のテーブルの置き方が変わってると思ったのは私だけじゃないはず……

ちなみに三人とも日替わり定食（塩サバ）

「セシリアさん並みに操作してるのシャルロットぐらいだからさ、頼むよ」

「うんいいよ。人に教えるって初めてだからそれだけは勘弁してね」

「教えてもらえるって言うだけでありがたいのにそれ以上のことは望まないさ」

一週間で教えられるとしたらセオリーとかかな？

「しかしシャルロット、いいのか？ お前には代表候補生筆頭の仕事などがあるのではないか？」

「予定は入っていないから、急に入らない限り大丈夫だよ。それに多分あっても装備の試験とそのレポートとかだろうし、教えるのと並行して出来なくもないから平気」

実際、筆頭になったといえやることはほとんど変わらない。ただ

国家代表に何かあったときに呼び戻されると言うだけだ。

「なら今日からいいか？ 思い立ったが吉日っていうし」

「いいけど、今日はきつと訓練機貸し出してくれないよね？ 一応申請だけしてみてもダメだったら私の実演を見るって形にしようか」

申請にはそれなりの時間がかかるはず。借りられたとしても明日からだね。

「見るだけで意味があるのか？」

「ISはイメージが重要な場面が意外と多いからね。イメージトレーニングは結構重要だよ」

飛行はその最たるものだし、各関節のアシスト機能もただ筋肉の動きからアシストさせるよりもどう動くかを考えてから動かしたほうが無駄が少ないとされていたはずだ。

「そういうものなんだ」

「そういえば織斑くんは運動は得意？ スポーツとか武術とかやってる？ 身体の動かし方がわかってる人っていうのはそれなりにISを動かせるって話もあるから少しだけ有利らしいよ。武術とかも呼吸とか感覚の面で補助になるしね」

多分これもイメージの問題なんだと思う。各部の動きをしつかりと認識しているかどうかの違いなんじゃないかな？

「あー、中学では帰宅部だったな。小学校のころは剣道やってたけど」「どういうことだ一夏！」「おわっ！ いきなりどうしたんだよ、
篤？」

「剣道を続けなかったのか！！」

「千冬姉が働いてたからな。自然と家事を俺がやることになる。そうなるとうとうしても時間が足りなくてなあ」

「時間というのはあるのではなく作るものだ」

「語気が弱くなつたのは織斑くんの苦勞を察したからかな。」

「戻す」

「は？」

「ここにいればお前は家事をする必要もない！ IS学園にいる間にお前を剣道をやっていたころの状態まで戻す。いやそれ以上に鍛えてやる！！」

なるほど。剣道は織斑くんと篠ノ之さんの絆みたいなものだったんだろう。

それを続けていなかったというのは篠ノ之さんにとって裏切りにも感じられたのだね。

だからさつきはあんなに激昂してたんだ。

「いや！ 俺はお前にISの基礎を教えてもらおうと……」

「そんなもの。シャルロットに教えてもらえ！ 私は誰が何と言おうと貴様を鍛えなおす！！」

「いやいやいや、そんな無茶苦茶な……」

そんな彼女の意見を織斑くんはあり得ないと言いたげだが私は違つた。

「ありかも」

「えええ！？」

「織斑くんてさ、ガソリン車がどうして動くか知ってる？」

突然の話題の転換に織斑くんが虚を突かれた表情をする。

「えっ？ それはエンジンでガソリンを燃やして……」
「エンジンの中でガソリンはどう燃えてるのか知ってる？ 燃えたのをどうやって前進させるために使ってるか知ってる？」

私は何を言わんとしているのかをわかったのだろう。
織斑くんの顔には納得の表情が浮かんでいる。

「つまりはそういうこと。細かな原理を知らなくても車の運転はできる。運転技術さえあればね」

私たちが扱うのはものだから知らないままっていうのはまずいけどね

「基礎を後回しにしてこの一週間で徹底的にセシリア戦に向けて特訓させてもいいかも。それに決闘が終わった後に基礎を教えたほうがわかりやすい部分があるかも知れない」

「なるほど。ではそうするか！ そういうことだ一夏！ 私と剣術、シャルロットとはISの訓練だ」

「ちよつとまで、俺は認めて」ではシャルロット、今日の予定だがどうする？「もういいです……」

織斑くん、とうとう話すら聞いてもらえなくなっちゃった……

「あはは、私のほうは申請したり準備がいるし今日は大したことをするつもりはないからそっちが終わってから30分もあればいいかな」

「ならば一夏、放課後はまず剣道場でお前の今の实力を見るからな！ 覚悟しておけ……」

「はい……ありがとうございます……ます……」

もうすでにいっぱいいっぱいになってる……
織斑くん強く生きて……

そんなこんなで放課後。

私はアルから人の少ないアリーナがどこかを聞いてそこで専用機の使用申請を提出しておいた。

校舎と寮から一番遠いこのアリーナは第6アリーナのように特徴があるわけでもないのあまり使われていないとのことだった。

アルにこのアリーナのことを聞いたときにあるお願いもしてきた。メールでここを使うってさっき送ったから後は織斑くんが来るのを待つだけだ。

軽くラピッドスイッチの訓練をしながら時間を潰していると織斑くんと篠ノ之さんがやってきた。

「おっ！ それがシャルロットの専用機なのか？」

「うん、名前は《ロンド・オアラジュー》。フランスの第3世代だよ」

「へえ。……だけどコレどっかで見たことある気がするんだよね」

「一夏もそう思ったか。私には入学試験の時、教員陣が付いていたISと同じに見えるのだが……」

「それは第2世代の《ラファール・リヴァイブ》だと思うよ。デュノア社が卸していたはずだしね。性能はこっちのほうが上だし、アンロック・ユニットもついてるから能力面では比べられないけどね」「アンロック・ユニット？」

「まあその辺はおいおい。訓練機はやっぱり借りられなかった？」

その辺の説明をしていると寮の門限に間に合わなくなるしね。そして彼は鞆のほかに何も持ってきていないしISを着けているわけでもない。そんなにすぐ借りられるとは思っていなかったが次の彼

の言葉は予想外だった。

「それなんだけどなんか貸し出しが制限されているらしくて、来週まで乗れる日がないみたいなんだ」

「それはまずいね……」

ちょっとこれは予想していなかった。ISは基本的に乗った時間がものを言う。最低でも明後日からは借りられると思ったから今日と明日で基本的な動きを見てもらって明後日から実際の動作、前日には対策を練ってそのシミュレートをしようと思っていたのに……さすがに《 Rond・オアラジュー》のパーソナルデータいじって乗ってもらうわけにはいかないし……

「ないものねだりしても仕方ないか……」

「訓練機は借りれなかったけどやれるだけのことはやりたいと思う。だから頼んだぜデユノア先生」

デユノア先生

その言葉はとても心地よく響いた。もし将来IS学園で教鞭をとればアルと同じ職場!!

教員同士の職場結婚なんていうのもいいなあ……

つといけないいけない、そんなこと考えている場合じゃなかった。

「じゃあ個人レッスンを始める前に二人に聞いておきたいことがあるんだ」

二人がなんだろうと首をかしげる。

「ISって何だと思う?」

その問いに答えたのは篠ノ之さんだった。

「宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。いまではスポーツなどにも利用されているが結局のところはパワードスーツだ」

教科書通りの答えと違っていいだろう。テストであれば点数が貰える答えだ。

織斑くんもうなずいている。今日の授業でも言っていたし同じ答えみたいだ。

だけど

「私の答えは違うんだ」

ISにある程度以上乗ったことのある人はきっとそうは思わない。特に代表候補生や国家代表は。

「ISはさ　　こついうものなんだよ！！！！！！」

言つと同時に私は両手にアサルトライフルを出現させると二人へ突きつける。

「なっ」

「なにをする！　シャルロット！」

織斑くんは驚いて硬直するだけなのに対し、篠ノ之さんは一瞬銃口から体をずらそうとしたがして無駄だと悟ったのか抵抗をやめた。

「今二人に向けているのは、多くのISが搭載しているアサルトライフルだよ。もし本当にマルチフォーム・スーツだったらこんなも

のはいらない。スポーツでも殺傷力なんてものは必要なはずがないんだ。元々は宇宙用に開発されたスーツだったかもしれない。けど今では違うんだ。多くの国で軍事力の要として、兵器として進化を続けているものなんだ」

「篠ノ之さんにはつらいことかもしれないけどね」と付け足す。実の姉が開発したものが兵器であるなんて言われたらショックだろう。

IS学園の生徒を見ていて思ったのは意識の低さだった。へらへらと笑いながら専用機がほしいなんて言えるものじゃない。

私もあの日までそれがわかっていなかった。わかったつもりできちんと理解していなかったと言ったほうが正しいかもしれない。自分を殺す武装を向けられたあの日までISは安全だと慢心していた。

「私たちが扱おうとしているのはそういうものなんだ。その参考書を電話帳と間違えて捨てました？ ふざけるな！！！」

びくりと織斑くんの背筋が震えた。

私は量子化してアサルトライフルをしまっ。

二人がほっと息をつく。

「いきなりライフルを向けてゴメンね。私が操作の前に教えておきたかったのはそういうこと。自分が扱うもの大きさを知っておいてほしかったんだ」

「いや、教えてもらってよかった」

「ああ。戈を止めると書いて武。よく言われることだが実際に戈を向けられて初めてその恐ろしさがわかった」

「先生役いきなりこんなスパルタで行くような私でいいかな？」

「俺はむしろそんなシャルロットにこそお願いしたい。学校で習っ

「ことよりも大事なことを教えてくれそうだ」

「だがさっきのは大丈夫なのか？ ISも付けていない相手に銃を突き付けたなんて話はまずいだろう」

篠ノ之さんが心配そうに気遣ってくれたがそれについては心配無用だ。

「それは大丈夫だよ。今このアリーナの監視カメラにはダミー画像とダミー音声が出ててここであったことはわからないようになってるから」

篠ノ之さんがどうやってそんなことをしているか聞いてきたけど「禁則事項です」で押し通した。

さすがに銃を生身の人間に向けている場面が管制室とかに流れたら問題になるからアルに頼んでちよつとだけいじってもらった。きっとアルは問題が起こったときのためにここの画像を見ているんだと思う。

ゴメンねアル。今度なにかお礼しに行くから！

「じゃあ改めて始めようか」

そう言っつて私は飛び上がる。

デュノア先生の個人授業の始まりです！！

一週間篠ノ之さんが剣道の勘を取り戻させ私とISの授業を続け

そして決闘の時を迎える。

NGシーン

「一夏君に謝りに行くか」

昨日決闘するっていう話になってたし早く伝えたほうがいいと思いきすぐに彼の教室に向かった。

そこから聞こえてきたのは千冬先生の声。

「そうだ。篠ノ乃はあいつの妹だ」

その声に爆音とも言えるような声が響き渡る。
俺は思わず劣化コアからあるものを展開し教室内へ踏み込み

「なに生徒の個人情報をばらしとるかあ！」

展開したハリセンで千冬先生をはたいていた。

「アル先生！？ いったい何を！？」

「正座」

「あのアル先生……」

「いいから正座！」

しぶしぶ正座した千冬先生に俺は個人情報についてのお説教を10分にわたりすることになった。

NG理由

正座をはじめいろいろと。

NGシーン2

「アラン先生はなんでここに来たんですか？」

ー夏君が質問をする。

俺はそれにこたえようとしたが一夏君の後ろの生徒が彼の背中をついているのが目に入った。

「ねえねえ織斑君あの先生のこと知ってるの」

「ああ、この先生の部屋で生活させてもらうことになったんだ」

「くくくくえええええええ」

「寮にいないと思ったら教員寮にいたなんて」

「さすがに会いには行けないかな」

「くっ！ なんとという試練を神は私たちに与えたもつた！」

「教員と生徒が一つ屋根の下k t k r！」

「夏は無理でも学園祭までに何とか仕上げないと！！！」

最後の二人ちょっと待ちなさい。

「アルが攻めだよね。私にも一冊」

シャル……ロット……

「アル先生が攻めだと……生徒の出すものの検査が必要だな。私にも一冊よこせ」

千冬……先生……

NG理由

シャルロットエ……

千冬先生エ……

第9話 デュノア先生のイケナイ？個人授業（後書き）

人に銃を向けちゃイケナイと思います（笑）

ちなみに一夏がシャルと箒に教えてもらうように頼んだのは

1 時間を拘束しすぎるのが申し訳なかったから

2 束の妹だしそこそこ基礎知識は持っているだろう

と考えたからです。

次回は決闘回になると思います。

第10話 決戦、第3アリーナ（前書き）

はっきり断言します

今回の話、批判が多かった場合改訂します。
期限は一週間で

一夏、どうしてこうなった

第10話 決戦、第3アリーナ

俺、千冬先生、一夏君、篠ノ之さん、シャルは第三アリーナのピットで一夏君の専用機が来るのを待っていた。

俺がここにいるのはこれから来る専用機のセッティングを行うためだ。

いくら整備料の副主任とはいえ、勝手に他国の最新鋭専用機をいじくりまわすことはできない。

搭乗者と開発元に許可を得られなければIS学園の整備士でもその内部に触れることは禁止されている。

国によっては専門の整備チームが派遣されることすらある。

倉持技研にどうするのか問い合わせたところ「整備チームの派遣はしないのでそっち側で適当にやってデータだけほしい」などおっしゃられたので俺がやることになった。

《打鉄》を見ればそれなりの技術力があるとこだがこんなことを言うような企業はそのうち潰れるだろうな。

一夏君にはすでに許可をもらっているんでこれで両者の許可をもらった形になる。

なるのだが……

「こない……」

決闘前には届けると言う話だったのにもう20分もない。

「あの（ピー）共め」

俺の中で倉持技研の株がストップ安と化していた。本当にあいつらはIS造っているという自覚があるのだろうか？そんなことを考ながら搬入口を眺め続けていたがそろそろ限界だ。

「織斑君、ついてきてくれ」

俺は立ち上がりピットから出て行くこととする。学校なので呼び方は織斑くんだ。

「えっ、どこに行くんです？」

「IS学園の搬入口だ」

この学園には搬入口が一つしかない。機密を扱う以上人員のチェックをする必要があり、あまり多くの出入り口を作っていないのだ。

「搬入口で積み荷のチェックをするときからフィッティングなどを開始すればここに搬入されるまでの時間を短縮できる」

限界とは俺が機体の整備をしながらフィッティングの手助けができる最短の時間だ。

それをもうすぐ切ってしまう。

幸いこのアリーナまでは一本道のためすれ違いになることもない。

「わかりました」

そう言って一夏君は俺についてきてくれた。うん、素直でいい子だ。

俺たちが走りながらIS学園の搬入口まで行くと、トラックが積み荷の検査をしていた。

そのサイズからして積み荷は一夏君の専用機だろう。

「織斑君あれだ。おい、そのトラック、コンテナの扉を閉めるのを待ってくれ！」

思いっきり不審者を見るような顔で見られたけど無視する。

俺は胸ポケットから身分証明書となる手帳を取り出して話しかけた。

「私はIS学園整備部副主任をしているアルフォンス・アランだ。こちらは見たことあると思うが織斑一夏君だ。この積み荷は彼の専用機で間違いないか？」

トラックのドライバーはわからないといった顔をしている。どうやら倉持の人間ではなくただの運転手のようだ。

「はい。積み荷を検査したところISでした。本日の搬入予定でISは織斑一夏の専用機だけです」

そう答えてくれたのは警備員の女性だった。

ちなみに彼女は琉球武術をやっているとかでその辺の男では相手にならないそうだ。

「ちょっと失礼するよ」

俺はコンテナに乗り込み白式にコードを接続する。

まず見るのはフィッシングに関するデータ、それに平行して危険な部分がないかを確認する。

結果フィッティングは問題ないようだ。

「織斑君、これに乗ってくれ」

「えっと、わかりました」

一夏君に乗り方を説明しながらパーソナルデータの入力を進めていく。

「あの一体なにをしているんですか？」

そつたずねてきたのは警備員さん。

答える時間すら惜しいがこれくらいは答えないといけないだろう。

「ああ、すまない。時間がおしているのでここからセッティングをしていくことになった。私たちを乗せたままでいいのでこのコンテナを運びこんでくれ。コンテナの扉は閉じていい。パソコンの画面の光だけで十分だからね」

そつ伝えながらも俺の視線は設定用が開かれた画面から動かしていかない。

「えっと」

ドライバーの青年はどうしたものかと迷っているようだ。

いきなり表れたかと思えば乗せて行けと言われればそうなるのも無理はないが時間がない。

「早くしないかー!!」

怒鳴りつけるようにして会話を終わらせ扉を閉めさせる。

トラックが動き出すのを振動で感じながらも進めるのはシールド
関連のパラメータの確認。

一夏君にいくつかの質問をしながら設定をいじっていく。

(時間が足りない)

さすがは篠ノ之束特製というべきか。

設定が非常に複雑だ。

普通の機体ならばすでにチェックは終わっている。

これは俺の読み違いだった。

あの篠ノ之束がそんなものを造ってくるはずがないというのに……

「織斑君」

「なんでしよう？ アラン先生？」

「予想以上に時間がかかっている。どうしても5分ほど足りない。
何とかして試合の開始時間を遅らせることはできないだろうか？」

「それは無理だと思います。アリーナも使用時間がありますし、何
よりセシリアさんが何を言い出すか……」

「そうか。ならば仕方がない。パラメータの設定などはできたから
後はシステムに任せればいい。とにかく最初の5分だけなんとして
も逃げ切ってくれ。そうすればファーストシフトに移行できる」

「それならちようどいい」

「ちようどいい？」

「ええ、今日の戦略プランの第一段階が逃げ回ることなんですよ」

一夏君の話ではまずは慣れるために徹底的に逃げ回りながらIS
の動かし方を確認するのだという。

コンテナの扉が開けられたのはそのあとすぐだった。

目の前にはアリーナのピット直通の搬入口。まだファーストシフ

トもしていないため待機状態にすることもできず、この搬入口から入っていくしかない。

トラックの運転手にねぎらいの言葉をかけ、一夏君と搬入口へと入っていく。

初めて入った搬入口の内部はベルトコンベアのようになっており立っているだけでピットまで連れて行ってくれるようだ。

しばらくするとベルトが停止した。そこには斜めにかみ合うタイプの防壁扉が開かれると先程部屋に残してきたシャルたちがいた。

「それで調子のほうはどうだ」

「一応安全性の確認は終わっているんでシールドと絶対防御は発動します。その他のパラメータも織斑くんに合わせていじったんで問題ないでしょう。ただフィッティングは終わったのですがパーソナライズが終わっていないのでファーストシフトまでもう少し時間が必要ですね」

「その程度なら仕方がないか。準備不足は否めんが死なないなら問題はなし」

「いや問題ありますよね」

千冬先生の過激な発言に思わずツツコンでしまった。

ほら、織斑くんと篠ノ之さんがヒいてますよ。

「この治療施設は世界的に見ても高水準だ。多少の怪我なら大丈夫だ」

「いや、そつは言いますがねっ」と

各部分の確認と手動で設定できる部分がやっと終わった。

白式からコードを抜いていく。

「織斑くん。俺が今できるのはここまでだ。後は君の力でどうにかするしかない」

「アラン先生。ありがとうございます」

「織斑くん。プランはあくまでプランだから臨機応変にね」

「シャルロットも、今日までいろいろ教えてくれてありがとうな」

「一夏、勝ってこい」

「筭。一週間俺につきっきりで剣道仕込みなおしてくれて感謝してる」

「がんばれと言わん。それは知っているからな。だから勝ってこい」

「ああ、千冬姉。行ってきます！」

みんなが一言ずつ声をかけて一夏君を見送る。

ゲートから一夏君が飛び出していったのを確認して俺は質問をする。

「織斑くんとセシリアさん。どっちが勝つと思う？」

その質問に答えたのは織斑先生とシャルだった。

「オルコットだろうな」

「セシリアさんだろうね」

二人から出た名前はセシリア・オルコット。

やはりそうか。

「なんだと、それではシャルロットが今日まで教えてきたのは無意味だとそういうのか」

その答えに篠ノ之さんが詰め寄った。

「そうはいつていないよ。この一週間で教えたことは今日負けても身になるからね。でも今日勝てるかとそれは別だよ」

「そうだな。篠ノ之、お前は代表候補生というものを甘く見ている。仮にもオルコットはイギリスのトップから数えたほうが早い位置にいるうえ、軍隊で訓練してもいるはずだ。ポツとでの織斑よりもさまたまな面の上にいるのは間違いない」

「そんな……」

シャルと千冬先生の断言に言葉をなくしうなだれてしまう篠ノ之さん。

「ただ織斑くんが勝てる可能性がないわけじゃない」

「えっ」

「ISの戦闘の勝敗を分ける要素、教えたよね」

「操縦者、機体、時の運……」

「そう、操縦者はセシリアさんのほうが上。だけどほかの要素でどれだけ巻き返せるかはまだ分からないよ」

「あら、逃げずに来ましたのね」

目の前にはセシリア・オルコットの乗る《ブルー・ティアーズ》

がある。

ティアーズモデルの特徴は自立機動兵器。ヨーロッパのイグニッションプランでシャルの乗る《ロンド・オアラジュー》とともに正式採用される、中距離での運用はかなり強力な機体だという話だ。

(《ロンド・オアラジュー》は近接兼防衛の要らしい)

彼女が手に持っているのは—《スターライトmk?》。こちらには向けられていないがいつでも射撃に移れる体制ではあり油断はできない。

「最後のチャンスをおあげますわ」

「チャンスって?」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

「そういうのはチャンスとは言わない」

「そう? 残念ですわ。それなら お別れですわね!」

独特の音がして俺の体を打ちぬかんとレーザーが奔る。

《スターライトmk?》の動きに注目していたから何とかよければだが次は怪しいな。

計画の第一段階を開始しよう。

「あれがお前たちの計画の初めか。有効的なのは認めるな」

ピットでそうシャルに語りかける千冬先生。

織斑くんの逃げ方はいたってシンプル。可能な限り地面から離れず背中をアリーナのシールドに向けそれぞれ1メートルぐらいをキープ。

あとは可能な限りそれを維持しぐるぐるアリーナを回るように攻撃をかわすというものだ。

「ハイパーセンサーは360度を見渡すことができるがそれをするのは人間だ。真下や真上、背中では反応が遅れがちになる。そのうち2方向からの攻撃を防ぎつつ上からの攻撃を警戒させることでハイパーセンサーの処理技術を身につけさせる。いまの織斑にできるオルコット対策としては上出来な部類だ」

壁際にいると不利なのではと考えられるかもしれないがISではあまり関係がない。あくまで壁際の不利とは前後の動きが封じられ行動範囲が横に絞られることだ。しかしISでは縦の動きが可能のためそのような不利は減る。

それに織斑くんの素質が意外といい。被弾しているがそこその割合でよけられている。

自立機動兵器の位置把握もきちんできていてかわすただけだがなんとかなっている。

そしてそろそろ

5分だ。

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

やっとか。とてつもなく長く感じられた5分が終わった。

確認ボタンを押すと膨大なデータが処理されていくのかわかる。

そしてISが光の粒子へとはじけ再び形成される。

その姿は今までの形状よりもなめらかなものであり中世の鎧を思わせた。

これが俺専用のIS—《白式》か！

「ま、まさか……ファーストシフト!? あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの!?!」

今はその言葉を無視する。そんなことよりこの機体を確認しなければならぬ。

まずはセシリアと同じ高さまで上がる。

思った通りの速度で動き、思った通りに止まる。

さっきまでは幾分か機体に振り回されていたイメージがあるから、すぐくしくりくる。

さらに武装のリストを開き確認する。搭載されている武装は一つしかなかったがこれ《・・》ほど信頼できるものはない。

「初期設定なんかじゃなかったさ」

「なんですって」

「アラン先生が僅かな時間だったけど整備してくれた」
わざわざコンテナまで向かって手助けしてくれた。

「シャルロットが戦い方を教えてくれた」

ISとは何かから、今日の戦略まで力を貸してくれた。

「箒が勘を取り戻させてくれた」

間合い、呼吸、そんな忘れかけていたものを戻してくれた。

「そして最高の姉の力がここにある」

取り出されるのは「《雪片型式》」。

かつてモンド・グロツソで千冬姉が総合優勝した時に振るった武装「《雪片》」。おそらくはその後継。

「これだけの人たちの力を借りて負けるわけにはいかない!」

「わかりました」

ぼつりと漏れたそれはハイパーセンサーなど使わなくても俺に届いた。

「あなたに譲れないものがあるのはわかりました」

でも、とセシリアは続けた。

その時はじめて彼女は俺を見た。

格下の男ではなく、無謀な挑戦者でもなく、世界でただ一人の珍しい男でもなく

「わたくしも負けるわけにはいきませんわ」

対等な相手として俺を認識した。

「あの馬鹿者、せつかくの勝つチャンスをドブに捨てたな」

「確かにそうですね。セシリアが油断していればそれだけ勝ちやすかったわけですけど……」

「なんだ、デユノア？ 言いたいことがあるのか？」

「織斑先生、うれしいんですよ。最高の姉とか言われて」

「なっ、なにを言う！？」

「ほつぺたゆるんですよ」

「なっ」

「そうやってほつぺたを押さえるのがいい証拠です」

「デユノア、覚えておくといい。私は身内のことでからかわれるのが嫌いだ」

「ひっはらないふえ、ほっへはひっはらないふえふふあふあひ（ひっぱらないで、ほっぺた引っ張らないでください）」

プランの第2段階は相手の性質をよく知ること。

さつきまでの攻撃でビットの数が4基まであることはわかった。

まだあるかもしれないので決めつけることはしないが背中の方は少なくとも4基しかないようだ。

そしてシャルロットからの助言を思い出す。

『ビットの操作？』

『三次元的に動作した上に、敵をとらえて射撃をするなんてプログラムそうそうできるものじゃないからね。セシリアが動かしているというのは間違いないと思うよ』

『それが今回の作戦にどう影響してくるんだ？』

『うん、多分だけどビットの操作はセシリア本人がしているから操作している間はあまり動けないか本人からの攻撃が少ないんじゃないかと思うんだ』

『よくわからないがそういうものなのか？』

『ビットの操作はかなりの集中力を使うはずだからね。少なくとも複雑な軌道はできないよ』

実際《スターライトmk?》を撃つ時はビットは動かないか、精度の低い援護射撃をしてきていた。

この推測は当たっているだろう。

次のビットの動作と同時にこちらから仕掛ける。

大丈夫だ。もし一《雪片弑型》が一《雪片》と同じ力を持っているなら一撃で倒すことも可能なはずだ。

格闘系のISの動きを録画映像を見ていたときにシャルロットに教えてもらったことが真実ならば……

『一《雪片》が特殊な能力を持っている武装？』

『そうだよ。一《雪片》はバリアを中和もしくは無効化する力を持つていたはずなんだ。多分ワンオフ・アビリティーだと思うんだけどね』

『ワンオフ・アビリティー？』

『ISの特殊能力だと思えばいいよ。とにかくそれが一《雪片》を媒介に発動していたんだと思うよ』

その時は雑談の一つでしかなかったが今となつては値千金の情報だ。

それに欠点も教えてもらった。

モンド・グロツソでは不正の無いように今のようにシールドエネルギーが数値化されているのだが、千冬姉が一《雪片》を使うと千冬姉側の《・・》シールドエネルギーが減つていたそうだ。

つまり一《雪片》は様々な面に使用されるマルチプルエネルギーではなく防御用のシールドエネルギーを攻撃に転化していたのではないかといわれているそうだ。

つまり超短期決戦型。

だがこれは朗報でもある。

俺とセシリアの地力にはかなり差があるだろう。

長期的な戦闘では間違いなく操作能力が上のセシリアが勝つ。

ただの特攻をしかけるような形でひっかきませば俺にも勝ち目が出てくる。

じっと相手が動き出すのを待つ。

そしてその時が訪れた。

背面に陣取っていたビットから熱量を感知したと同時にセシリアへと最高速で突っ込む。

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

大上段からの一撃をセシリアめがけて振り下ろす！

「あなたがカウンターを取りに来ることは予測していましたわ！」

《ブルー・ティアーズ》の腰部から延びるスカート状の装甲から射出されたミサイル型のビットが俺に向かってくる。

回避も間に合わず俺はそれに直撃した。

「《ブルー・ティアーズ》！！」

駄目押しとばかりにセシリアがハイパーセンサーを頼りに爆炎の中へとレーザーを放つ。

本来光が透過しにくい煙の中などではレーザーは効果が低いのだがそんなことは関係がなかった。

とにかく数で攻めきる。

ミサイルビットが戻り次第、第2波のミサイル攻撃も行う。

この強敵の負けが決定するまで攻め手を止めない。

それだけがセシリアの戦略だった。

しかしその戦略は次の一瞬で崩壊する。

ハイパーセンサーに映る織斑一夏的位置情報が自分に向かい急に加速してくる。

セシリアは余裕を持って「《スターライトmk?》を構え迎撃し

ようとした。

爆炎から抜けた織斑一夏に照準を合わせ発射する。

しかしそれを一夏は回避する。

一夏は再び大上段の構えだ。まだミサイルは使えない。仕方なしに腕部の装甲で防ごうとした時に脳内で警鐘が鳴った。

あれを装甲で防いではいられないと

セシリアはそれに従った。

理詰めを考え方をするセシリアらしからぬ考えであった。理由もなく勘に従うなど。

「《インターセプター》！！」

初心者用の名前を呼ぶという武装の呼び出し方も気にならなかった。

ただ勝ちたい。それだけのために

「勝者 セシリア・オルコット」

そのアナウンスが響いたのはインターセプターで雪片式型を受け止めた直後だった。

攻撃を与えたわけでもないのにそのアナウンスが放送されたことを不思議に思いながらもインターセプターを量子化する。

そしてBピットへと戻る。一瞬見えた織斑一夏の顔はきつと忘れないだろう。

部屋でシャワーを浴びながら考えるのは今日の試合のことだった。試合に勝った。それはいい。

だがどうしてもIFを考えてしまっ。

いろいろ言われたが要約すると

代表は実戦経験の宝庫だが、自分はイギリスでそれなりにこなしてるからいまさら実戦を増やす意味があまりない
というところらしい。

「わたくしに勝ちたいのであれば経験を積むことですわね」
この一言が決定的だった。

織斑一夏クラス代表に就任しました！

第10話 決戦、第3アリーナ（後書き）

多分まともにセシリアが一夏に勝った二次創作ってそうそうないんじゃないだろうか？

ぶっちゃけ原作の一夏ができすぎです。

まともに車に乗ったこともない人物がF1ドライバーに肉薄するなんてありえないかな、と……

戦略に関して突っ込みたいところがあるでしょうがご勘弁を……

少し修正しました

追記

感想で特に批判がなかったためにそのままにします。

第11話 日常と酢豚（前書き）

更新が遅れて申し訳ないです。

昨日が忙しかったもので……

多分来週も火曜日投稿になると思います。

そして今回は非常に短いです

3000字くらいしかない……

第11話 日常と酢豚

「最っつ低！ 女の子との約束をちゃんと覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツ！ 犬に噛まれて死ね！」

その日アリーナに乙女の怒りが炸裂した。

その日教員寮に帰ったのは21時を回ったころだった。

近々あるIS学会の発表用資料を作成していたらこんな時間になっってしまった。

IS専門の研究発表の学会はそれなりに開かれている。

ISは世に出てからまだ10年ほどしか経っていない。

しかも自己進化機能とブラックボックス部分のせいでわかっていないことが多い。

そんなわけで知識を共有しISの研究を進めようと言うのがこれらの学会の要旨だ。

ほとんどの参加者はIS関連企業専属の研究者たち。それに俺たちのような整備関連の人間や実際の操縦者が混じっていると聞いた感じだ。

研究者のほうは企業秘密の関係ですべての情報を発表してくれるわけではないが、予想外の視点からの発表もあるのでなかなか面白い。

去年、そんな発表を聴講するついでに俺の発表もしていた結果が今の副主任という立場である。

俺にものづくりの才能があると言ってもそれは万能じゃない。自分で考えつかなかった視点というものはどうしても出てくる。それを補完するために様々な論文を読むし、学会にも出るわけだ。その自分の視点だけでも黒騎士のような現代技術を超えたものを造れてしまうわけだが……

こんな風に学会の準備に時間が割けるのも整備科が平和である証拠だ。

なんでも普通教員のほうでは中国から代表候補生が転校してくるとかいう話でてんやわんやらしい。

2組への転入らしいが今日聞いた話ではクラス代表の座も奪い取ったらしい。

かなりアクティブな子のようだ。

だが整備科はきちんと書類が提出されているのでなんの問題もない。

整備もきちんと中国から整備班を定期的に送ってくるそうだ。

うん、倉持とはえらい違いだな。

「ただいま」

「あつ、アラン先生お帰りなさい」

椅子に腰かけていた一夏君から返事が返ってくる。

この寮は広い。

小さめのダイニングテーブルやそれぞれのベッドと机をおいても、各人のスペースを取れるぐらいの広さはある。

IS学園さままだ。

それにしてもこういったあいさつを返してくれる人がいるのっていいね。

「ちゃんと夕飯食べました？ おかずなら作り置きが冷蔵庫に入っ

てますけど」

「いや、多分今日もおかずが残っていると思ったからまだ食べていないんだ。頂くよ」

冷蔵庫に入れられていたのは酢豚と春雨のサラダだった。

じつはこれ千冬先生が作ったものである。

毎週2日ほど一夏君は千冬先生に連れ去られていく。

そして戻ってきたときには何らかのおかずをお土産のごとく持って帰ってくる。

初めは一夏君が作ったものなのかと思ったが、ある時一夏君が作ったものを食べる機会があった。それが持って帰ってくるものよりも上手にできていたので消去法的に千冬先生が作ったものということになる。

一夏君が拉致されるようになってから千冬先生が作ってくれるお弁当もおいしくなったしな。

ちなみにそれ以外の日は基本食堂で食べている。

夕食こそバラバラだが朝食は千冬先生がわざわざ誘いに来てくれるので、俺、千冬先生、一夏君の3人で教員寮の食堂を使っている。千冬先生が寮監室に止まりこんだときなどもわざわざ戻って誘いに来るのだが大変ではないのだろうか？

酢豚をレンジで温めながらジャージへと着替える。

冷凍庫からご飯を取り出して酢豚に続き温める。

茶碗にご飯を移し、頂きますと挨拶。

うん、うまい。

俺の食事を見ながら一夏君が何かを考え込んでいた。

「一夏君どうした？　　において腹が減ってきたか？」

「いえ、そういうわけでもないんですが」

一夏君は普段夕食を軽くしかとらない。酢豚において食欲が刺激されたのかと思ったが違ったようだ。

「なにか悩みごとでもあるのかい？」

「じつは……」

俺は食事をとりながら一夏君の話を聞いていた。

一夏君の話を要約するところなる。

1 さっきの中国から来たという代表候補生が一夏君の幼馴染だったらしい。

2 放課後のIS操作練習にその子のことを誘った。

3 よくわからんけどその子はすごい上機嫌、篠ノ之さんは不機嫌だった。

4 練習の後、昔の約束の話をしたらひっぱたかれた。ということらしい。

「え〜と、凰さんだったけ？ 彼女とどんな約束をしたのか聞いてもいいかな？」

怒った理由はどう考えても約束の内容にある。

きちんと覚えていなかったとかそういう話じゃないだろうか？

「酢豚をおごってくれてるって約束です」

だから酢豚を見ながら考え込んでいたのか。

しかしそれだけなら頬を叩かれるような話じゃないと思うんだが

……
普通に再会を約束しただけのような気がするが……

「箒からは馬に蹴られて死ねなんて言われるし、なんだったんだ」
「馬に蹴られて死ね？」

「ということとは恋愛沙汰か。言われてみれば年頃の女の子が他人を叩くなんて身体の成長のことか恋愛に関してぐらいかもしれないな。」

「一夏君、もう一度約束がどんなものだったか教えてくれ」
「ですから酢豚を」

「いや、覚えている範囲で一言一句丁寧に頼む」
「えっと、それなら『料理が上達したら、毎日酢豚をおごってあげる』だったと思いますけど」

「重要なところが抜けてるよ一夏君。料理が上達したらとか、毎日とかそこが重要だと思っただ俺は。」

「本当におごってあげるだった？ 毎日食べさせてあげるとかじゃなく？」

「あゝ、言われてみればそんな気もしますね」

「つまりは味噌汁をうんぬんって話なんだろう。」

「だけどそれは普通男が『味噌汁をつくってくれ』って言うもんじやないのか？」

「そもそも味噌汁を酢豚に変えてしまうのは無茶がないか？」

「俺の予想だけど食べさせてくれるとかそんなニュアンスだったんじゃないか？ 日本語ってニュアンス大事だし」

「ですけど、その程度で叩かれますかね？」

「そこは俺からは何とも言えない。自分で考えて答えを出すことだ」

その答えを言うのはさすがにためらわれた。

結局、一夏君の言う約束というのは中学生のちょっと背伸びした告白だったのだろう。

それを一夏君が字面のまま解釈してしまったのが原因だと……年頃の夢見る乙女にとってそれはかなり残酷な勘違いだっただろう。

鳳さんも無茶な改変をしたから完全に一夏君が悪いとは言えない気もするが……

「約束を勘違いしていて悪かったと謝れば許してくれるんじゃないか？」

「それで許してくれますかね」

「駄目だったら駄目だったときに考える。まずはやってみることだ」

翌日一夏君は朝一番で鳳さんに謝りにいった。

後で聞いた話だが途中までは許してくれていたそうだ。

一夏君の不用意な発言の直前までは……

よりにもよって

「食べさせてくれるとおごってくれてどう違うんだ？」

なんて本人に聞いてしまったらしい。

一夏君……

謝るときは謝る意志以外のことをあまりしゃべるべきではないのだよ……

その日張り出されたクラス対抗戦日程表

一回戦は1組対2組

絶賛喧嘩中の二人の激突だった。

第11話 日常と酢豚（後書き）

セカン党の方申し訳ない。

登場シーンをカットさせていただきました。

あの喧嘩を第三者視点で見たらこんな感じかなって。

アルと鈴をどう絡めるかと考えたら絡めにくいことがわかったので
こんな感じに……

シャルと絡めることも考えましたがなんとなくしっくりこなかった
のでこんな感じに。

ちなみにはじめのセリフは本来寮でのセリフですが一夏と同棲話が
なかった代わりに繰り上がって約束の話が出ました。

次回はクラス対抗戦です。

多分鈴音は次の話が終わったら第3巻相当までは出番が……

第12話 クラス対抗戦 前篇（前書き）

遅くなって申し訳ないです。

思った以上に難しかった。

そしてシャルを出そうと思ったたらこんなになってしまった。
ちよつと無理やりだったかも？

第12話 クラス対抗戦 前篇

装甲良し、推進パラメータ良し、各種エネルギー良し……
クラス対抗戦前最後のステータスチェック。
すべてのチェック項目に目を通してゆく。

「問題なさそうだね。よし！ 行ってらっしゃい！」
「はい！ 行ってきます」

白式が万全の状態であることを確認し、一夏君を見送る。
ピットに残されたのはクラス代表決定の際にピットにいたメンバ
ーとオルコットさんに山田先生だ。
俺はシャルに問う。

「今回はどんな戦略を立てたんだ？」
「今回はね、一夏君が自分で戦略を立てて私に確認に来たんだ。問
題ないプランだったから細かいアドバイスをいくつかしただけで特
に何もしてないよ」
「そうかじゃあ楽しみにしておくか。それと学校では敬語な」

前回と同じようにシャルが参謀役をしていると思ったのだが勘違
いだったようだ。

「えー」とブーイングをするシャルを無視して画面に視線を向け
る。

一夏君が自ら立案したという戦略、見せてもらおうじゃないか。

「シャルロット。正直今回も一夏は負けると思つか？」

篠ノ之さんが不安そうに尋ねた。

前回、内容はともかくシールドエネルギーをまったく削れなかったからな。結果的には惨敗とっていい。

今回の相手も代表候補生。厭が応にもあの時のことを思い出してしまふのだろう。

「織斑くんとセシリアが戦ったとき、私は織斑くんの勝率は0%だと思ってた。だけど今回は20%ぐらいはあるんじゃないかと思ってるよ」

「そうか！ 一夏にも勝ち目はあるのか！」

「うれしそうだけど20%だよ？ 同レベルのいちげきひっさつよりも確率が低いよ？」

「？ よくわからんが大丈夫だ。勝てる可能性があるのなら数字なんて目安に過ぎん。なにより」

少し恥ずかしそうに、だけど堂々と篠ノ之さんは言い放った

「 一夏はやるときはやる男だ」

さて一夏君。この信頼にこたえることはできるかな？

一夏君の前に浮遊しているのは2組の代表となった凰鈴音さん。

凰さんが操縦するのは中国の第三世代甲龍。

近接格闘系ISであり、その特殊兵器により射撃も可能という機体だ。

およそ5メートルの間合いから試合が開始された。

《雪片式型》と柄の両側に刃がついた異形の青龍刀一 《双天牙月》が激突した。

パワータイプの甲龍の一撃に対してスピード重視の白式がはじかれることが予想されたが、それに反し受け止めることに成功した。これにはもちろんタネがある。

《双天牙月》はその異形さ、長大さゆえ片手で扱わざるを得ない。実際甲龍は片手でバトンを回すように扱っていた。回転させることで威力を増大させるためだ。ISのパワーアシスト（片手）、《双天牙月》の重量、回転力によって威力が得られる。

一方白式は全身のパワーアシストを使い受け流す構えだった。全身と片手のパワーアシストの違いに加え、十全な力を伝えることをさせなかったゆえ受け止めることができたのだ。それでも受け流せなかったのは鳳さんの実力の高さといったところか。

だがここで鏢競合いに持っていったのは悪手だった。

何度も言うように―《双天牙月》は長大かつ重量がある武器である。

重量系の武器は振りかぶり速度を乗せる必要がある。《双天牙月》は振りかぶる代わりに回転させることで速度を出していた。

それを止めてしまえば重量武器は取り回しのしにくいナマクラへとかわってしまう。

そこを小回りのきく白式に攻められれば防戦一方になってしまう。

「普段だったらあそこはわざと受け流されて少しでも速度を残して次につなげていたんだろうね。だけど頭に血が上って僅かに判断力が鈍ったのかな？」

それでもさすがは代表候補生というべきか。

僅かな隙をついて一夏君を振り払い距離をとることに成功する。そのなかで、肩部のアーマーが開き中心の球体を露出させる。

あれが中国の第三世代空間圧作用兵器・衝撃砲―《龍咆》か。

白式との距離は遠過ぎもなければ近くもない、絶妙な距離だった。多少のウェイトがある兵器らしいが砲身や砲弾が見えなければ回

避は困難。打ち出した後の大気の流れを計測するぐらいしかなく、あの間合いではそれも難しいだろう。

「これはいいのもらうかな」

思わず漏らした俺の予測は覆された。

一夏君はまるで砲身が見えているかのように僅かな動作だけで龍砲をかわし、動揺する鳳さんに斬りかかった。

雪片式型は僅かにかする程度しか当たらなかつたが、白式にはそれだけでも大ダメージを与える能力がある。

バリアー無効化攻撃―《零落白夜》

直撃する瞬間に―《零落白夜》の光が一瞬だけ見え、また消えた。

「デユノア、あの一―《零落白夜》はお前たちの訓練成果か？」

「はい。今日までの訓練は大きく分けて3つに分類できます。近接格闘、機動、一―《零落白夜》の使用訓練です」

「一―《零落白夜》はもろ刃の剣だ。発動時間は短ければ短いほどいい。あの刹那のタイミングだけの起動など私ですら長い訓練が必要だったというのに……」

多分イメージトレーニングの成果だと思う。

部屋のテレビで千冬先生のモンド・グロツソの映像を何度も見直していたからな。

「それにしてもよく避けましたわね。砲身すら見えない集束砲ですの」

「オルコットさんも今日の戦略を知らないのか？」

「ええ、二人とも本番まで秘密といって教えてくれませんでしたの」

あの回避は俺も気になっていたところだ。

一夏君は衝撃が《・》発射される《・・・》前には動き始めているように見えた。

どうやっているんだあれ？

「サーモグラフィだよ」

その言葉と龍咆の理論を照らし合わせることで一夏君が行っていることが推測できた。

なるほどな。面白い発想だ。

「熱源探知ですの？」

「そう。龍咆は空間に圧力をかけて砲身を生成する。ということは周りの大気も一緒に圧縮されるっていうことだよ。大気中に存在するエネルギーの総量は圧縮されても変わらないから、圧縮される部分は温度が上昇する。それをISのハイパーセンサーで感知すれば砲身の位置は推測できる。その砲身の位置と肩のアンロック・ユニットとの直線上を避けるようにすれば直撃はまず食らわない」

「なるほど。言われてみればそうですね」

言うぶんには簡単そうだがやるのはかなり難易度が高いな。

反射神経は言わずもがなだし、いくら多少のタメがあるとはいえ一瞬で判断しなければああもきれいには避けられないだろう。

一夏君もやはりそういう要素を持って生まれてきたのか……

「なによりこの数週間、織斑くんには徹底的に近接格闘を叩きこんだ。単純な近接格闘の訓練密度なら代表候補生以上といっても過言じゃないよ」

画面の中では凰さんが中距離戦をあきらめ、再び一夏君と切り結んでいた。

速度で勝る白式に甲龍は攻撃をするたびに追いつかれていくことを悟ったのだろう。

「凰さんもさすがは代表候補生といったところかな。もう冷静になって建て直している。あとはどうなるか運次第かな」

一撃与えたことで一夏君に勝ちの芽が出てきた。

俺たちは大番狂わせの予感を感じながら勝負の行方を見守っていた。

アリーナ上空から乱入者が現れるまでは

アリーナのシールドを貫通し地面へと衝突したソレによりもうもうと土煙があがる。

それが晴れると乱入者の姿があらわになる。

ソレはISだった。

全身装甲、異常な手の長さ、センサーレンズの並んだ頭部など普通のISとはほど遠い姿をしているそれは一夏君たちへと攻撃を加え始めた。

コマのように腕を回しながらビームを放ったり特定の行動を繰り返す。

返し一夏君たちを追い詰める。

それを見た千冬先生が矢継ぎ早に指示を出す。

「アル先生は政府に緊急事態発生を連絡。山田先生は教員による突入部隊を編成。私はこれからアリーナの観客席へと向かい来賓と生徒の誘導を行う」

「織斑先生待つてください。これを見てください」

そういつてディスプレイを示す。そこに書かれていた表示を見て千冬先生の表情にいらだちが浮かぶ。

「このアリーナ全体がハッキングされているということか」

「はい。遮断シールドのレベルは4、各扉もロックされた状態になっています。通信系のシステムは無事のようにです」

一瞬の黙考ののち

「先ほどの指示を変更する。山田先生はここから政府に連絡。私は突入部隊の編成を指示。アル先生は整備科の教員と3年のシステムを専攻している生徒とともにこのアリーナのシステムを掌握しなすこと。観客の避難を最優先とする」

「織斑くんたちはどうするんですか!？」

「一夏たちには囿をしてもらおう。逃げ道がない以上仕方がない。シールドエネルギーも万全といい難いが回避と防御に専念させてくれ」

白式は自身の能力での消費が激しい機体だ。

甲龍は奇襲で一度一《零落白夜》を当てられている。

共にシールドを抜いて乱入できるような機体との戦闘は命にかかわる。

「そんな！ 織斑くんのワンオフ・アビリティーならシールドを切り裂いて避難も可能なはずです」

「それをした場合、あの機体は何をするかわからん。このハッキングはあの機体が行っているとみていいだろう。シールドを切られ観客に被害が及ぶ可能性もある。攻撃をした場合も同様だな。第一あの機体はシールドを貫通してきている。シールドの外に逃げても追われるのがオチだろう」

「ですが「落ちつけ。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」　あの先生それ塩ですけど……」

「なぜ、塩があるんだ？」

古代ゾ　ト人用か？

「やっぱり弟さんのことが心配なんです。だからそんなミスを……」

「山田先生どうぞ」

「えっ、それって塩が入ってるやつじゃ」

「どうぞ一気に飲むといい」

一応ダイエット効果はあるらしいですよ、塩コーヒー。

「あのバカなら大丈夫だろう。先程篠ノ之も言っていたがやるときはやる奴だ」

なんかコントやプラコンをやっているがそんなことは無視して俺は電話をかける。

「三嶋だな？ 今寮か？ ああそつだ。第2アリーナがハッキングされてる。小曾川と鷹月、それに高藤陀連れて整備室行って、そこ

からネットワーク介してどれでもいいからアリーナのピット入り口の制御を取り戻せ。観客席側は俺がやるからそこには触れるな」

整備科の委員長ともいえる奴に連絡を入れる。

今名前を挙げた連中は整備科システム面のエースたちだ。

おそらくは制御を取り戻せないでも手も足も出ないなんてことにはならないはずだ。

観客席のドア制御システムにハッキングをかけながら考えるのはあの乱入者のことだ。

ISを保有しているテロリストって言えばまず思いつくのは『亡国機業』だ。

だが今回の襲撃であいつらにうまみがあるだろうか？

IS学園を襲撃できるだけの能力があるというアピールか？

それなら秘密裏に侵入し訓練機を強奪したほうがまだ建設的だと思う。

それに一機だけというのも気になる。

この学園には専用機を含めれば30近いISが存在する。

どれだけ高性能なISでも数の暴力に勝つのは難しい。

これでは捨て駒のような

「あん？ 捨て駒？」

この世界最高の戦力たるISを捨て駒にできる人物は一人しかない。

だがだとしたら奴はなぜ襲撃してきた？

その答えが出ないまま観客席の扉を開閉するプログラムのコントロールを取り戻すことができた。

急にあげては観客が殺到し事故が起こるだろうから織斑先生にアナウンスで観客を落ち着かせながら誘導をしてもらう。

観客が徐々にいなくなる様子を見ていると先ほど電話をかけた生徒から折り返しのコールが鳴った。

「先生！こちら側はさっきまで順調だったんですが、いきなりこのパソコン自体にハッキングがかけられてもう持ちません！」

「ちっ！しかたない。そのパソコンぶっ壊せ」

「ええっ！そんなことしていいんですか！？」

「そのパソコンに何が仕掛けられたかわからん。下手に残しとして次にハッキングされる時の足がかりにでもされたらかなわない。今だって他のパソコンに被害が広がりかけてる可能性がある。ぶっ壊したほうがいろいろ被害が少ない。責任は俺が持つ。完全にぶっ壊せ」

さっきの手ごたえからすると俺が呼び出したメンツがいれば十分に対応できたはずだ。それができなくなったということは、途中からハッキングの方法を変えたということ。

俺がやった時は機械的な反応が返ってきていたからおそらくはあのプログラムが組まれていただけだったのに対して、あいつらのほうは直接人間がハッキングしてきたのだろう。

あの部屋のパソコンには俺特製のファイヤーウォールがインストールされていた。

それを破り、かつあいつらがそろっていながら逆にやられるってことはやっぱりあのくそ女か！

だがなぜだ？

あの女はなぜ今回こんなことをした？

なぜ一夏君を襲う？

なぜ観客席は自由にさせながらも、アリーナ入り口は守りきろうとする？

ぐるぐると回る思考が一つの答えを導き出した。

だがこんなことが理由なのか？

一夏君の公式デビューに箔をつけるためだなどというふざけ過ぎた理由が！

観客はいなくてもどういったことが起こったかはデータとして残るだろう。

アリーナ入り口を守っているのは余計な横槍を入れさせないためか。

そしてあの女が襲撃犯であるならばあのISの異常な形状や、まるで条件反射のような行動を繰り返しているのもうなずける。

おそらくあのISは何らかの方法で外部から操作、もしくは独立起動しているのだろう。ISコアの本質さえわかっていればそういつたこともできなくはない。

だがそうなると心配なのは鳳さんだ。

奴の目的は乱入者を一夏君に破壊させること。

自分を攻撃させるために鳳さんに危害を加え、織斑くんを逆上させることぐらいしかねない。

「みんなちよつといいか」

最悪の状況を防ぐための一手を打とう

手を打った俺はひたすら通信を待っていた。

もう画面の中で一夏君たちは疲労困憊の体を示している。

観客の避難が完了してから攻撃も視野に入れたがマルチプルエネルギーの少なさから断念した。

シールドエネルギーも残り少なく下手をすれば機能停止を起こしかねない。

俺に打てる手は打ちつくし、刻一刻と時間が過ぎていく中で俺にはもう祈るだけしかできなかった。

『着いたよ!!』

その一報が織斑くんたちが無事なうちに届いたことを感謝した。

「それじゃあ突入準備をしろ。行くぞ 3、2、1、行け！」

カウンタダウンと同時に遮断シールドが消滅する。

あのバカ女が俺のしたことに気がついてコントロールを奪いに来るがもう遅い。

俺が奪ったのは扉のコントロールでも遮断シールドのコントロールでもなく、遮断シールドひいてはこのアリーナ全体のエネルギー供給ラインのコントロールだ。エネルギー供給ラインをストップさせれば観客席からアリーナ内に突入することができる。

そしてコントロールを奪われ再びシールドが張られたところにはすでに《ロンド・オアラジュー》と《ブルー・ティアーズ》はアリーナ内に入り込んでいた。

あのときみんなに話したのはシャルとオルコットさんをアリーナへと送り込む手段だった。

『おそらく今回の襲撃犯のハッキング技術は俺を大きく上回っている。だが教員を突入させるために扉のコントロールを奪おうとしているように見せかけながら、隙を見て観客席のシールドエネルギー供給を一時的にストップさせることぐらいならできるでしょう。そこからこの二人を送り込みます』

『それならば突入部隊を移動させたほうが……』

『それはだめだ。監視カメラの映像も傍受されていることでしょう。へたに教員を動かせばこちらの狙いに気付かれる恐れがある』

『教員を囮に生徒を突入させるということか』

『……それしか方法がないと思います』

『……デュノア、オルコット。今回のこの作戦は命がかかることだろう。それでもやってくれるだろうか』

『当然です』

『もちろんですわ』

『よし！ では作戦は先ほどアル先生が発案したものとする。各自迅速な行動をとるように！ 以上だ』

『……シャル』

『なに？ アル』

『No.4と5の使用を許可してやる。だから怪我しないで帰ってこい』

『！ うん……』

一応監視カメラで気付かれないように三嶋たちにダミー映像を流させたりもした。

今度何か奢ってやろう。

行けシャル！ あのふざけたバカ女の茶番劇をぶち壊してやれ！

シャルが今にも鳳さんにとどめを刺さんとしていたビーム砲撃を《ジン》で防ぎ、オルコットさんが《ブルー・ティアーズ》で乱入者を撃ちぬかんとする。

「さあ、ここからはわたくしたちが相手ですよ」

「私の友達に手を出したことを後悔してもらおうかな！」

第12話 クラス対抗戦 前篇（後書き）

クラス代表決定戦の時やまや忘れてた（汗）

鈴は決して弱くありません。

ただ本作の一夏君が原作より強くなっていただけです。

一夏はシャルの指導のもと順調に魔改造一夏への道を歩んでおります。

空気の圧縮云々はボイル・シャルルの法則というものです。

皆様も中学校の実験でやったのではないのでしょうか？

フラスコの中から空気を抜くことで結露やもやを発生させるという実験があつたと思います。やったことなくても教科書のどこかには書かれていたはずですよ。あれは逆に空気を膨張させることで内部の温度を下げているわけです。

（多分理論は間違っていないはず……）

それとちよつと重要なアンケートを活動報告のほうで行っています。詳しくはIS福音のコア出張版で。

よろしければ投票していつてください。

追記

活動報告にはログインしている人しか書き込めないようなのでアカウトを持っていない人はこの作品の感想欄にアンケートを答えていただいても結構です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3579v/>

IS 福音のコア

2011年11月18日00時18分発行